JICA中部 2021年度 教師国内研修（多文化共生）報告書

主催： 独立行政法人国際協力機構 中部センター（JICA中部）

後援：愛知県教育委員会、岐阜県教育委員会、
三重県教育委員会、静岡県教育委員会、
名古屋市教育委員会、静岡市教育委員会、浜松市教育委員会

運営委託先：特定非営利活動法人 NIED・国際理解教育センター

2021 年度 教師国内研修（多文化共生）報告書

目　次

フィールドワークで印象に残った 1 枚の写真

Ⅰ．教師国内研修の概要 ---------- 1

1 ● 目的とねらい
2 ● 研修の日程および内容
3 ● フィールドワークの日程・訪問先・内容
4 ● 研修の受講者

Ⅱ．フィールドワーク前後の国内研修 ---------- 5

5 ● 事前研修
9 ● 事後研修①

Ⅲ．フィールドワークの様子と受講者の学び ---------- 12

12 ● 7 月 31 日（土）浜松：スケジュール
13 ● 8 月 1 日（日）ブラジル・名古屋：スケジュール
14 ● ① セメンチーニャ
14 ● ② COLORS
15 ● ③ IIEC
16 ● ④ 浜松国際交流協会
14 ● ⑤ ブラジル日系社会コミュニティ
17 ● ⑥ 外国人ヘルプライン東海 代表後藤美樹
18 ● 9 月 19 日（日）刈谷：スケジュール
19 ● ⑦ ワールド･スマイル･ガーデン一ツ木
19 ● ⑧ 一ツ木自治会会長＆刈谷市役所市民協働課
20 ● ⑨ フィリピン人コミュニティ SBK
21 ● 10 月 2 日（土）三重白山：スケジュール
22 ● ⑩ ゲストハウスイロンゴ 代表倉田麻里
22 ● ⑪ フィリピン料理及び外国人有志
23 ● ⑫ NPO 法人 DIFAR
23 ● ⑬ Wild Art YESE! 代表 YUKO
24 ● ⑭ WELCOME 丹羽智佳子、中村真央
24 ● ⑮ インド料理体験及び Landing in HAKUSAN 有志
26 ● 10 月 16 日（土）知立：スケジュール
27 ● ⑯ 外国人集住地区「昭和地区」
27 ● ⑰ 地域住民団体＆知立市福祉課
28 ● ⑱ 活動に参加している外国人住民
28 ● ⑲ 昭和みんなの音楽室

Ⅳ．フィールドワーク後の報告 ---------- 30

30 ● フィールドワーク報告書
30 ● １．フィールドワークに対する各自の目的とその達成度
32 ● ２．柱１「日本の中の世界に肯定的に出会う」観点から学んだこと
34 ● ３．柱２「日本の中の世界との同一性やつながりに気づく」観点から学んだこと
37 ● ４．柱３「多文化共生の課題について共に考え・共に越える」観点から学んだこと
40 ● 中間会合
40 ● 事後研修②
40 ● 実践報告フォーラムでの報告

Ⅴ．実践報告書 ---------- 42

42 ● 実践報告書の内容一覧
43 ● 稲垣 裕子：外国からやってきた転校生の W くん~
48 ● 大島 俊介：わたしたちの『幸せ』を見つけよう～多文化共生編～
53 ● 沖 久美子：ミッション、言葉の壁をこえろ！
58 ● 加藤 奏太：「私」と「日本」とのつながり～日本語で表現してみよう～
63 ● 久米 達哉：World Smile Project
68 ● 柴田 英子：Live Together
73 ● 野々山 尚志：みんなで創る Happy Town～持続可能な多文化共生のまち～
78 ● 松田 翔伍：YES WE CAN ～今日から私は～
83 ● 山本 孝次：お悩み解決します！～その時、相談員は動いた～
88 ● 神谷 樹：かんがえよう！「幸せな生活」に必要なこと

Ⅵ．研修全体のふりかえり・評価 ---------- 93

93 ● 研修への期待と満足度について
93 ● 研修を受けた自分自身の意識の変化について
94 ● 多文化共生に係る教育の実践について
96 ● 学習者の変化や周りへの波及効果ついて
97 ● 全体を通して

フィールドワークで印象に残った1枚の写真集　1／2

● 沖　久美子

「ポルトガル語の手作りカレンダー」

セメンチーニャの方々が手作りしたポルトガル語の布製カレンダー。ポルトガル語のカレンダーを手作りした先生方のあたたかさにふれながら、日付の感覚を身につけることができる。

● 大島　俊介

「理想の共生社会を体感！」

料理を通して、多文化の理解を図った。言葉の違いから満足にコミュニケーションはできなくても、笑顔でやり取りができる不思議な空間であった。料理は多文化共生の第一歩であると心から思う瞬間であった。

● 柴田　英子

「外国にルーツを持つ子どものために」

自分にしかできない、自分だからこそできる!マイノリティーは、マイナスではない!と自分の置かれた環境をポジティブに捉え、外国にルーツを持つ子どもの将来を支えている COLORS から大切なことを教えてもらいました。

● 野々山　尚志

「みんな同じ地域に住む人だから」

刈谷市一ツ木町にあるワールド・スマイル・カーデン。同じ地域に住む人が、国籍、言語、文化関係なく、共に農作業を行うコミュニティガーデン。同じ地域に住む人たちがあいさつのできる関係になれるステキな活動。

● 松田　翔伍

「多文化共生を学ぶ場所」

多文化共生の精神は、外国の方と関わることでしか芽生えない。ワールド・スマイル・ガーデンに来れば違った文化に触れることができる。まさに、教育の場である。

● 久米　達哉

「おいしくなーれ！！」

初めて一からのカレー作り。普段使用するカレールーは使いませんでした。使う材料を見て「こんなものからできるんだ」と驚きの連続。一緒に作業を行うことで自然に会話も生まれました。新たな発見ができました。

フィールドワークで印象に残った1枚の写真集　2／2

● 加藤　奏太

「共に働くことで」

同じ作業をすることで、自然に仲間になれる。共に生きることにつながる。

● 山本　孝次

「できるっかなあ？」

刈谷市でフィリピン人コミュニティ SBK のみなさんからバンブーダンスを教えてもらった。タン、タン、パン、タン、タン、パン、…。竹のリズムが気持ちよい。タン、タン、パン、タン、タン、パン、…。さあ、いくぞー！

● 神谷　樹

「多文化共生ではなく」

知立団地で、地域の様々な人達を巻き込んだイベントなどを企画実行している奥村さん。多文化共生を考えるのではなく、みんなで何かをしようと思ったらそこにいる人たちのことを考えるのは当たり前だという言葉が印象的でした。

● 稲垣　裕子

「インド出身 sai さんの食前の祈り」

インド料理の食事を共にした 10 月 2 日は特別な日、インドの英雄ガンジーの誕生日だった。インドの人々は大切な人に贈り物をするその日、世界中の人を思う愛と感謝に満ちた sai さんの祈りは強く心に響いた。

Ⅰ．教師国内研修の概要

● 目的とねらい

「持続可能な社会の創り手の育成」への貢献をねらいとし、次の２点を本研修の目的としている。

（1）開発教育・国際理解教育の実践と裾野拡大に貢献する意欲のある教員が、日本国内の多文化共生に取り組んでいる現場のフィールドワークや事前・事後の研修を通じ、多文化共生の現状・課題、地域での関係性の構築や共生の工夫を知り、課題解決のために必要な事を考えること。さらには開発教育・国際理解教育の意義について理解を深めること。

（2）参加者が、研修成果を活かした学校での授業実践を通じ、「持続可能な社会の創り手」としての児童・生徒の育成を行うこと、また、汎用性のある学習指導案の作成などの取り組みを通じて他の教員等と共に開発教育・国際理解教育の普及に寄与すること。

本研修の上記の目的を踏まえ、日本国内の多文化共生に取り組んでいる現場のフィールドワーク、および各国内研修の全体のねらいを次のとおり設定し、実施した。

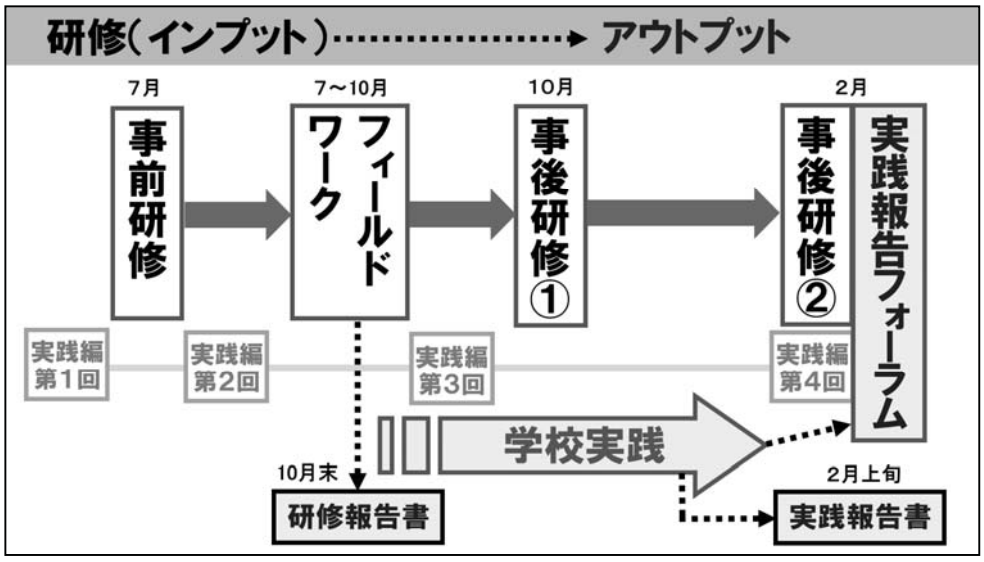
① 日本の中にある世界と、地域で共に生きる在住外国人の方々と肯定的に出会う。
② 日本の中にある世界と在住外国人の方々と自分たちとのつながりに関する理解を深める。
③ 地域における多文化共生の現状課題を知り、課題解決に必要なことや役立つことを調べ考える。
④ その経験を「足下から多文化共生を実現するための教材」にし、現場における開発教育・国際理解教育の実践に活かす。
⑤ 現場における開発教育・国際理解教育の実践の成果と課題を基に、汎用的なプログラムを作成し、他の受講者および一般に向けて報告・共有する。

● 研修の日程および内容

各国内研修およびフィールドワークの日程および内容は、下表のとおり実施した。
なお、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、８月～10 月の日程を当初の予定から変更した。

回	日時	内容
事前研修	7 月 3 日（土）13：00～17：00 7 月 4 日（日）10：00～16：00	•本研修の概要､訪問先の説明 •多文化共生に関する基礎的知識の共有 •研修目標の共有、情報収集・交流の準備、役割分担
フィールドワーク	7 月 31 日（土）13：00～19：00 ～8 月 1 日（日）7：00～15:30 9 月 19 日（日）8：50～16：10 10 月 2 日（土）8：00～20：40 10 月 16 日（土）10：40～17：40	•東海地方の多文化共生の現場体験 •在住外国人との意見交換 •海外（ブラジル）の日系人とのオンライン意見交換 •多文化共生に関する現状と課題、取り組み、可能性に関するレクチャー •フィールドワークのふり返り、学び合い
事後研修 ①	10 月 30 日（土）11：00～17：00 10 月 31 日（日）10：00～15：00	•現地研修の気づきや素材の教材化 •上記教材を使った学習者主体の授業案の作成
10 月～2 月：各自、学校の授業などで実践！ 11 月 13 日（土）、1 月 22 日（土）10：00～17：00（自由参加・有志） フィールドワーク報告の準備、フォーラムでのワークショップ提供検討、実践の相談		
事後研修 ②	2 月 26 日（土）10：00～17：00	•実践の内容、成果と課題の共有 •フォーラムでの報告の準備
実践報告フォーラム	2 月 27 日（日) 10：00～17：30	•実践の報告（ポスターセッション） •有志チームによる実践体験ワークショップ •教師国内研修報告

※事後研修②と実践報告フォーラムは、開発教育指導者研修（実践編）受講者と合同で実施



● フィールドワークの日程・訪問先・内容

４回（第１回は２日連続）に分けて、フィールドワークを下表のとおり実施した。

月日（曜）	地域	訪問団体・内容
7/31（土）	静岡県浜松市	8:30 名古屋駅集合 ① セメンチーニャ（視察等1.5h：継承語としてのポルトガル語教室（就学前）） ② COLORS （懇談1h：外国にルーツを持つ若者としての活動） ③ IIEC（視察等1.5h：中･高校受験生向け学習支援、ポルトガル語講座（小学生）） ④ 浜松国際交流協会（講義1.5h：在住外国人の状況と多文化共生の取組） 18:30 JICA中部着（泊）
8/1（日）	ブラジル JICA中部	7:00 JICA中部 開始 ⑤ ブラジル日系社会コミュニティ（対談2h：日本人移住者の海外での多文化共生） ⑥ 外国人ヘルプライン東海 代表後藤美樹（講義2h：在住外国人の現状と支援） ★ フィールドワークの振り返りミーティング 1.5h 15:30 JICA中部 解散
9/19（日）	愛知県刈谷市	8:50 名鉄一ツ木駅集合 ⑦ ワールド･スマイル･ガーデン一ツ木（体験1h：地域の多文化共生農園） ⑧ 一ツ木自治会会長＆刈谷市役所市民協働課（講義1h：共生の地域づくり） ⑨ フィリピン人コミュニティSBK（体験・懇談1.5h：バンブーダンス・交流） ★ フィールドワークの振り返りミーティング 1.5h 17:00 現地解散
10/2（土）	三重県津市白山町	8:00 名古屋駅集合 ⑩ ゲストハウスイロンゴ 代表倉田麻里（講義1h：国際協力から地域活性化へ） ⑪ フィリピン料理及び外国人有志（食事・懇談1h） ⑫ NPO法人DIFAR（講義等1h：ボリビア支援NGOの地域活動＆現地オンライン） ⑬ Wild Art YESE! 代表YUKO（体験1h：アートを通した多文化共生の場づくり） ⑭ WELCOME 代表丹羽智佳子（講義1h：外国人相談窓口から見えてきたこと） ⑮ インド料理体験及びLanding in HAKUSAN有志（体験・懇談2h） 19:00 現地解散
10/16（土）	愛知県知立市	11:00 名鉄牛田駅集合 ⑯-1 外国人集住地区「昭和地区」１（散策・懇談2h：知立団地・ブラジル料理） ⑰ 地域住民団体＆知立市福祉課（講義1.5h：昭和未来会議とアクションプロジェクト） ⑱ 活動に参加している外国人住民（講義0.5h：活動への思い） ⑲ 昭和みんなの音楽室（体験0.5h：外国人・日本人住民による音楽演奏） ⑯-2 外国人集住地区「昭和地区」２（散策1h：スーパー・もやいこ農園） ★ フィールドワークの振り返りミーティング 1.0h 17:30 現地解散

研修の受講者

(1) 対象

国公立・私立の小学校、中学校、義務教育学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校、高等専門学校の教員（研修後、継続的に児童・生徒への開発教育/国際理解教育を実践できる立場にある教員）

また本研修の目的を踏まえ、以下の条件をいずれかでも満たしている教員を推奨する。

・JICA が実施する各種研修への参加経験を有する教員または当該年度参加予定のある教員
・既に開発教育/国際理解教育の授業実践経験を持つ教員
・教務主任や各種研究会への所属者など、本研修の成果を広く他の教員にも共有できる立場にある教員

(2) 受講者

選考の結果、受講した者は、以下のとおりである。

教師国内研修受講者

No.	名前	所属先・教科・学年	備考
1	いながき ひろこ 稲垣 裕子	松阪市立鎌田中学校 英語・中２	
2	おおしま しゅんすけ 大島 俊介	津島市立東小学校 全教科・小５	
3	おき くみこ 沖 久美子	弥富市立弥生小学校 特別支援学級１・３・４年	
4	かとう そうた 加藤 奏太	江西国際学園 日本語・小１～５	
5	くめ たつや 久米 達哉	弥富市立弥富北中学校 英語・中３	
6	しばた えいこ 柴田 英子	一宮市立大和西小学校 全教科・小５	
7	どばし まり 土橋 真里	静岡県立富士東高等学校 英語・高１	8月まで参加
8	ののやま たかし 野々山 尚志	東郷町立高嶺小学校 校務主任・理科・小５・６	
9	まつだ しょうご 松田 翔伍	名古屋市立御器所小学校 全教科・小５	
10	やまもと こうじ 山本 孝次	愛知県立刈谷北高等学校 国際理解・英語・高３	
11	かみや いつき 神谷 樹	エスコーラ・ネクター （ブラジル学校）	8月から参加

Ⅱ．フィールドワーク前後の国内研修

● 事前研修　7月3日(土)13:00～17:00、4日(日)10:00～16:00

＜ねらい＞

① 本研修の目的、概要、スケジュールを確認する。
② 多文化共生に関する基礎知識を得て、多文化共生の必要性や課題を理解する。
③ 開発教育・国際理解教育のテーマの一つである「多文化共生」のイメージをもつ。
④ 訪問団体や活動の情報を共有し、教材作りの素材として何を収集してくるか考える。

＜プログラム＞

■ １日目：７月３日（土）

時刻	内 容	講師等
13:00	１．開会 （1）主催者あいさつ　（2）開発教育支援事業紹介　（3）スタッフ紹介	JICA 江口
13:15	２．教師国内研修と事前研修の目的・内容 （1）研修の全体概要と受講者への期待　（2）事前研修の目的	NIED 伊沢
13:25	３．共通基盤づくり （1）アイスブレーキング「仲間探し」「バースデイライン」「名刺で自己紹介」 （2）私たちチームで学んでくるミッション　派生図→５箇条	NIED 伊沢
14:15	４．多文化共生系アクティビティの体験 （1）世界の多様性・私たちの多様性 ・「違っているから面白い！」＋「わたしの当たり前はあなたの当たり前？」 （2）「住む」を避ける！？ ・外国人が賃貸住宅を借りる際に起こる出来事のロールプレイ	NIED 伊沢
15:00	休憩	
15:10	５．多文化共生とは？なぜ必要？ （1）多文化共生はなぜ必要？　多文化共生を進めないとどうなる？ ・「異なる文化や価値観を否定排除する」「属性によって人に優劣をつける」「関わらず助け合わない」社会で起きること　派生図→必要性を文章化 （2）多文化共生とは何がある社会？ ・「刈谷市国際化・多文化共生推進計画」のビジョンから考える	NIED 伊沢
15:50	６．異文化と暮らす異文化で暮らす－共に生きるために役立つこと （1）町内に外国人がやってきた！いいこと VS 困ること 自分が外国で暮らすことになった！いいこと VS 困ること （2）「困ること」を超えるために役立つこと・必要なもの （3）多文化共生のビジョン　こういう現状が、こうなるといい！を描く	NIED 伊沢
16:30	７．開発教育の３つの柱と本研修の学びの視点とアクティビティ （1）ミニレクチャー	NIED 伊沢
16:40	８．在住外国人について「知っていること／知りたいこと」 （1）対比表の作成　（2）知っていることの発表・共有	NIED 伊沢
16:50	９．事務連絡など （1）１日目の振り返り　（2）事務連絡　（3）保険加入説明	NIED 川合 JICA 江口

■2日目：7月4日（日）

時刻	内 容	講師等
10:00	1．スタートアップのアイスブレーキング （1）人間知恵の輪	NIED 久世
10:15	2．講義「在住外国人の来日背景と多文化共生の課題」 （1）レクチャー（60 分） （2）質疑応答（20 分）	愛知県立大学 多文化共生研究所 神田すみれ
11:35	3．フィールドワークの訪問先と活動予定 （1）訪問先の地図確認 （2）フィールドワーク行程（案）と訪問での活動予定の説明 ・聞きながら自分の関心事をメモする	NIED 鉄井
11:55	お昼休憩（60 分）	
12:55	4．訪問先はこんなところ・こういう人々！（調べ学習） （1）５つのペアを作り、訪問先を分担 （2）資料配付とネット検索準備 （3）資料とネットを使って調べ、指定項目でアウトプット （4）全体で発表・共有、質疑応答	NIED 久世
13:55	5．フィールドワークを授業につなぐ①「集めたい素材」 （1）ペアで担当訪問先の「〇〇のために、△△を集める。」の洗い出し （2）他のペアのアイデアの付け足し	NIED 久世 受講者フォロー （鉄井、伊沢）
14:35	休憩	
14:45	6．フィールドワークを授業につなぐ②「素材集めの詳細検討」 （1）ペアで担当訪問先決め （2）担当訪問先ごとの重点的「聞きたい」「集めたい」「教材化したい」出し （3）具体的な集め方の検討（写真・動画・インタビュー・アンケート等） （4）全体で発表・共有→付け足しリクエスト （5）ペアで最終打合せ	NIED 久世 受講者フォロー （鉄井、伊沢）
15:50	7．第１回フィールドワークの確認 （1）集合場所、解散場所　（2）持ち物など	NIED 鉄井
15:55	8．最終質疑応答、事務連絡	NIED 川合

＜成果例＞

★ 私たちチームで学んでくるミッション

① 我々が楽しみます！
② 異文化について知り、互いを大切にする力を身に付ける。
③ 課題解決策を知る！
④ 現地との体験を活きた教材にする。
⑤ 子どもと共に学ぶ！
⑥ 同僚、地域など仲間を作り、増やす！
⑦ 仲間と共に、学びと実践のネットワークを広げる。
⑧ 明日の子どもの笑顔のために、多文化共生社会の実現に貢献する。
⑨ すべての子どもが自分らしく輝いて生きられるようにする。
⑩ みんなで多文化共生を体現する！

★ 受講者が考えた「多文化共生の必要性」

◇ 自分の可能性を広げ、より豊かに暮らしていくための「クッション」、「浮き輪」、「安全靴」として。

◇ 日本に住む外国出身の人たちが、母国の文化に誇りを持って、日本の中で自分の能力を発揮して生きられるようにするため。日本人は、閉鎖的な考えを改め、世界には様々な文化があり、共に生きていかなければ日本自体が国際社会で取り残されていくことを避けるため。

◇ 誰もが自分の文化や存在する意味を認められ、笑顔で暮らすことのできる社会を創っていくため。

◇ 多文化共生することで、「自分」というものを安心して出すことができ、互いに笑顔で暮らすことができるため。

◇ 誰もが自分やまわりの人を大切にして、生きることができるため。

◇ 生き心地のよい社会の実現、誰ひとり見捨てない社会にしていくため。

◇ 同じ人間同士として、手を取り合えない日々は、生きていて楽しくない。
→すべての人が理解し、共に〇〇するため。

◇ 新しい価値観を取り入れることで、生活の楽しみを得て、互いに暮らしやすくするため。

◇ 日本が色々な価値観や考え方を受け入れ、豊かで明るく楽しい社会を実現するため。

◇ 人々が違いを肯定的に認め合うことで、新しい文化を共に創り上げることができるため。
→そんな社会の方が暮らしやすいしおもしろい！

★ 訪問先ごとの調べ学習の結果、素材集めの詳細検討結果の例

7/31(土)	① セメンチーニャ
予定	【所要時間】1時間30分［10:00～11:30］ ◇継承語としてのポルトガル語教室（就学前）見学 ◇柳沢クリスチーナさんとの対話
受講者整理ポイント	◇セメンチーニャ=小さな種 ◇指導者になるブラジル人６人 ◇ブラジルルーツの子ども達に、継承語としてのポルトガル語を伝えられる指導者の育成を行っている。 ◇継承語は、親子のコミュニケーションのため

区 分	柱	ねらいと内容	方 法
収集素材（上位3つ）	1	□ ブラジル、母国を大切にする想いを知るために、事例を聞く。 □ ブラジルという国をより深く理解するために、サッカーとサンバ以外のブラジル（人）の誇りを聞く。	インタビュー
	1,3	□ 継承語の大切を知るために、柳沢クリスチーナさんに活動の動機やそれ以前の苦労、やりがいについて聞く。	インタビュー
	3	□ 在住外国人の子ども達の困った感を共有し、みんなで心を寄り添わせていくために、日本の学校で困ったことを聞く。（子ども、保護者）	インタビュー
収集素材（その他）	□ 継承語の大切さを知るために、ブラジル人親子に話しを聞く。		
	□ 多文化間の人と人をつなぐため、コミュニケーションの進め方やカリキュラムを学び、汎用できるものをつかむ。		
	□ 活動の意義をより深く理解するために、もし継承が途絶えてしまったことに関するエピソードや状況に対して、話しを聞く。		
	□ ポルトガル語を教える教材を知るために、教材を実際に見せてもらう。		
	□		
	【共通質問項目】外国籍で困ったこと・良かったこと、大切にしているもの、今後の夢		

※ 柱1…肯定的に出会う、柱2…つながりと同一性の理解、柱3…課題解決とビジョン達成

9/19(日)	⑱ ワールド・スマイル・ガーデン（体験） ⑲ 刈谷市の共生の地域づくり
前半予定	【所要時間】1時間［9:00～10:00］ ◇ワールド・スマイル・ガーデンの合同作業日の活動に参加 ◇参加している外国人や日本人に自由に声がけ
後半予定	【所要時間】1時間［10:30～11:30］ ◇ワールデンの活動の経緯、内容などについて説明 ・ワールデンーツ木副代表・ーツ木自治会会長の及川さん ・刈谷市市民協働課の加藤さん
受講者整理ポイント	◇刈谷市に在住・在勤・在活動している人が対象 ◇みんなで楽しむ！ことを重視　※運営も話し合って決める ◇野菜や花を育てる、料理や文化を紹介しあう ◇ブラジルのシュシュ（ハヤトウリ）など各国野菜も栽培

区 分	柱	ねらいと内容	方 法
収集素材（上位3つ）	1	□ 文化交流をするために、今まで扱ってきた作物や料理を知る。	写真 インタビュー
	2	□ 多様な人々で活動することで、地域にもたらされた良さを知るために、活動する人にインタビューする。	動画 インタビュー
	3	□ 様々な人に参加してもらうために、どんなことをしているか聞く。	インタビュー アンケート
収集素材（その他）	□ 何を育てているか知るために、育てている農作物の種類を聞く（写真を集める）。 □ 様々な食文化を学ぶために、一番人気の食べ物を聞く。		
	□ 食文化の違いを楽しみながら交流するうえで、大切なことは何かを知るためにインタビューする。		
	□ 持続可能な活動をしていくための工夫について聞く。		
	□ 多くの人を巻き込む方法を知るために、運営方法を聞く。		
	□ 実際に交流している日本人の層や年齢（子ども～高齢者）を知るために、交流の様子、広め方を聞く。		
	【共通質問項目】外国籍で困ったこと・良かったこと、大切にしているもの、今後の夢		

※ 柱1…肯定的に出会う、柱2…つながりと同一性の理解、柱3…課題解決とビジョン達成

＜開催の様子＞

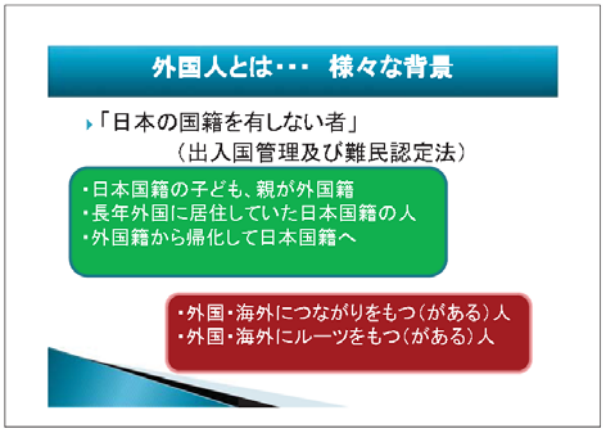
▲共通基盤づくり～私たちが担うミッション～

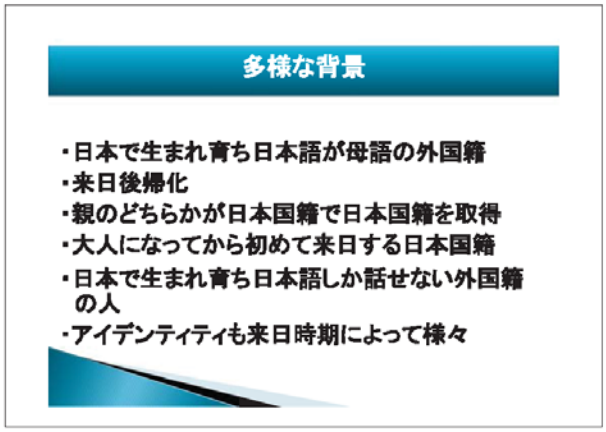
▲講義「在住外国人の来日背景と多文化共生の課題」

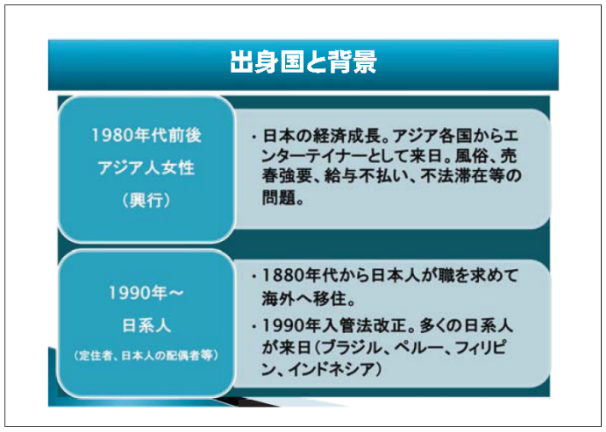
▲訪問先はこんなところ・こういう人々!(調べ学習)

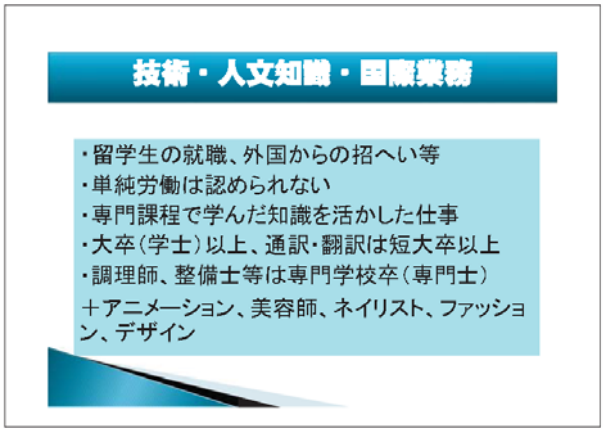
▲フィールドワークを授業につなぐ②「素材集めの詳細検討」

★ 講義のスライド内容例









● 事後研修① 10月30日(土)11:00～17:00、31日(日)10:00～15:00

＜ねらい＞

① 国内研修で集めた情報を使ったアクティビティのアイデアを共有する。

② 教師国内研修で学んだことをもとにした個人の実践アクティビティ・プログラムを作成し、評価指標の活用や相互提案などを通してより実践的な内容に深める。

③ 実践報告フォーラムでの国内研修報告、ワークショップ提供の準備を行う。

＜1日目プログラム ＞

時刻	内 容	講師等
11：00	1．あいさつと研修のねらい・スケジュールの確認	JICA 江口、NIED 久世
11：10	2．アイスブレーキング	NIED 久世
11：27	3．フィールドワークのふりかえり （1）三重白山の振り返り（地域と外国人、活動している人の想い） （2）フィールドワーク報告書「学びの３つの柱」の共有	NIED 久世
11：55	休憩（60 分）	
12：55	4．収集した現地素材の共有と活用法のアイデア出し （1）教師海外研修ガイドブック等の確認 （2）現地素材を使ったアクティビティのアイデア出し	NIED 久世
13：35	5．実践プログラム作り①「ねらいの設定」 （1）対象、実践時間数の確認 （2）子ども達と一緒に考えたいこと連想図 （3）「知る・気づく／考える・行動する」対比表 （4）プログラムのねらいの設定	NIED 久世 個別相談：鉄井、伊沢
14：15	6．実践プログラム作り②「プログラム素案の作成」 （1）プログラム全体の展開（四行詩、起承転結等）の作成 （2）プログラムの流れの作成 （3）主アクティビティにおける発問、現地素材の記述	NIED 久世 個別相談：鉄井、伊沢
15：00	休憩	
15：10	7．実践プログラム素案の自己点検評価 （1）６つの指標を使った点検評価	NIED 久世
15：20	8．実践プログラム素案の小グループ相談会 （1）３人グループで各実践プログラム素案の相互紹介、相談 （1人につき紹介５分＋相談 10 分）	NIED 久世
16：30	9．実践プログラム作り③「プログラム案のまとめ」 （1）プログラム案をまとめ、A3 用紙から模造紙へ	NIED 久世 個別相談：鉄井、伊沢
16：55	10．事務連絡 （1）フィールドワーク関連（写真・動画共有、報告書） （2）実践報告関連（フォーラム、実践報告書） （3）精算関連（立替精算の振込先銀行口座、お土産代） （4）その他	NIED 川合

＜2日目プログラム ＞

時刻	内 容	講師等
10：00	1．アイスブレーキング	NIED 久世
10：05	2．実践プログラム作り③「プログラム案のまとめ」 （1） 1日目の続きをまとめあげる	NIED 久世 個別相談：鉄井、伊沢
11：00	3．実践プログラム案の模造紙展覧会 （1）受講者全員の実践プログラム案のギャラリー方式による確認	NIED 久世
11：15	4．実践プログラムの発表＆提案会① （1）発表者：プレゼンテーション×3 人 （2）聞き手：よかった点／よりよくするための提案×3 人	NIED 久世、鉄井
11：55	休憩（60 分）	
12：55	5．実践プログラムの発表＆提案会② （1）発表者：プレゼンテーション×2 人 （2）聞き手：よかった点／よりよくするための提案×2 人	NIED 久世、鉄井
13：25	6．実践プログラム案の改善検討 （1）よかった点／提案をふまえてプログラムの改善、個別相談	NIED 久世 個別相談：鉄井、伊沢
13：50	7．実践に向けての私宣言！＆エール	NIED 久世
14：15	8．実践報告フォーラム 2022 における報告等の検討 （1） 15 分間の教師国内研修報告 （2）2 時間の実践プログラムの提供（1 チーム有志）	NIED 久世
14：50	9．事務連絡 （1）中間会合（11/13、1/22）への参加確認 （2）その他	JICA 江口、NIED 川合

★ 授業実践プログラムの６つの評価指標

◇ 開発教育・国際理解教育における「学習者の学びの３つの柱」に関する指標

指標① 柱１：学習者が、日本の中の世界・在住外国人と肯定的に出会う」学びがあるか。

指標② 柱２：学習者が、「日本の中の在住外国人との同一性やつながりに気づく」学びがあるか。

指標③ 柱３：学習者が、「多文化共生の課題について共に考え・共に越える」学びがあるか。

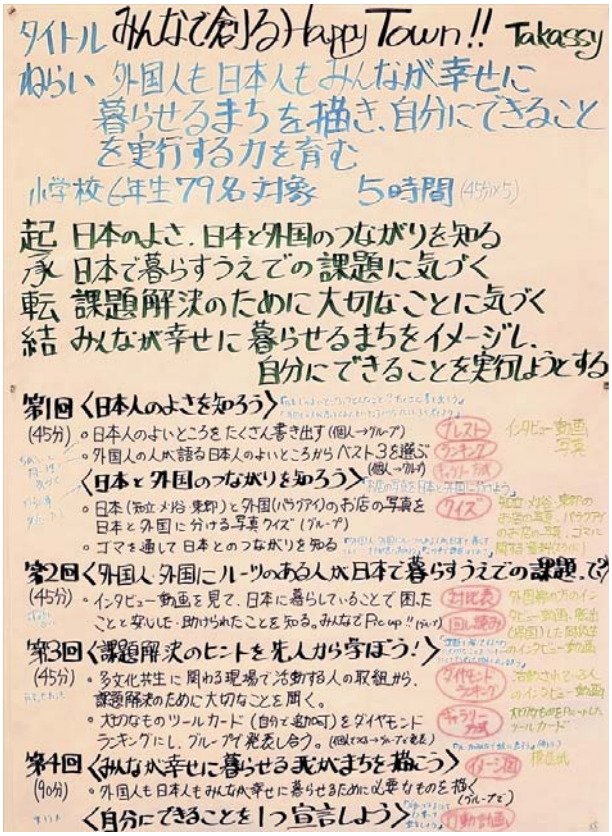
◇ 学習者主体の参加型、収集教材の活用に関する指標

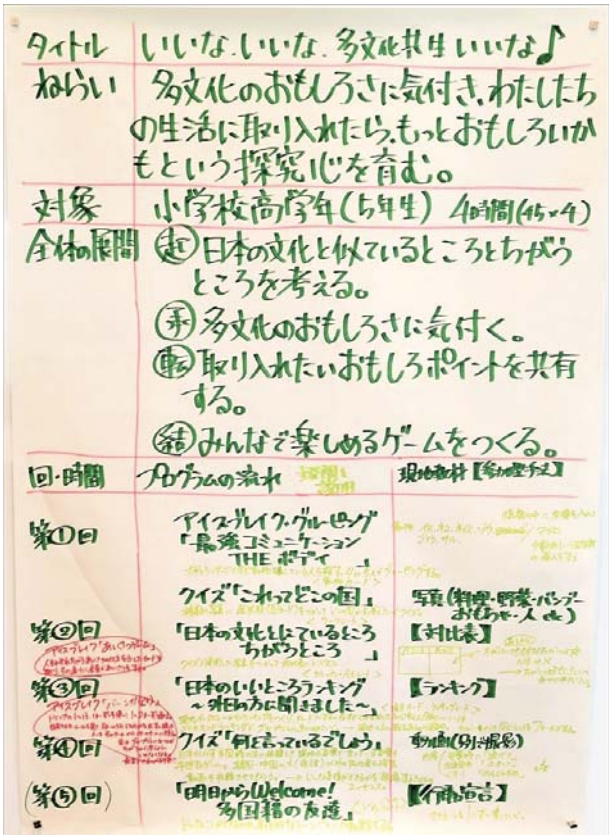
指標④ プログラムに流れがあり、気づきから行動へとつながるものとなっているか。

指標⑤ 学習者が、主体的に考え、学習者同士が学び合えるような問いかけや手法となっているか。

指標⑥ フィールドワークで収集・整理した教材が効果的に活用されているか。

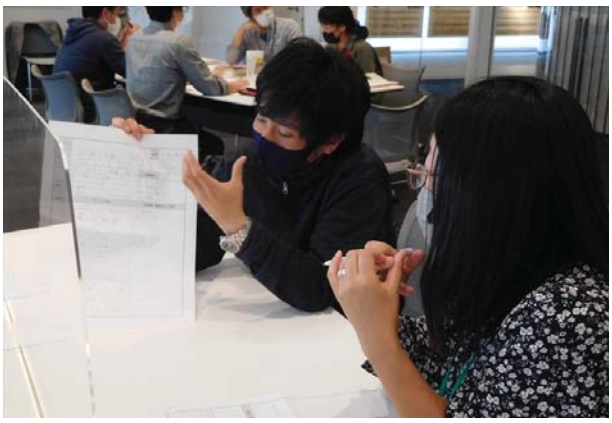
＜成果例＞　★ 授業実践プログラム例





＜開催の様子＞

▲フィールドワーク報告書「学びの3つの柱」の共有



▲実践プログラム素案の小グループ相談会

▲実践プログラムの発表&提案会

▲実践報告フォーラム 2022 における報告等の検討

Ⅲ．フィールドワークの様子と受講者の学び

7月31日(土)　浜松：訪問先 No.①～④

時 刻	スケジュール	備考(☆案内者)
08:30	名古屋駅銀の鈴前 集合	
08:43	新幹線ひかり640号東京行 乗車	◇土橋さん浜松駅改札合流
09:13	浜松駅着　→徒歩浜松駅バス停へ	◇**福島一成** 浜松デスク同行 (河合良太さん同行)
09:24	遠鉄バス9:24発36湖人見団地行 (9:34発30舘山寺町行)	
09:35	浜松学院前バス停着	
10:00 (90)	**① セメンチーニャ** @浜松学院大学 ◇継承語としてのポルトガル語教室（就学前）	★**柳沢クリスチーナ** さん
11:30	移動 →バス停へ	
11:43	遠鉄バス 11:43発 浜松駅行（11:53発 浜松駅行）	
11:52	田町バス停着　→ 徒歩5分（約400m）	
12:00	＜昼食＞ **ベトナム料理「ニエウクアン」**	バインミー予約済 (中澤純一さん同席)
12:50	移動→ザザシティへ　徒歩3分（約200m）	
13:00 (60)	**② COLORS** @ザザシティ中央館5階ここ・い～ら ◇外国にルーツを持つ若者としての活動	★**宮城ユキミ** さん
14:00 (60)	**③ IIEC** @同じ場所 ◇学習支援（中学生・高校受験） ◇継承語としてのポルトガル語（小学生）	★**杉野アドリアーナ** さん
15:00	移動→クリエート浜松へ　徒歩10分（約800m）	
15:30 (90)	**④ 浜松国際交流協会(HICE)** @クリエート浜松4階 ◇浜松市の在住外国人状況 ◇浜松市・HICEの多文化共生の取組 ◇メンタルヘルス相談や通訳スタッフの話	★**松岡真理恵** 事務局次長 ★ブラジル人専門スタッフ
17:00	移動→浜松駅へ　徒歩9分（約650m）	
17:31	新幹線ひかり519号岡山行	
18:01	名古屋駅着	◇久米達哉 帰宅
18:20	JICA中部着→チェックイン／臨時ミーティング	◆JICA中部 宿泊
19:00	解散	

■第１回フィールドワーク

8月1日(日)　ブラジル・名古屋：訪問先 No.⑤～⑥

時 刻	スケジュール	備考(☆案内者)
06:45	スタッフセミナールーム集合 ・PCなど最終調整	
07:00 (120)	**⑤ ブラジル日系社会コミュニティ** @JICA中部 **Zoom** ID: 849 8704 1487　パスコード: jica 1) はじめに…挨拶、進め方説明、参加者紹介 2) ブラジル日系移民の概要説明 3) グループディスカッション (2グループ分け) ・1回目…自由に質応答、意見交換 [20] ・2回目…テーマ：多文化共生に大切なこと[20] 4) 全体共有 5) 教材収集用インタビューセッション[15] ・素材収集ペア2人とブラジル側参加者1人 6) おわりに…受講者からお礼、挨拶 ※ JICA横浜から教員6名・スタッフ3名参加	＜ブラジル側参加者＞ ◇MATSUBARA,LEIKO サンパウロ大学文学部準教授 ◇TSUTSUMI ベレン汎アマゾニア日伯協会副会長 ◇PHILIPE YOSHIZANE 日系サポーター研修員 ◇NAKAGAWA Kyoko 心理学博士 ◇TSUNODA 修司 北伯雇用青年移住第１期 ◇マルガリータ JICAナショナルスタッフ ◇間瀬 職員
09:00	終了 ＜朝食＞JICA中部弁当→チェックアウト	
10:00 (120)	**⑥ 外国人ヘルプライン東海** @JICA中部 1) 数字にみる東海地方の外国人住民について 2) 多文化共生とは～阪神・淡路大震災の経験から 3) 相談事業とNPOの役割 4) 質疑応答、インタビュー	★後藤美樹 代表
12:00	終了 ＜昼食＞ **自由**	
13:30 (120)	**★第１回 振り返りミーティング** @JICA中部 1) 第１回フィールドワークの振り返り 2) 第２回の準備・確認 3) その他事務連絡・調整	★ファシ：久世治靖
15:30	終了→解散	

①セメンチーニャ（視察等：継承語としてのポルトガル語教室（就学前））

この団体では継承語としてのポルトガル語の知識や技能を、遊びを通して伝える活動を行なっている。授業は無理強いすることなく、子どもの「学びたい」という意欲を引き出すように教材や教具を工夫し、フェルトなどで手作りされたものがほとんどであった。また、団体の代表の柳沢クリスチーナ氏は「子どもをリスペクトして取り組むようにしている」と言っていた。何かを習得する場面では子ども自身がやりたいという意欲をもたなければ、力を身に付けることは難しい。とても大切な考え方であると感じた。

また、同氏は通訳の仕事をしている際、「お母さんとその子どもの会話を通訳してほしいと言われたことがとてもショックだった」と言っていた。日本で生まれ育った子どもの中にはポルトガル語を話せない子も少なくない。私はこの事例を聞いた時にとても衝撃を受けた。日本語を話せないことも問題だが、ポルトガル語を話せないことで子どもの生活の基盤となる家庭にも大きな影響を及ぼすことに気づいた。（久米達哉）

母国の言語や文化を大切にし、継承していきたいという主催者の思いに感銘を受けた。幼児期の継承語の指導は、パペット人形を使った言葉の学習や楽器作りを通して行われたコミュニケーション、絵本の読み聞かせといったさまざまな工夫をして行われていた。見学させてもらった教室では、子どもたちが楽しそうに学習している姿を見ることができた。

その反面、中学校卒業後の進路選択の難しさや、文化の違いからくる容姿の違い、生活習慣など、日本の学校での理解が遅れているという問題があることも知った。このことから教師に求められる姿勢がはっきりした。それは、相手に関わろうとすることである。教師側が積極的に意思疎通を図ることが大切であり、さまざまな提案を行っていくことが必要だと分かった。今後の自身の指導に生かしていきたいと考えている。（大島俊介）

②COLORS　（講義：外国にルーツを持つ若者としての活動）

COLORS とはCommunicate with Others to Learn Other Roots and Stories の頭文字から取った名前で、浜松周辺で活動する外国にルーツをもつ若者グループである。同じように外国にルーツをもつ児童生徒・若者を対象に、交流会や将来を考えるワークショップ、就職応援セミナーなどを行っている。代表の宮城ユキミさんから話を聞いた。印象に残っている言葉は、「外国にルーツをもつ子どもたちには、可能性を信じて欲しい。彼らには、こんなこともできるんだという選択肢を示すロールモデルが（たくさん）必要」というものだ。彼女らは、そうしたロールモデルになったり、ロールモデルとなる人と子どもたちをつないでいったりしていきたいと言う。子どもたちには、こうしたタテでもヨコでもないナナメの関係からアドバイスをしてくれる先輩が必要だ。親は日本での進学や就職活動のことを知らないことが多いが、COLORS のメンバーは進学や就職の際に自ら苦労したりそれを乗り越える工夫をしたりした経験を持つ。こうしたロールモデルとなる先輩が継続して現れることが多文化共生社会を大きく推進してくれるだろう。（山本孝次）

COLORS は浜松で活動する外国にルーツを持つ若者のグループである。高校に出向いて、特に外国にルーツをもつ高校生に将来について考えてもらうことを目的としたワークショップ、動画の配信などを行っている。COLORS のメンバーの代表である宮城さんは、10 歳の時にブラジルから来日し、小学校６年生のときに日本

の小学校へ通うようになった。中学へ進学したあと、高校はポルトガル語も勉強することができる日本の公立高校に進学し、自分と同じような境遇のメンバーに出会った。大学に進学し、様々な活動に関わる中で、COLORS の活動もスタートした。COLORS の活動によって、外国にルーツをもつ高校生が将来、特に就職、進学についてイメージを持つことができる。ロールモデルがいることで、自分の将来をより明確に考えることができる。そして、ロールモデルとして体験を語る外国にルーツをもつ若者にとっても、自分の経験を生かし、誰かのためになる活動に携わることができる。双方にとってすばらしい活動であり、浜松だけでなく、様々な地域にこのような活動が広がっていってほしいと思った。（沖久美子）

③IIEC
（視察等：中･高校受験生向け学習支援、ポルトガル語講座（小学生））

IIEC（International Institute of Education and Culture）は、継承語としてのポルトガル語教室や学習支援を行っている。代表の杉野アドリアーナさんの経験からこの教室は始まった。日本の学校で学ぶ自分の子どもが、うまくポルトガル語が話せなくなり、メンタルも不安定になってきたことから、ポルトガル語を子どもたちに教えることの重要性を認識し、教室を始めた。教室での学習を通して、子どもたちはブラジルの文化を知り、ポルトガル語を学び、家族とのコミュニケーションが増え、メンタルが安定する。今では多くの子どもたちが、この教室でポルトガル語を学んでいる。このような教室が地域にあることはとてもすばらしいと思う。言葉を学んだことによって親とのコミュニケーションが増えること、自分のルーツを大切に思うことができるということがすばらしいと思う。また、日本語、ポルトガル語、２つの言語を話すことができれば、視野も可能性も広がる。このような教室が様々な地域にでき、より多くの子どもたちが学ぶ機会を得ることができればと思う。（沖久美子）

継承語としてのポルトガル語だけでなく、ブラジルの文化を子どもたちに伝える場。日本生まれのブラジル人の子は、学校の友達関係の中で日本語を習得していくが、日本語を話すこと書くことの苦手な親とコミュニケーションが取りにくい、との現状があり深刻である。またアイデンティティ形成のためにも、母国語を学ぶことは大切。IIEC では中学生の学習支援も行っており、学校生活の話を聞きながら子どもたちの内面のサポートも行っている。ブラジル人であることを誇りに思い、自信を持って生きていけるように、子どもたちを支える場である。子どもたちの学習の様子を見学して、活き活きとポルトガル語で会話をしたり、歌や踊りを使って楽しく学んだりしている姿を見た。地域に住むブラジル人の子どもたちの居場所、心の内を話せる場として必要な場所、家庭や学校生活をサポートする場であることを学んだ。（稲垣裕子）

④浜松国際交流協会（講義：在住外国人の状況と多文化共生の取組）

浜松国際交流協会（HICE）は、２万５千人以上の外国人が暮らす浜松で、多文化共生のまちづくり、グローバル人材育成、市民活動支援、情報提供・収集を行っている。HICE の活動の中で特に印象に残ったことは、13 言語で相談に応じておりメンタルヘルスを含む専門的な相談もできること、複雑なケースについてはある程度の解決まで寄り添い支援を行っていること、外国人当事者の力・視点を生かすことを大切にしていることの３つである。相談に応じるだけでなく寄り添って支援を行うことで、より解決に近づくことができ

る。また、地域で活動する外国人コミュニティによる学習支援教室や外国にルーツをもつ若者グループの活動を支援することで、外国人住民のニーズをより正確に把握し、課題の解決策にアプローチすることができる。そして、このような支援は外国人住民のエンパワメントにもつながり、彼らが自信を持って活動することができるようになる。様々な可能性を持つ外国にルーツをもつ人々が、活躍する場ができるのはすばらしいことだと思った。（沖久美子）

浜松国際交流協会（HICE）は、国際交流と地域の共生社会づくりのネットワークにおける要の役割を果たしている。そしてそのネットワークを、時間という縦軸でも分野という横軸でも広げていこうとしている。HICE への訪問を通して、「つながり」が多文化共生社会へのキーワードであることを強く感じた。国際理解教育のファシリテーター養成を行い、継続的な国際理解教育を可能にしている。役所や医療機関など様々な機関と協力して活動している。新しく多文化共生社会に寄与する活動をしようとしている団体に補助金を出すなどして支援している。外国にルーツをもつ若者による外国にルーツをもつ児童生徒・若者のための活動をしている COLORS も HICE からの支援を受けて立ち上げられた団体のひとつだ。浜松国際交流協会は外国語・日本語講座を開いたり、在住外国人の相談窓口となったりしているだけではなく、その他ありとあらゆる地域コミュニティにおける共生社会づくりに関する活動をつなげたり支援したりしようとしている。多文化共生社会づくりに必要なことはどんなことか、生徒とともに考えるときにとても参考となる。（山本孝次）

⑤ブラジル日系社会コミュニティ（対談：日本人移住者の海外での多文化共生）

多くのブラジルに住む方々からの話を聞くことができ、大変貴重な経験になった。２つの文化をもっていると前向きにその状況をとらえ、過ごしていることや、日本語が離れている現状があることなど、おおよそ日本にいては知りえない状況を理解することができた。そこで過ごす方々にとって、一番過ごしやすい姿が一番いいと思う。彼らがどこで過ごそうとも、どちらでもちゃんとした所属感を得られるような温かい場づくりをすることができれば、それが多文化共生であるし、それぞれを理解し、助け合って生きるということなのではないかと思う。（加藤奏太）

「ブラジルでは、日本人、日本では外国人と言われる」この言葉が一番衝撃的であった。どちらの国に行ってものけ者にされている様子が浮かびあがってしまい、非常に心苦しくなった。このたった一つの言葉で、自分たちがいかに見た目で人を判断してしまったり、決めつけてしまっていたりしていることが分かった。ただ、良い点もあることが分かった。良い点としては、話題を周りの人がふってくれたり、ブラジルや日本、両方の文化を味わうことができたりすることが挙げられていた。

そして、共生していくうえで大切なことについては、「その地の水になれる、比較することをやめる」という言葉が印象的であった。その方の話では、自分の中にある教育されてきた文化がやはり人の心にはあり、それをとっぱらうことが大切なのではと自身の経験から話していた。当たり前という言葉を自分で使ってしまうことがあるので、その当たり前という言葉を使いたくなったら一度自分に問いかけなおすことが大切だと感じた。（柴田英子）

⑥外国人ヘルプライン東海 代表後藤美樹（講義：在住外国人の現状と支援）

代表の後藤美樹さんから話を聞いた。一番印象に残っているのは、自分たちで解決できる外国人の困りごとは限られているので、主たる解決方法は「コミュニティの社会資源とつなげる」ことなのだということだ。ここでいう社会資源は、NPO、専門機関、専門家、地域住民、外国人コミュニティ、行政機関などのことだ。困りごとの解決を阻む、あるいは社会資源とつながることを阻む「３つの壁」があることも後藤さんから学んだ。その３つの壁とは、①言葉の壁、②制度の壁、そして③心の壁である。一人の相談員が、できることには限りがある。この３つの壁のすべてを壊したり乗り越えられるように低くしたりすることはできない。困りごと解決のためには、それぞれの分野に長けた「コミュニティの社会資源」へとつなげる必要があるのだ。生徒たちには、まず心の壁を低くして、在住外国人が共に多文化共生社会を作っていくコミュニティの一員である、つまり外国人もコミュニティの大切な「社会資源」であると認識してもらいたいと思った。（山本孝次）

外国人ヘルプライン東海は、外国にルーツをもつ人々一人ひとりの基本的人権と生活が保障された差別のない社会、多様な背景をもつ人々が共に助け合って暮らせる地域社会を実現するために活動している。日本に暮らす外国にルーツをもつ人々は、言葉、制度、心の３つの壁により、彼ら自身で困り事を解決できないことがある。どうしたらいいか、どこに相談したらいいかわからず、問題が深刻化することもある。外国人ヘルプライン東海では、そのような状況に置かれている外国にルーツをもつ人々のために、通訳を派遣したり、書類の翻訳をしたり、相談に応じたりしている。相談内容は生活困窮、在留資格、離婚、仕事、住まい、ＤＶ、労働など様々だ。外国人ヘルプライン東海のように、同行して通訳をしてくれたり、書類を書く手伝いをしてくれたり、他の団体と連携して支援してくれたりする団体は少なく、外国人住民が多く暮らす愛知県にとって、必要な団体だと思う。（沖久美子）

■第２回フィールドワーク

9月19日(日)	刈谷：訪問先 No.⑦～⑨

時 刻	スケジュール	備考(☆案内者)
	8:22名鉄名古屋駅→8:43前後駅8:44→8:48着	
08:50	名鉄一ツ木駅 集合 駅→ワールデンへ（700m徒歩10分）	JICA同行：江口・神谷 NIED同行：久世・鉄井・伊沢・川合
09:00 (70)	**⑦ ワールド･スマイル･ガーデン一ツ木** ◇ワールド・スマイル・ガーデンの合同作業に参加 ◇参加している外国人や日本人に自由に声がけ	★ワールデン一ツ木副会長 **及川啓太**さん
10:10	移動 →知立駅へ（1.1km徒歩15分）	
11:31	名鉄知立駅→10:37刈谷駅着	
10:40	刈谷駅→10:50刈谷市国際プラザ（700m徒歩10分）	
11:00 (90)	**⑧ 一ツ木自治会会長＆刈谷市役所市民協働課** @刈谷市国際プラザ ◇ワールデンの活動内容 ◇ワールデン設立の経緯と市役所の役割 ◇質疑応答	★**及川啓太**さん ★刈谷市役所市民協働課 職員 **加藤祐騎**さん
12:30	＜昼食・休憩＞　各自弁当など	
13:30 (90)	**⑨ フィリピン人コミュニティ SBK** @同じ場所 ◇バンブーダンスの簡易披露と体験 ◇SBKの活動内容 ◇SBKメンバーとの交流、意見交換 (Samahan sa Barangay Kariya city)	★代表 **川口ビバリー**さん SBKメンバー５名程度 ☆通訳：**後藤美樹**さん (外国人ヘルプライン東海)
15:10 (60)	**★振り返りミーティング** @同じ場所 1) 今回フィールドワークの振り返り 2) 次回の準備・確認 3) その他事務連絡・調整	★ファシ：**久世治靖**
16:10	終了→解散	

⑦ワールド・スマイル・ガーデン一ツ木（体験：地域の多文化共生農園）

ワールド・スマイル・ガーデンでは多くの人々が楽しく活動をしている様子が印象的であった。特に、実際に活動している方は「ここに来ると清々しい気持ちになる」「みんな同じ町の住人の一人として話しやすくなった」と語っていた。ここでは、共同作業をすることで地域と外国籍の方々の触れ合いができる場となっていると感じた。また、育てている野菜についてもよく知ったものから、見たことのないものもあった。しかし、サツマイモのようによく知った食べ物でも、海外ではツルまで食べるところもあるなど、国によって状況が異なると感じた。野菜の食べ方についても共同作業の中でお互いに聞き合うことができ、自然とそれぞれの文化について知ることができるようになっていた。同時に日本人・外国籍の方々にとって、繋がりをもつために大切な場となっていると感じた。

この場ができるようになるまでには、刈谷市、NIED・国際理解教育センター、愛知県国際交流協会と様々な機関が協働していた。無理なく活動が続けられるように工夫がされており、それが継続的に取り組むことができている秘訣であると感じた。（久米達哉）

ワールド・スマイル・ガーデンの合同作業に参加した。草取りや種蒔きの作業をしながら参加している方々に話を聞いた。私は主にペルーから来た外国人の方と楽しくおしゃべりをすることができた。農作業が好きだから参加するようになったそうだ。みんなで収穫の喜びを共有したり、何かを創り上げたりする場がワールド・スマイル・ガーデンであった。合同作業後には、及川啓太さんから話を聴いた。印象的だったのは、「顔の見える、挨拶がし合える関係」を大切にされていたところであった。また、参加者は口コミで増えていくという点も興味深かった。地域活性化のためには、目の前にいる人たちとの関係を大切にすることで、人と人の輪がどんどん広がっていくのだという事例の一つであった。私は、日常的には外国人の方と関わることはほとんどない。やはり、多文化共生の精神は、関わることでしか芽生えない。ワールド・スマイル・ガーデンに来れば違った文化に触れることができる。まさに、教育の場でもあるのだ。（松田翔伍）

⑧一ツ木自治会会長＆刈谷市役所市民協働課（講義：共生の地域づくり）

多文化共生の地域づくりを行う上で大切なことを学ぶことができた。それは、活動に賛同してくれる仲間と補助金や助成金などの安定した財源である。

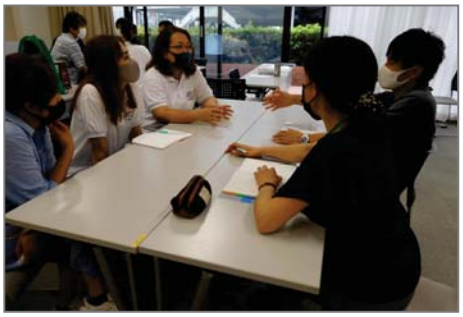
共生社会をめざすためには、自治体を含めたさまざまな団体が協力して行っていく必要がある。小さなコミュニティから少しずつ拡大していくためには、口コミなどの小さな活動が効果的である。農業体験などの活動から、多国籍の人が集まって会話できる場が作られたように、わたしの所属する地域でも、積極的に多文化共生が進んでいくことを期待している。

しかし、一番必要なのは、持続可能な財源である。多方面の方から多くの理解を得られるようにしていくことが大切である。（大島俊介）

刈谷市役所市民協働課の加藤祐騎さんから話を聞いた。刈谷市の多文化共生推進計画について、主に先導モデル地区とした一ツ木町にワールド・スマイル・ガーデン（ワールデン）を作った過程を通して、説明を聞いた。

加藤さんの話の中で一番印象に残ったのは、「市民、市、NIED・国際理解教育センター、愛知県国際交流協会のパートナーシップ」でワールデンを作り上げてきたということだ。関わっている人たちが知恵を出し合い、それぞれの特技や技術や強みを持ち寄って作ることができたのだと言う。これはまさに、SDGs のゴール 17「パートナーシップで目標を達成しよう」を実行した好事例だ。本研修で度々浮かび上がってきたキーワード「つながり」がここでも一段とはっきり姿を現した。児童生徒が多文化共生社会づくりに参加しこのパートナーシップの一員となっていくようにするには、どんな授業や体験が必要なのだろう。学校の中だけではできないことは確かだ。（山本孝次）

⑨フィリピン人コミュニティ SBK（体験･懇談：バンブーダンス・交流）



SBK の皆さんのバンブーダンスを拝見した。とても楽しそうである。私たちも踊ってみた。全く出来なかったが、なぜか笑顔になった。同じ国の人同士で集まって楽しめたり、困った時に助け合ったりすることができるコミュニティは、日本に暮らす外国人の方にとってとても大切な場所だ。そんな場所が SBK である。病気になった時に、仕事を休んでまで病院に付き添ってくれる仲間が、SBK にはいる。SBK の方との交流の時間で印象的だったことは、夢は何ですかという質問の答えだった。「自分の農地がほしい」「家と車がほしい。そしてフィリピンで商売をしたい」「日本の技術・マナーがよいところをフィリピンに持って帰りたい」「日本とフィリピンの架け橋になりたい」このように語る眼差しはとても力強いものだった。文化の違いについても多くのことを教わった。日本の学校は、厳しいイメージだが、フィリピンの学校は明るくて自由なイメージだそうだ。文化の違いは、知るだけで面白いということを体験的に学ぶことができた。（松田翔伍）

バンブーダンスを体験したが、なかなか上手に行うことができなかった。見ているだけでは簡単そうだが、意外に難しいことに気づいた。

講演の中で代表の川口ビバリーさんの困ったことに「よく日本の男性は「バカ」と言う。」とあった。フィリピンでは相手に対してそのような激しいことをいうことはしないので、来日した当初はとても衝撃を受けたということであった。一方で日本の良さには、「約束を守ること」とあった。同氏は日本がここまで世界の中で信用され、成功している秘訣はここにあるのではないかと言っていた。

今回の話を通して、日本にもフィリピンにもそれぞれよさがあることが分かった。それぞれのよさを共有し、取り入れながら創り上げていくことが、多文化共生の第一歩であることに気づいた。（久米達哉）

■第３回フィールドワーク

10月2日(土)　**三重白山：訪問先 No.⑩～⑮**

時 刻	スケジュール	備考(☆案内者)
08:00	近鉄名古屋駅 集合	◇沖、稲垣を除く
08:15	近鉄名古屋線急行・五十鈴川行 乗車	
09:39	伊勢中川駅 乗換9:44発 近鉄大阪線・東青山行	◇沖 近鉄弥富駅合流
09:57	榊原温泉口駅着　→ハッレ倭へ（徒歩15分1.3km）	◇稲垣 伊勢中川駅合流
10:30 (60)	**⑩ ゲストハウスイロンゴ** ＠ハッレ倭（以下同じ） ◇講義「国際協力から地域活性化へ」	**★倉田麻里** 代表
11:30 (90)	**⑪-1 フィリピン料理** ◇アドボ、揚げ春巻き、イナサル、バナナキューから2品と付け合わせ<昼食>	**★Harold Francisco** ハウスファザー
	⑪-2 地域に住む外国人有志 ◇座談会「地域の外国人と交流しよう」	**★亮亮さん（中国）** **★Melodyさん（フィリピン）** ↑（昼食同席）
13:00 (60)	**⑫ NPO法人 DIFAR** ◇ボリビア支援NGOによる国内地域課題への取組 ◇ボリビアにいる代表とオンライン予定	**★瀧本規久子** 事務局長 **田中**スタッフ **★瀧本里子** 代表
14:00 (60)	**⑬ Wild Art YESE!** ◇体験「アートを通した多文化共生の場づくり」	**★YUKO** 代表
15:00 (60)	**⑭ WELCOME** ◇講義「外国人相談窓口から見えてきたこと」	**★丹羽智佳子** **★中村真央**
16:00	**⑮-1 インド料理体験** ◇40分程度で完成（ダルカレーとたまごカレー）	**★Sai Suman Gubba** さん（白山町への移住者）
17:00 (120)	**⑮-2 Landing in HAKUSAN有志** ◇座談会「地域で取り組む多文化共生」	**★数人**（YUKO、丹羽、中村含む）
19:00	移動 →榊原温泉口駅へ（徒歩15分1.3km）	
19:25	榊原温泉口駅発 特急宇治山田行	
19:34	伊勢中川駅 乗換19:37特急近鉄名古屋行	
20:38	近鉄名古屋駅着　最終解散	

⑩ゲストハウスイロンゴ 代表倉田麻里（講義：国際協力から地域活性化へ）

ゲストハウスイロンゴを運営する倉田麻里さんは、フィリピンでの９年間、帰国してからの３年間の国際協力を通して、様々な気づきがあったという。１つ目は、教えられることの方が多いということ。２つ目は女性の活躍の場が多く、日本では女性が不利であると感じること。３つ目は、若者の活気があること。４つ目は12年間活動していると目に見える成果が表れてきたこと。この経験を地域の活性化に生かしたいと思い、地元の白山地域で様々な活動をしている。活動はビジネスと非営利の活動の両輪で活動しており、特に若い世代の外国人に空き家を紹介し、移住の提案をしていることが印象的であった。実際に様々な国籍の若い方が移住している。ゲストハウスイロンゴは、パートナーのハロルドさんと古民家を改装して運営している。農業体験やフィリピン料理体験、イノシシの丸焼きができるのはとても魅力的だ。貸しスペースで様々な人をゲストに迎え、学習会も行っている。フィリピンの文化、地元の文化を伝える場となっている。若い外国の人たちを地域に呼び込み、地元の人からも愛され存在になっていること、多くのサポーターを増やし、活動の幅を広げていることなど、学ぶべきことがとても多かった。課題意識をもつこと、多くの人と繋がることで、可能性は広がっていくことを実感した。（野々山尚志）

ゲストハウスイロンゴの代表である倉田麻里さんの講義を聴いた。テーマは、「国際協力から地域活性化へ」だ。倉田さんがこれまでに国際協力に貢献してきたお話を聴いた際に、印象的だった言葉は倉田さん自身の気づきの言葉であった。「教えられることの方が多い」「（関わってきた国は）女性が活躍している」「若者に活気がある」など、これらの言葉は現地で活動されてきて肌で感じて出てきた言葉だと感じた。よく私は実際に見たわけでもなく、体験したことでもないけれど、どこかで耳にした情報を鵜呑みにし、そのまま他の人に伝えてしまうことがある。それではいけないと気づいた。次に、拠点を三重県白山町に移して地域活性化に貢献してきたお話を聴いた際には、「移住の促進」「交流人口の増加」「近隣サポーターを増やす」「外国人住民の活躍」が課題だと知った。これらの課題を見つけ出し、課題解決のために行動する倉田さんたちはとてもエネルギーをもっている。そんな倉田さんたちがとても輝いて見えた。心からワクワクできる社会貢献を私自身も見つけて行動していきたい。（松田翔伍）

⑪フィリピン料理及び外国人有志（食事・懇談）

ハッレ倭にて、ゲストハウスイロンゴのハウスファザーHarold さんの作ったフィリピン料理を昼食で体験した。盛り付けに使われたバナナの大きな葉が印象的で、近隣でバナナを育てている方からもらった物、とのことだった。食前の祈りがあり、また特色としてフィリピンは多言語の国で（タガログ、ビサヤ、イロンゴ等）、お互いに通じない時には英語で会話することを聞いた。

白山地域ではフィリピン人、ベトナム人、中国人、インドネシア人、ロシア人と多国籍の人々が住んでいる。ハッレ倭に集い、子育てや学び・生活を共にしている様子を見たり会話したりする中で、草の根的な交流の根強さ暖かさを感じ、集う方々の瞳には安心感と将来への希望があり、何よりも助け合いの絆の深さがある、と知ることができた。（稲垣裕子）

ハロルドさんらに作っていただいたフィリピン料理。地元で育てたバナナの皮の上に、豚肉と鶏肉と地元で採れた野菜の煮込み料理アドボ、ごはんのプレート、お腹が空いていた私たちはペロッと食べてしまった。（野々山尚志）

⑫NPO 法人 DIFAR
（講義等：ボリビア支援 NGO の地域活動＆現地オンライン）

国内での事業として、多国籍の人が集まって行う音楽のイベントを行っていることを知った。印象的だったのは、「自分たちが楽しむ場」が「みんなが楽しむ場」に変わっていくという話である。南米の音楽や食文化に触れることのできるイベントで、近隣の住民だけでなく近郊の地域からの参加者が集まっているそうで、多くの人が交流できる空間を作り出していた。音楽や食文化を通して多国籍の文化を体感しながら深めていくことのできることが最大の魅力であると感じた。この「体感しながら」というところが、多文化共生をめざした学習を行う上でのポイントであると感じている。

海外の事業として、ボリビアで暮らすスタッフの取組について紹介を受けた。日本文化である掃除をボリビアで浸透させようと取り組んでおり、現地の文化に日本の文化を取り入れることで、より豊かな生活を送ってほしいという願いのもと活動をされていた。日本でも多国籍の方との理解を深めることの大切さと難しさの両面について考えさせられた。（大島俊介）

ボリビアの衛生問題の解決のために、元青年海外協力隊である瀧本さんがパジェグランデ市にて、NGO 活動としてエコサントイレを 512 基建設したり、ゴミのポイ捨てを改善するためにゴミ・リサイクルシステムの導入や堆肥化、法制化等を行ったりしている。ポイ捨ての日常風景や習慣を変えるために、環境教育を学校で行い、「そうじの習慣」を日本の小学校との交流の中で行っていた。一方、学校教育においては私立と公立の教育格差があり、地元の公立小学校では字の読めない子が多く、保護者も読み書きができないこと、子どもに勉強することより働くことを教えている現状もあることを知った。

ボリビアでの社会問題を我が事のように真剣に取り組んでいる瀧本さんの姿を見て、ボリビアの人々を愛する思い、社会を変えていこうとする根強い努力のあることに驚いた。瀧本さんの活動を支援したい、と強く思った。国内事業として年に１回開催される「森の音楽祭」では、南米の音楽フォルクローレや、今年はアフリカ・アジア・オーストラリア・スイスの音楽を聴いたり、ケニア料理・ピザ釜体験等をしたりしながら、地域の子どもたちや家族連れに異文化に触れる機会を提供している。三重県美杉町の大自然の中で、世界を感じられる場所、世界中の人と音楽で繋がれる場所に、近隣に在住する自らも地元住民として参加したい、と感じた。（稲垣裕子）

⑬Wild Art YESE!　代表 YUKO
（体験：アートを通した多文化共生の場づくり）

「アートとは何ですか？」Wild Art YESE!の YUKO 代表のこの問い掛けが印象的だった。アート体験は、衝撃的だった。YUKO 代表のこれまでの歴史が書かれた紙を見て連想したことを、紙とペン、割り箸などどこにでもありそうな物を使って表現するという活動だ。私は「ドイツ」という単語を見て、「ソーセージ」を連想し、紙をソーセージの形に破いていったら、立体感のある作品にしたいという思いが出てきて…。いつの間にか、皆さんに作品を見せたくてたまらない自分がいた。研修が終わって、私の心に残ったのは、「伝えたい

と思った私は芸術家」という言葉である。これまで、多文化共生の現場には言葉の壁というハードルが存在することを学んできた。しかし、このアートという視点を多文化共生のために生かそうとするとどうであろうか。言葉では通じなくても、伝えたい思いが通じてしまうのではないだろうか。また、「一緒に何かを創り上げる」という体験は、人と人とのつながりを強めるためにとても重要なことだと思うようになった。（松田翔伍）

「ART」とは何かと問われたとき、私は「絵」を思い浮かべた。しかし、海外ではその言葉が示す内容は幅広いということをYUKO氏は言っていた。さらに同氏は「芸術という教科はなぜ日本にはないのか」と言っていた。私は「芸術＝図工や美術」と思ったが、海外ではそれは異なるということであった。これらの話を通して、私は日本と海外の間にある大きな違いを感じた。

また、講演の中では「教材」を渡された。ペンや色の紙、食事の際に使う敷き紙など様々なものがあった。そして、「お題」を元に表現をすることになった。私は「表現」と言われるとどうしても絵を描きたくなってしまい悩んだ。受講者の中には、紙の形を変えたり、ごく一部を拡大して表現をしたり、文字で書き表したりしていた。様々な表現方法があると感じた。そこに、自分自身の「表現＝絵」というステレオタイプ的な思考があると感じた。多文化共生というのは、そのようなステレオタイプの表現をなくし、柔軟な発想が大切になるのではないかと感じた。（久米達哉）

⑭WELCOME 丹羽智佳子、中村真央（講義：外国人相談窓口から見えてきたこと）

相談事例を聞くなかで「移住、労働権を自分で取りにいかないと、犯罪になってしまう」という言葉が印象的だった。テレビのニュースなどで外国人のVISAの話を見て知ってはいたが、実際にそうした課題に直面されている方から話を聞くことで、自分の中でようやくイメージがついてきた。自分が日本で働くことは、書類を書いて申請などしなくても与えられている権利。今まで外国人の就労について深く考えたことがない自分がいることに気づかされた。

また、相談事例で病院の付き添いが非常に重宝されているとのことだった。病院で整理券をとって並ぶ、このシステムが分かりづらく困っている。相談事例で何に困りごとを抱えていることが多いのだろうと疑問に思っていたが、相手の立場に立ってみれば、初めての場所で説明が十分にされない状況。そういったものがどれだけ不安か相手の立場にたつことで気づけると思った。また、言葉の壁によって適切な診断がされないということもあると聞き、言葉の重要性を改めて再認識した。（柴田英子）

困っている方に「寄り添う」まさに共生の形がそこにあった。これは相手が外国人だから、というだけではないとは思うが、特に困ることが多く、周りの支援も受けにくいことから、WELCOMEのような団体は重宝されていると感じた。しかし、どのような良い活動をしていたとしても、それを周知していくことは難しいことである。我々もアンテナを高くしていかなければいけないし、さまざまなことに積極的にかかわっていく姿勢とともに、つながりを意識し大切にしていく関係性作りが必要不可欠であることを感じた。（加藤奏太）

⑮インド料理体験及び Landing in HAKUSAN 有志（体験・懇談）

料理体験では、海外の文化に実際に手を動かし、触れることの喜びを感じた。

他のフィールドワークでもそうだったが、畑仕事やダンスなどの活動を共にすると、言葉が通じずとも交流ができる。料理体験でもインド人講師の方の言葉はわからずとも、食材や器具を指さしたりジェスチャーを交えてくれたりすると伝えたいことはわかり、またおいしい料理を作る、料理を楽しむという共通の目的を持つことで一体感を強く感じた。

また、料理を実際に作り、食べることでその国の文化への興味が生まれた。食事の際に聞いた、その日はインドで重要な日であるマハトマ・ガンジーの誕生日だという話を講師から聞いた時、料理の味とともに、その日を大切に思う気持ちがすっと自分の中に入ってきたように感じた。

懇談の中ではインドから移住してきた住民がどのように日本や地域での生活をとらえているかを聞くことができた。日本とインドの慣習や文化の違いを感じながらも、その違いを肯定的にとらえていることが印象的であった。（神谷樹）

本場のインドカレー、ダルカレーとたまごカレーの２種類を２グループに分かれてみんなで楽しく作った。大量のタマネギを炒め、ピーマンは種ごと、カシューナッツ、シナモン、コリアンダー、ニンニク、クミン、ローリエ、ナツメグ、スターアニス（八角）などの香辛料をミキサーで細かくし、炒める・混ぜるを繰り返す。だんだんと良い香りが広がって来た。大きなお皿に２種類のカレーを盛り付けた。辛さは控えめだったが、お腹いっぱいいただいた。本場のインド料理をインドの方に直接教えていただきながら作ることで、楽しくおいしくいただけた。（野々山尚志）

■第４回フィールドワーク

10月16日(土)　**知立：訪問先 No.⑯～⑲**

時 刻	スケジュール	備考(☆案内者)
	9:57名鉄名古屋駅→10:23知立駅10:33→10:35着	欠席：松田・山本・(土橋) JICA同行：神谷・木村 NIED同行：久世・鉄井
10:40	名鉄牛田駅 集合	
11:00	**⑯-1 外国人集住地区「昭和地区」散策** ◇地域の歴史やお店等の解説を交えながら、 牛田駅から知立団地付近までを歩く	★知立市福祉課 **佐藤浩二**さん ★昭和ＰＲプロジェクトメンバー
12:00	＜昼食＞ **CHEIRO VERDE**（シェイロベルデ） ブラジル料理店 ※案内者は同席せず	X-CheieroVerde （ランチプレート小）
12:50	知立団地多文化共生施設「もやいこハウス」へ（徒歩5分）	
13:00 (90)	**⑰ 地域住民団体＆知立市福祉課** @もやいこ ◇昭和未来会議の説明 ◇昭和つながリングプロジェクト（まもりんピック）の説明 ◇昭和ＰＲプロジェクトの説明	★知立市福祉課 **佐藤浩二**さん ★同プロジェクト代表**奥寺**さん ★同プロジェクト代表**高橋**さん
14:30 (30)	**⑱ 活動に参加している外国人住民** @もやいこ ◇各プロジェクトに関わる外国人住民による活動への思い等のお話	★ミャンマー人 ★ベトナム人
15:00 (30)	**⑲ 昭和みんなの音楽室** @もやいこ ◇昭和みんなの音楽室の活動紹介 関わっている外国人&日本人による演奏	★**佐藤浩二**さんほか
15:30 (60)	**⑯-2 外国人集住地区「昭和地区」散策** ◇知立団地内の散策及びもやいこ農園を視察	★**佐藤浩二**さん、**高橋**さん
16:30	お礼のあいさつ等	
16:40 (60)	**★振り返りミーティング** @もやいこ 1）今回フィールドワークの振り返り 2）今後の準備・確認	★ファシ：**久世治靖**
17:40	終了→解散　（牛田駅まで徒歩15分）	

⑯外国人集住地区「昭和地区」（散策・懇談：知立団地・スーパー・もやいこ農園等）

昭和地区は、昭和45～46年頃に宅地化が進み、一気に1万人住民が増えた。高齢者率は知立市全体で20%ほどだが、この地区は42～43%になる。また、昭和地区にある知立団地2000戸、4300人の内、実に2500人が外国籍の住人である。近くの小中学校の児童生徒の8割は外国籍であることが特徴的だ。私たちは昭和地区で暮らす日本人の方と散策しながらお話をうかがった。昔は、団地内の公園でバーベキューをしたり、夜に騒がしかったりしたことがあったが、今では少なくなったという。しかし、未だに外国人の方に対する心配の声は上がるそうだ。知立団地の角に駐在所があったが、閉鎖する予定だったところを、地元の方の反対で、「昭和警ら連絡所」という形で残った。再任用の警察官が駐在している。団地内の看板はポルトガル語を含む数か国語の表示がある。ゴミ捨て場のゴミの出し方の看板表示も数か国語で表示されている。また、自治体で立ち番があり、そこには外国籍の方も参加している。ゴミの捨て方がわからない方もいて、ゴミ捨ての時間にはちょっとした交流ができる機会にもなっているようだ。外国籍の方も一緒に自治体の活動が広がっていて、外国籍の方が当たり前に地域の活動にいることで成り立っている。（野々山尚志）

自分自身が以前昭和地区に住んでいたことがあったにもかかわらず、新しい発見が多くあった。普段とは異なる意識で町を散策し、地域に関わる人の話を聞くと、自分の知らなかったものが見えてきた。

まず目についたのは町中の多言語表示だった。防災に関するお知らせなどがポルトガル語で案内されていた。また団地の中には夜に大きな音を立ててはいけないこと、違法駐車やごみの分別に関する案内など、海外から来た人と共に暮らすための工夫をそこかしこで目にすることができた。

ブラジル料理のレストランやブラジル食料品店は近寄りがたい雰囲気を感じていたが、入ってみると店員も気さくで日本語で対応してくれるし、レストランはハロインの飾り付けがしてあり、リラックスした雰囲気で楽しむことができた。

見慣れた街にも多くの発見と楽しみがあり、それに目を向ければより地域での生活が楽しくなる。外国から来た住民が多いということは、地域に根付いた魅力なのだと気づかされた。（神谷樹）

⑰地域住民団体＆知立市福祉課（講義：昭和未来会議とアクションプロジェクト）

「一緒につくる」「常識にとらわれない」「つながりをつくっていく」などを合言葉に、さまざまなアプローチをしている昭和未来会議の取り組みは、純粋に素晴らしいものであると感じた。それも彼ら外国人に「ここをふるさとにしてもらいたい」という温かく手を差し伸べるような思いがその根底にあるということである。話し合う場があり、話し合うノウハウがあり、つながりたいと願う情熱があることが、このような助け合いの場づくりを創設し、継続していく要素であるのではないかと感じた。（加藤奏太）

行政と、学校と保護者、地域が一体となった理想の共生という形が現実としてあり、強く感銘を受けた。昭和未来会議を通して、理想の昭和について話し合い、「みんなが安心して暮らす昭和」、「若者にとって魅力あ

る昭和」がみんなの考えている共通した部分だったそうだ。そこで、まもりんピックという防災を楽しく学べるイベントを開催したり、様々な国の食べ物を出す食べリンピックを開催したりしていた。その地域に住む人たちが、一緒になってその町の理想の未来を考えること自体がとても素敵なことだと思った。大人がそのように真剣に話し合う姿を子どもたちが感じとったら、さらによい町へと変わっていくだろうと思った。そしてその活動をしていく中で多くの人と人が繋がり、そのおかげで企業やスポーツ選手が協力してくれたということを知り、強い意志があるからこそ多くの人が協力的に動いてくれていたのだと思った。ただ、活動の中で、否定的な意見に傷つくこともあったと聞き、それでも諦めずに取り組む姿勢は自分も見習いたいと思う。（柴田英子）

⑱活動に参加している外国人住民（講義：活動への思い）

日本で暮らしていくうえで大変なのが、言語の壁とのことだった。入国管理局などの VISA の延長などの書類や、学校からの手紙が読めずとても苦労している人が多いと聞いた。自分が出している学校の手紙も日本語のみで漢字が多く使われている。もし自分があまり詳しくない言語でそれらの文書を受け取る側だとしたら、不安でいっぱいになるだろう。「相手の立場になって考える」ということは、よく言われる言葉だが、文化や言語が異なるとき、共に生きていくうえで大切なのは、この「相手の立場になって考える」ということがどれだけできるかではないだろうか。これは決して文化が異なるときにだけ大切なのではなく、人と人とが関わる場面ならいつでも大切なことであると思う。この多文化共生について大切なことを突き詰めて考えていくと、原点はとてもシンプルに相手を思うことなのではないかと気づかされた。（柴田英子）

彼らは、ここで支える日本人のおかげか、日本のことを強く好意的に感じていることが強く印象に残った。そして、支えてもらった彼らが、今度は支える側にと、多文化共生のバトンが着実に受け継がれている様子が彼らの話や活動の様子から見てとれた。彼ら自身と彼らの仲間たちが、よりよく自己表現するためには、言語の違いや文化の違いは、一つの障害となる。しかし、少しずつさまざまなサポートを得ることでそれらの障害はだんだんとなくなり、よりよく過ごせる場というものになっていくのだろうと思う。住みよい街を作ることのきっかけになった、さまざまな町や個人のアプローチから、「共に生きる」ことへのヒントが隠されているように思う。（加藤奏太）

⑲昭和みんなの音楽室（体験：外国人・日本人住民による音楽演奏）

知立団地の商店街「もやいこハウス」にて、ギター教室と音楽交流を行っており、音楽を通した多世代・多国籍の交流の場となっている。ギター演奏と歌を披露してくださったミャンマー人のゾウさんと、演奏後に対話をした。クーデターの絶えないミャンマーへの平和を切に願う気持ち、なかなか帰国できない寂しさ、自宅から職場・もやいこハウスは徒歩で通える距離であること、日本に 10 年以上住んでいること等。ゾウさんが母国ミャンマーを愛し、同時に日本での生活や人との繋がりを大切に生きている現状も知った。実際の演奏を聴き、あらゆる苦しみや行き詰まりなどから解放され、自由にのびやかに歌う姿を見て、音楽で心は自由になれること、またその場に集うあらゆる人々と立場の違いを超えて繋がり合うことのできる音楽は本当に素晴らしい、と感じた。ミャンマーの歌、日本語で歌った「花を咲かそう」のどちらにも力強いメッセー

ジが込められ、心に響いた。演奏でセッションをした方とのギターと歌のハーモニーは美しくて、国際交流そのものだと思った。（稲垣裕子）

有志で集まったスタッフで始まった無料のギター教室について紹介を受けた。さまざまな国籍の人がギターを通して交流を深める活動であった。弾き語りの曲は、さまざまな研修先で学んできた多文化共生の重要性を思い出させる、感動的なものであった。

お互いに関心をもち寄り添う姿勢をもつことが多文化共生を進めるためには必要なことである。音楽は、多文化共生を進めるための第一歩となることを、この経験から学ぶことができた。さまざまな国の音楽に触れ、よさを共有していくことによって、お互いの文化を尊重できるようになると考えたからである。

多文化共生をテーマに学習を行うときには、さまざまな国の音楽の良さを見つける学習から始めるようにすれば、肯定的に外国の文化に触れることができると思う。（大島俊介）

Ⅳ．フィールドワーク後の報告

フィールドワーク研修報告書

1．フィールドワークに対する各自の目的とその達成度

● 稲垣 裕子

国内に在住する外国の方々と出合い、交流し、相手の言語や文化を理解する中で、これから共に生きる方法を考えた。今後異文化と関わり、協力して生きていくことが必要な子どもたちに、異文化を体験し自らの視野を広げ、つながりを深めることの素晴らしさを伝えていきたい。フィールドワークでは、訪問先で出会った方々とコミュニケーションを積極的に取り、今後のビジョンを聞いた。その中で、外国にルーツのある方々が母国への誇りや、日本社会への信頼、仲間とつながり合える安心感を強く抱いていることを感じた。人生を必死に生きる姿の中に「多文化共生」の実現を見た。彼らの表情、交わした言葉の数々が今の自分を支え、自信を持って学校の生徒たちに、異文化と触れ合い共に生きる素晴らしさを伝えられる、と確信している。今後、国際理解教育を実践する中で達成度を計りたい。

● 大島 俊介

所属する学校にも多文化の子どもが在籍している。言語や文化の違いにより、支援が行き届いていないのが現状である。しかし、一緒に生活する子どもは、言葉はお互い分からないものの、休み時間に楽しく遊んでいる。わたしは、子どもたちにとって「楽しい学校」であること、保護者にとって「安心して通わせることの学校」であることを目標にするだけでなく、地域にとって「開かれた学校」であることも目標にするべきだと考えている。そんな中、開発指導者研修（実践編）で学んだ、多文化共生について興味をもつようになった。そこで、地域と連携して多文化共生をめざす一歩をふみ出したいと考え、本研修に臨んだ。

本研修は、その目的にあった学びを多く得ることができた。特に、さまざまな国籍の方とともに作業を行ったり、イベントをつくりあげたりすることが効果的ではないかと考えるようになった。多国籍の方と同じ時間、同じ空間に生きているのだという認識を子どもたちが実感としてもつことができるような学習を提供していきたい。

● 沖 久美子

今回の研修では、地域における多文化共生の現状を実際に見て、知ることを目的と考えていた。また、その中で、学校での授業実践に生かすことができることを探したいと考えていた。私は８年前まで、多文化共生に関わる仕事をしてきたが、今回のフィールドワークを通して、若い世代による活動が増えていると感じた。しかし、10 年近く経過しても外国にルーツをもつ人々が抱えている問題や置かれている状況があまり変化していないと感じた。10 年前に課題としてあげられていたことが今も同じように語られていた。授業実践に生かすことができることとしては、浜松でのフィールドワークで訪れたセメンチーニャの取り組みがとても参考になった。私が担任している特別支援学級には外国にルーツをもつ子どもたちが在籍している。日付や曜日、時間の感覚がまだしっかり身についていないため、何度も曜日や休みの日を確認する傾向がある。セメンチーニャで見たポルトガル語のカレンダーを参考に、日付や曜日の感覚を身につけ、自分のルーツに関心を持つことができるよう、多言語のカレンダーを子どもたちと作成したいと考えている。

● 加藤 奏太

私は、インターナショナルスクールで勤務している。接する多くの子どもたちが、日本国籍ではない子どもたちである。私はその立場で、日本で生活する人たちがどんな気持ちで、どんな志で、どんな背景をもって生活しているのかに強い興味を持った。現代の日本社会のテーマの一つが多文化共生であることもあいまって、

強く学んでみたいと感じた。それが参加の目的である。そこで得たマインドから、接する一人ひとりの子どもたちに適切なアプローチができればいいと感じている。そして、彼ら外国人に近くかかわる日本人として、彼らの生活をサポートできることを目標としている。

私は日本で暮らす外国の方に多く出会い、彼らを支援する多くの方に出会うことができた。彼らの思いは触れ合うことで自然に感じることができた。授業実践はもちろんであるが、日々の授業の中での彼らへの接し方が、より一層彼らのことを思えるようになったと思う。達成度はある程度高いと感じている。

● 久米 達哉

私は本研修に２つの目的をもって参加した。1 つ目は「自分の視野を広げること」である。今回、多くの団体や現場を訪問させていただくことで、そこで活動される方々の想いを知ることができた。特に、どの方も自分にできることはないかと考えて行動する力が強いと感じた。

２つ目は「事実を知る」である。多文化共生という言葉はこれまで知っていた。しかし、実際を見たことは殆どなかった。今回、外国籍の人々の話を直接伺うことで、本当に困っていることとともに、日本の素晴らしい点を認識することができた。また、日本もこうなったらよいのに、という点も見つかった。両者が融合しよりよい社会を築いていくことが大切であると感じた。

実際に体験することでこれまで知らなかった世界に出会うことができた。実際に知ったことは強い想いをもって授業実践に取り入れることができる。生徒がよりよい社会を作るための一員となれるような実践をしていきたい。

● 柴田 英子

今年度は５年生の総合を担当しており、テーマが「Live together 共生」である。児童と一緒に「共に生きる」とはどういうことか、何が大切なのかを考えるための教材を得られたらと思い研修に参加した。

この研修を通して自分の予想を上回る貴重な体験をし、多くの学びを得ることができた。自分の住むこの東海地方に様々な願いを抱えながら活動している多文化共生に係る団体が多くあるということを知り、実際に活動内容を見ることができた。活動をしていく中での苦労や運営の工夫点など、実際に見てみなければ得られない生きた情報を得ることができ、当初の目的であった共生について考える教材を多く集められ目的を大きく達成することができた。活動している方の思いを聞くことで、自分と住む地域と重なる点があり、「共生」という言葉を実現させるためにどのように動くとよいのかを学ぶことができた。

● 野々山 尚志

現在の勤務校は外国籍児童や様々な家庭環境の児童が多く、子ども達は外国籍の子ども達はもちろん、容姿の違いや宗教や文化の違いに対して差別や偏見をもっている様子は見られない。このような環境は、グローバルな次代を生きていく子ども達にとって、多文化・多様性が当たり前で、自然なまま育っていけるという点で、大変恵まれた環境であると思っている。しかし、性差や学力差に対しては、偏見や批判的な言動が見られることがある。

本研修で、多文化共生に関する活動をされている方々から、活動に対する思いや取組について学び、それを教材化し、違いを超えた人と人とのつながり方や、社会参画の意識を高められるような実践を行いたいと考えている。主に、６年生の理科で、SDGs17 の目標とのつながりを意識させた教育課程を編成し、理科の学習が社会の課題解決につながることを認識するとともに、今回の研修で得た教材を取り入れ、参加型学習によって課題解決を行う中で、多文化共生の意識と社会参画意識を育んでいきたい。

● 松田 翔伍

私がこれまでに出会った外国にルーツをもつ子どもは、日本語をうまく話せなかったために、自分の思いを溜め込んでいたり、周りの人から受け入れられないでいたりして、辛い思いを経験してきた。「人が違いを受け入れるために必要なことは何だろうか」という問いに対する答えを探して、この研修に参加した。フィールドワークを通して、「人々が違いを肯定的に認め合うことで、新しい文化を共に創り上げることができる。そんな社会の方が暮らしやすいし、面白い！」という思いをもつようになった。社会とは、私たちが暮らす地域でも

あり、私が受け持つ学級とも言える。そして、実際に新しい文化を創っていくためには、言葉ではない人と人との心のつながりを生む場を日頃からデザインする必要がある。授業実践では、まずは違いを肯定的に受け止められるような活動を行い、遠い世界の出来事ではなく自分とのつながりに気づかせることを大切にしていきたい。

● 山本 孝次

フィールドワーク、それは本研修の核であり、これがあるからこそ参加をした。多文化共生社会の実現のためには、まず日本の中の異文化と肯定的に出会い、同一性やつながりに気づくことが重要だ。しかし、これはいくら講義で資料を見て解説を聞こうともできることではない。今回はコロナ禍にも関わらず、スケジュール変更や宿泊がなくなることはあったにせよ、多くの団体の方々が快く訪問を受け入れてくれた。深謝したい。

また、そこで得られたことも大きい。私にとっての一番の学びは、外国にルーツをもつ人々は２つの文化の懸け橋となり得る人たちであり、またそうなりたいと思って活動をしている人が沢山いるということだ。外国にルーツをもつ人々は、ルーツとする文化を大切にして継承していきたいという思いを持っているし、日本文化の良いところを取り入れていきたいとも考えている。このフィールドワークを通して、各団体の方々にインタビューをし、活動を続けていく上での夢を聞くことができた。こうした多文化共生社会を実現しようという熱い想いを持っている人たちと生徒たちを、授業実践を通して引き合わせていきたい。

● 神谷 樹

この研修に参加したのは、ブラジル学校で日本語を教えるにあたり、今後海外とつながる子どもたちが直面するであろう課題や困難を知り、どうすればより有意義な授業になるかの参考にしたいと考えたからである。

フィールドワークを通して知った多文化共生に関する課題は非常に複雑で、支援者、地域の外国籍住民その他、多くの人たちがそれぞれの視点で課題とらえている。そのような複雑なテーマに扱うにあたり、教師一人の考えから授業を組み立てることは子どもたちの学びにとっても良いことではないと改めて考えるようになった。

また、様々な海外とつながる人たちの話を聞き、時には農作業や料理などを通して交流する中で、課題だけではなく、多様性に対する魅力も発見することができた大きな収穫であった。

授業プログラムを考えるにあたり、生徒自身が課題意識や興味関心を持つことを重視し、教室外での体験につなげる授業を実践したい。そして、どうすれば日本社会が誰にとっても暮らしやすい社会になるのか、子どもたちともに考えていきたい。

２．柱１「日本の中の世界に肯定的に出会う」観点から学んだこと

● 稲垣 裕子

「身近に外国の文化を感じ、外国の方とコミュニケーションを取れる場がある。外国につながるチャンスになる。異文化につながることで、自分の殻を超えて意識を変えることができる。例えば、インド人のサイさんからは、命を支えてくれる世界中の人への感謝、世界の子どもたちの将来を祈る思い、日系ブラジル人の松原さんからはすべての人をリスペクトし、貧しい人にも対等に対話するブラジルの文化、フィリピン人のバルさんからは「外国人とつながるのは今がチャンス」との励まし、柳沢クリスチーナさんの「自国の誇りを母国語で子どもたちに伝えたい。ブラジルと日本の架け橋になりたい」との強い思い。出会った方々によって視野が広がり、国籍を超えてつながり合える喜びを感じることができた。母国の文化や言語を誇りに思い尊重し合えること、アイデ

ンティティを自らの力にして生きることの大切さを学んだ。

● **大島 俊介**

世界と肯定的に出会うためには、一人ひとりのインクルーシブな発想を持ち合わせることが大切である。

日本の中で世界の文化と共生していくことは可能である。日本は日本の文化を大切にし、外国籍の方は外国の文化を大切にしていけばよくて押し付けるものではない。それがお互いのリスペクトの中に成り立っていればよい。そういう心情で出会った本研修の文化は、どれも新鮮で、生きていて、何より楽しそうであった。食事や遊び、学び方、言語の面白さ、どれをとっても、自分の関心をそそるものばかりであった。

だからこそ、相手の文化を「もっと知りたい」という好奇心から始められるような学びの場が必要である。今回の国内研修はまさにその象徴となるような研修であった。それを次はファシリテーターとして発信できる場が欲しい。そのきっかけとなるのが「一緒にやらせてもらうこと」ではないかと考える。それは、体験型の学習を入り口にすることで、自然に探究したくなると感じたからである。

● **沖 久美子**

多文化共生に関わる仕事をしたり、通訳や翻訳、日本語指導に関わったりしてきたなかで、日本に暮らす外国にルーツをもつ人々が多くの問題を抱えやすいという側面もあるが、強みも多く持っていると感じている。例えば、日本語だけでなく母語や継承語を話すことができる外国にルーツをもつ子どもたちは、ひとつの言語だけを話す子どもに比べて将来の選択肢が増えると思う。実際に浜松のフィールドワークで話をきいたCOLORS の宮城さんは、自分のルーツや話すことができる言語を生かして、高校を選択したり、COLORS の活動をしたり、就職したりしている。日本語以外の言葉を話せることで、その言葉を話せる人々とつながることができたり、困っている人々を助けたりすることもできる。日本とは異なる文化を知っていることで、視野を広げることができる。そんな強みがあると思う。

● **加藤 奏太**

日本の中には、様々な外国の方が住んでいる。彼らは、日本の産業を支えたり、母国と日本の架け橋になったりするなど、さまざまな理由で、ここで過ごしている。彼らはとても温かく、懐っこく、心温まる触れ合いができる人たちばかりであった。彼らを支える日本人もしかりである。

日本や日本人は、すごく肯定的にみられている場合が多く、日本の国の過ごしやすさを感じる場面があった。彼らが更に日本社会において「自分の大切にしているもの」とともに表現ができるようになれば、それが更なる魅力的な接し方となるし、日本というものの価値も更にあがるのではないだろうか。

● **久米 達哉**

私は本研修を通して人と人のつながりが大切であると感じた。訪問先ではどんな場所でも、外国籍の人のことを考え、行動する人、そして外国籍の人々の立場を受容し地域の一員として受け止める人々がいた。イベントを開催したり支援活動をしたりすることで、互いのことを理解し合える環境が整っているように感じた。そのような環境があるからこそ、外国籍の方が暮らしやすい環境になってきているのだと感じた。

また、外国の文化を受け止めようとする環境があるからこそより文化の一体化が進むように感じた。そして、その社会で互いに暮らしやすい環境こそが、本当の多文化共生であると感じた。

● **柴田 英子**

外国人の方と農作業を行っているもやいこ農園という場所がとても印象的だった。「もやいこ」には、「共同でひとつの事をする」「わけあう」などの意味が含まれているそうだ。その場所には、それぞれの国でよく食べられる野菜を育て、収穫出来たら各国の料理を振る舞うなど自然と各国の文化に肯定的に出会える環境が整っていた。一緒に育て、一緒にご飯を食べる、こうした日常の延長線上にある交流の場というのは、人と人との繋がりを無理なく深めるのにとてもよいのではないかと思う。関りを持とうとしなければ出会うこともできないので、こうした交流の場を持つことで、様々な背景を持つ人々が集まり、話し合えるというのは大変すばらしいと思う。食文化や共同作業を通して、あるがままを受け入れてもらえる雰囲気が感じられ、肯定的に出会うとはこういうことなのかと気づかされた。また、新たなコミュニティに入るとき、言葉の壁があるだろう。

しかし、料理を共に作るときは、簡単な言葉やジェスチャーでコミュニケーションが取れ、自然と助け合ったり協力したりする環境ができ、参加しやすいのではないかと思う。

● **野々山 尚志**

フィリピン人コミュニティ SBK のメンバーにお話をうかがった時、フィリピンでは、貧富の差があっても３食食べられるという話を聞いた。フィリピンには「同胞を助ける・困っている人を助ける」ということを子どもの頃から教えられているらしい。日本ではどうだろうか。知らない人が困っていても自分から声をかけられる人はどのくらいいるだろうか。2017 年に JICA 中部教師海外研修でパラグアイに訪問した時も同じようなことを聞いた。ホームステイ先の方に、若年妊娠して学校を辞めた若い女性は、どうやって暮らしていくのか聞いた時、子どもは地域のみんなで育てるから、その子も学校や仕事にすぐ行けるということを聞いた。日本ではどうだろうか。地域の方に預けて仕事に行くということはほとんど聞かない。日本は経済的に豊かであるだろう。しかし、フィリピンの助け合いの文化こそ、豊かさだと感じた。

● **松田 翔伍**

今回の研修を通して、たくさんの多文化共生の現場と交流することができた。その際、現場に関わっている方の熱い思いに触れることができた。ボリビア支援を行う NPO 法人 DIFAR の瀧本さんたちの話を聴いて、様々な課題はあるけれど、課題解決の過程を自分たちが楽しむのが大事だということを学んだ。今、ボリビアではゴミのポイ捨てが日常の風景となってしまっていることが課題だと聞いた。そこで日本の学校文化の清掃活動を取り入れようという挑戦をしているそうだ。この話を受け持つ学級の子どもたちに紹介してみた。子どもたちはボリビアという国に興味をもったようで本で調べてくる子もいた。そして、自分たちが普段行う清掃に目が向くようになった。日本の中の世界に肯定的に出会うためには、外国の方や関わっている方の前向きな思いが表れている教材を用意する必要があると感じた。

● **山本 孝次**

異文化を知ることは単純に楽しいことだ。単に「オブリガード［ダ］」「サラマッ（ポ）」（ブラジル語、フィリピン語でそれぞれ「ありがとう」の意）などの言葉を知るだけでも楽しい。オンラインで海外とつないで交流する際には、簡単な挨拶と「ありがとう」のフレーズを教え合うだけでも場をなごむ。音楽やダンスも異文化との出会いを容易にしてくれる。フィリピンのバンブーダンスなどは言葉がそんなにわからなくても音楽に合わせたステップの踏み方を教えてもらうことで一緒に楽しむことができる。単純で初歩的なステップを一通り覚えただけでも小さな達成感を得ることができる。また一緒に相手の国の料理を食べる機会があれば、食材や調理法、食べ方などに興味津々となる。例えば、フィリピンバナナは日本でも有名だが、フィリピンでは果物としてよりも料理の材料として使われる方が普通だ。どんなバナナがどのように調理された料理でどんな味がするのだろうと興味が湧いてくる。

● **神谷 樹**

自分たちが暮らしている場所がいかに多様な価値観に囲まれているかを改めて感じることができた。普段の生活で海外とつながる人たちの近くにいるにもかかわらず、触れ合ったり、言葉を交わす機会が少なかったりしたことに気づいた。

また同時にずっと日本で暮らしてきた自分自身の価値観にも関心を持つようになった。今まで当たり前だと思っていたことが、国籍などとは関係なく多くの人にとってもそうであるのか疑問に思うようになったことは大きな成果であったと感じる。

３．柱２「日本の中の世界との同一性やつながりに気づく」観点から学んだこと

● 稲垣 裕子

NPO 法人 DIFAR の瀧本さんがボリビアの学校と日本の学校をつなぎ、お互いの良い所を伝え合い「掃除の習慣づけ」など子どもたち同士で実践を行う取り組みをしている実例から、国境を超えて子ども同士が共に活動できる、異文化交流の効果を知った。またゲストハウスイロンゴの倉田さんがハッレ倭にて外国人の居住を促進して、地元の自然の豊かさをアピールし、地域に若い人を呼び込み、国籍を超えて人々が共に子育てをしたり学び合ったりできる居場所づくりをしている実例からは、孤立を防ぎ、気軽に集い相談できる場所の必要性や、ともに子育てや教育、日々の生活や仕事について語り合える心強さ、問題解決を協働で行う大切さを学んだ。刈谷市の取り組みからは、「つなぐ」意識「つながり」こそ支え合いの原点であることを教えられた。特に外国の方々が活動の担い手となって、地域の外国人をサポートしていることが印象的だった。

● 大島 俊介

日本の生活と外国の生活が酷似する部分はたくさんある。多少の違いを「違い」ととらえるのではなく、同じものの中から感じられる個性ととらえたほうがよい。それを異なる国で感じるのではなく、同じ国に暮らす一人として寄り添って生活しているのだからなおさらだと思う。勤務校でも娘の通う学校でも、すでに外国籍の子どもと一緒に生活している事実はあるのだから、お互いに認め合える環境を提供していくのが、我々の使命だと感じている。

しかし、それは支援体制の強化が必要不可欠である。本校でも日本語教育の支援体制が整っていないことや、支援施設を利用するゆとりのない生活を余儀なくされてしまっている家庭があることも事実である。その現状を理解したうえで、我々ができることを行動に移す時がきたのだと感じる。

● 沖 久美子

津市白山のフィールドワークで WELCOME の方から聞いた話が印象に残っている。「外国に住むと言うことは自分で権利を得なければいけないと言うこと。権利を得なければ犯罪になる。言葉がどれだけできても不自由さはつきまとい、察することは難しく、情報量は限られる。生活に慣れても異文化の中にいると圧迫されている感じがある。」この話をきいたときに、日本人が海外で暮らして感じることと外国人が日本で暮らして感じることには共通点があると思った。異なる言葉、文化、制度のもとでは、どんな人でも困難さを抱える可能性がある。どの国籍であっても、どんな文化的背景を持っていても、どの言葉を母語としていても、異なる環境に置かれれば問題を抱えやすくなる。同じ立場の人同士助け合ったり、関心のある人がサポートしたり、サポートできなくてもそれぞれの立場を理解したり、思いやりを持ったりすることができれば、困難さを抱えることは減り、問題を抱えたときに相談する相手を見つけることができる。そのような環境を作っていくことが重要だと感じた。

● 加藤 奏太

人々は関係しあって生きている。一昔前の日本とは違い、そこには多くの外国の人とのコミュニティがあることは当たり前となった。今回はそれが如実に感じられる機会になったといえる。何も特別なことではなく、それは当然のことで、国等は関係なく、協力し合って生活をしているということを理解できた。私は青年海外協力隊当時、まさしく逆の立場であった。しかし彼らは温かく私をサポートしてくれたことを今でも覚えてい

る。まさしく優しいつながりであった。私も日本では、そんな優しいつながりができる人間でありたいと強く感じた。

● **久米 達哉**

日本で暮らす外国籍の方々は年々増加している。また、様々な国の人々が生活をしている。それぞれ言語も異なれば、宗教、文化、生活様式などありとあらゆるものが異なる。そんな中で本研修を通して様々な「世界」を知ることができた。その中で共通していたのは、人と人のつながりと人の温かさではないかと感じた。どの外国籍の方も日本のよさの一つに「みんな優しい」と答えていた。相手を思いやる気持ちが繋がりを生み出し、そこから新たな社会が形成されているように感じた。また、日本人・外国籍の方問わず生活を楽しんでいるように感じた。特に活動をしている方の様子を見ていると「笑顔」が印象的であった。笑顔は言葉がなくても伝わる全世界共通の表現である。「言葉の壁」はある中でも、それぞれの人々が繋がることで生活を充実させていると感じた。

● **柴田 英子**

日本で活動している団体を見ていると国関係なく何とかしなければという強い意志を持った人たちが集まって、活躍されていた。その強い意志のもとをたどると、悔しさや悲しさ、どうにかしなければというどちらかというと課題に直面しているときの経験に繋がることが多かった。世界の課題や日本での課題に直面すると、自分にできることはないだろうかという気持ちになるのではないかと思う。だからこそ、今の社会の課題を見たり、知ったりすることは大切であり、教師として児童に伝えていくことの大切さを改めて理解した。

そして、国に問わず、新しい場所での生活は不安であり、人の目を気にしがちということである。誰もがマイノリティーになれば心配な気持ちになるし、言葉が通じないと互いに不安になるということだ。それゆえに、同じメンバーで集まってしまうことが多い。その状況を打破するものとして、言語に頼らない方法が非常に重要だと気づいた。スポーツや音楽、食事そういったものが交流する場面では大切なのだと考える。

● **野々山 尚志**

白山町に移住して来た外国籍の若い人達が、日本人の高齢者の方達から信頼され、頼りにされているというエピソードを聞いた。刈谷市のワールド・スマイル・ガーデンに参加していた方からは、「これまで同じ地域に住んでいても挨拶もしなかった人同士が、一緒に農作業をすることで顔見知りになり、知り合いになれた」というお話を聞いた。言葉や文化が違っても一緒に農作業や食事等、何かを一緒にすることで、国籍や言葉や文化の違いを超えて距離が近くなり、みんな同じここに暮らす人たちであるということを認識できる。

また、日本に住む外国籍の方々から、「コミュニティ（つながり）によって、救われた」というお話を聞いた。人がつながれば、助け合える関係になり、生きづらさ、困難さから脱することができるだろう。このことは、日本で今もなお孤独と闘いながら、何とか必死に生きている人たちにも届けたいことである。つながりを意識できた時、人は救われるということを学んだ。

● **松田 翔伍**

ゲストハウスイロンゴの代表である倉田麻里さんの言葉「交流促進のためには、一緒に何かをやるか、一緒にご飯を作って食べること」が印象的だった。世界のどこに住んでいても同じ人間だ。何かをやって得られた達成感を共有したり、美味しいものを食べて楽しい時間を過ごしたりすることで、心の距離は縮まっていく。確かに、私が受け持つ学級でも同じことが言える。行事の後は、一生懸命にやった分だけ絆が深まる。私が授業を通して子どもたちに多文化共生について学習させる際には、表面的な違いではなく、外国の方の心の奥にある思いが出てくるような教材を作りたい。フィリピン人コミュニティの SBK の皆さんと交流をした際に、皆さんの目標や夢を聞くことができた。このように未来について国境や言葉の垣根を超えて考えることも大切だと感じた。私はこれまで、違いについて考えさせることが大切だと考えてきたが、違いについて考えさせるには、まずは同じところに着目していくことで次第に違いに着目できるようになるのではないかと考えた。

● **山本 孝次**

日本は海外からどのように見られているのか。日本人はこのことをとても気にする。幸い今回話を聞いた外国にルーツを持つ人たちからは、「日本人は優しくて親切で、それが自分がこのコミュニティで暮らしている理

由だ」とか、「日本は街や通りがきれい」、「日本人は時間にきちんとしている」などの高評価を得た。話してくれた人たちは、日本の良さを母国に持ち帰り伝えたいと考える一方で、子どもたちに母国の文化を伝えたいという強い思いを持っている。ブラジルルーツの子どもたちに継承語としてのポルトガル語を伝える活動からその思いを強く感じた。自国の文化を大切にしたいという気持ちは同じだ。多文化共生社会の実現のためには、各文化を尊重することが大切だと改めて気づいた。フィリピン人コミュニティ SBK のバルさんが言った「日本とフィリピンを結ぶ懸け橋となりたい」という言葉が印象に残る。日本社会が多様性を受け入れる社会となり、たくさんの懸け橋となる人材を輩出するようにしていく方法を考えていきたい。

● **神谷 樹**

フィールドワークの中で地域に暮らす外国人住民や支援にあたる人たちから実際にお話しを聞き、時にはダンスや料理など、様々な国の文化を体験した。そんな活動を通して日本文化との違いを知り、楽しむことで様々な国やそこで生まれ育った人々への興味が大きくなっていった。

たとえ言葉が通じずとも、文化に触れることはお互いを伝え合うことができると思う。これまで以上に日本に暮らす多様な背景を持つ人たちのことを知りたい、また、彼らに日本のことをもっと知ってほしいと考えるようになった。

4．柱３「多文化共生の課題について共に考え・共に越える」観点から学んだこと

● **稲垣 裕子**

日本経済を支えるために日本に移住してきた外国の方々は、日本を信頼し、日本の学校教育を信頼して来日している。「日本は安心して住めるいい国、そのため永住したい。」との思いも聞いた。

刈谷市には外国人の散住地域、知立市には外国人の集住地域があり、フィリピン人やブラジル人コミュニティのあることを知った。

その中で「コミュニティにいれば日本語は生活に必要ない。」「コミュニティから外に出るのが怖い。」「学校でブラジル人と知られたくない。」と感じて生活している人や子どものいること、また外国人コミュニティと地域社会に見えない壁のあることも知った。この壁を越えるために、知立市の福祉担当者や地元の人々が協力して地域福祉を実践する現場を見た。特に「イベント、日常的な交流の場、支援の充実、PR」によるつながりの強化は、地域社会だけでなく、学校生活にも生かして、外国にルーツのある子どもたちが活躍できる場を作ることができる、と感じた。

● **大島 俊介**

共に越えるための手だてとして一番のポイントは持続可能性だと感じた。支援団体の金銭面の苦労とコミュニティの拡大の難しさが垣間見えたからである。

運営コストがかかってしまい、団体の支援に限界が来てしまっては、運営者の負担が増えるだけで、相互満足が得られない状況が生まれてしまうであろうと考えた。また、コミュニティを拡大させるための共通理解を得ることの難しさにより、関心のある層が広がっていかず、運営が停滞してしまうであろうとも考えた。自治体との連携や協力団体があるコミュニティとそうでないコミュニティの差があるのはとても悲しい現実であると思う。

日本での共存を志している外国籍の方の思いに寄り添っていきたい。そのためにも、学校現場でできることとすると、やはり自治体や教育委員会への要望は不可欠だと思う。現場だけで解決できるものではないので、地域とのつながりを積極的にとる学校づくりから着手していきたいと思う。

● 沖 久美子

地域に多くの外国人住民が暮らし、ともに活動しているところでは、「多文化共生」という言葉を越えた住民同士のつながりや関わりがあると感じた。日本人も外国人も支える側にも支えられる側にもなる。また、日本語という言葉の壁があったとしても、そこに助けてくれる人や友人や同じ地域に住む住民として関わってくれる人がいれば、大きな問題と感じることなく生活できるという一面もフィールドワークの中で見ることができた。言葉、制度、文化の壁はあると思うが、まずは地域の住民の関わりが重要だと思う。同じ地域に暮らす住民として認めた上で、言葉や制度、文化の壁を低くするための支援を行っていく必要があると思う。日本人が外国人を支えるだけでなく、外国人コミュニティや日本で生まれ育った外国にルーツを持つ若者らが活躍し、それをサポートする仕組みができると、よりよい「多文化共生」のかたちに近づいていくのではないだろか。

● 加藤 奏太

当たり前のことだが、「知る」ことなのだと思う。「知る」ことができれば、それは近くに感じることができるだろう。知り合うことを、チャンスととらえ、好意的に受け止めたり、文化の違いを楽しんだりすることで、価値観が広がり、いろいろな人にとって温かい社会が生まれるのではないだろうか。

大きな課題として、彼等のアイデンティティを尊重し、保証する必要があるのではないかと感じた。この国際化社会の中、さまざまなことが混ざり合ってしまう世の中ではあるが、私のルーツと呼ばれるものに対する愛着は持っておくべきではないだろうか。近くに住む日本人として、それを大切にしやすい環境づくりをすることが大切なのではないかと思われる。それを惜しげもなく、誇らしげに発揮できる場所があることが、お互いの文化を敬い、広め、大切にしあう第一歩ではないだろうか。

● 久米 達哉

自分が本研修を通して感じた多文化共生の課題は、お互いへの関心をどれだけもつか、そして行動に移す力をどれだけもっているかだと感じた。日本人・外国人にはその言葉が表すように、壁がすでにある。さらに言葉、文化、制度など様々な壁がある。それらを乗り越えていくことが必要であると感じた。そのためには、どれだけ互いのことを理解し合い、相手の立場に立って考えていくことが大切だと思う。今回訪問した先ではこれらの課題を既に乗り越えることができていた。そこには、相談窓口やまちづくり、制度など様々な面で外国籍の方が安心して生活できるようなサポート体制が整えられているように感じた。

また、人同士が繋がることで新たに課題を越えていく力が強固になっていると感じた。互いを知り、一歩を踏み出していくことが大切であると感じた。

● 柴田 英子

理想の未来を共有することが大切だと思う。学校現場や地域、研修先など多くの人と理想の未来を思い描き共有するだけでもかなりの価値があるのだと考える。理想の未来を考える中で同じような気持ちの人々が繋がることで、理想の未来が少しずつ現実になっていくのだとこの研修を通して学んだ。

二つ目は、自分の中の当たり前という感覚に気づくということだ。相手はどんなことに困っているのか、どんな支援を必要としているのかを考える際に、自分にとって当たり前過ぎて目を向けていなかったところに大切なことがあるのではないかと思う。その当たり前という感覚に気づくためには、まず相手の立場に立つことが相手を理解するうえでとても重要なのではないかと考える。今後この多文化共生の課題を共に考え、共に越えるのに大切なことは、人との関りをもつ一歩を踏み出すこと。新たなコミュニティや場所を訪れる際に言語の壁があると勇気がいることだと実感した。しかし、互いに関わらなければ何も変わらない。だからこそ人との関りをもつための一歩が大切だと考える。

● 野々山 尚志

刈谷市役所市民協働課の加藤さんや、ゲストハウスイロンゴの倉田麻里さんの熱い思いをもった人たちの行動によって、多くの人の共感を生み、人が行動するようになっていった。強い思いは人の心を動かす。そのためには、思いをもった人が、行動しなければならない。一人で語っているだけでは、まだ夢でしかないが、人を巻き込んでいく力も大切になってくる。その際、自分一人でやるのではなく、人と共に課題に取り組必要がある。このことは、JICA 青年海外協力隊で活動していた方からも聞いたことがあった。私たちは学校現場でこ

れを実践に移したい。外国籍、言語や文化の違う人たちはもちろん、あらゆる違いのある人たちと共に何かをする機会を作っていくことができる。多文化共生を進めるためには、そのような機会を学校でも作るようにしたい。

● **松田 翔伍**

多文化共生の課題について共に乗り越えるためには、関わりをつくることが大切だ。そして、関わる人々が同じ方向を向いて取り組む必要がある。同じ方向を向くためには、心のつながりがなければいけない。また、課題解決の取り組みを継続していくためには、地道に目の前にいる人を大切にすることが大切だ。一緒に課題を解決していく仲間は、じわじわと口コミで広がっていくことが多いと学んだ。結果はすぐには出ないかもしれないし、コロナ禍でより大きな壁にぶつかることもあるかもしれないが、課題解決のためには人を大切にすることが最も大切なことだと気づいた。多文化共生の課題を乗り越えていくことには困難がつきまとう。しかし、それらの活動をとにかく楽しみながら取り組もうという気持ちをもてるようにしたい。まずは身近な小さなことでも、自分の行動によって世界がより良くなることに気づき、実際に行動に移せるような豊かな学習が展開できるように教材研究に励みたい。

● **山本 孝次**

刈谷市のワールド・スマイル・ガーデンでは、外国人がいるということを特に意識することなく、畑作業（草取り）が行われていた。これが求めていくべきコミュニティの姿なのではないか。日本社会で多文化共生の一番の障壁となっているものは、多様性への対応に不慣れであることだと思う。外国人ヘルプライン東海の後藤さんから、外国人住民とつながらない３つの壁として、①言葉の壁、②制度の壁、③心の壁、があると聞いた。米国や豪州のような移民を多く受け入れてきた国では、外国にルーツを持つ人をコミュニティに迎えるにあたって、言語習得のサポートを広く行っている。難民申請したら、いつまでなのかわからないくらい長期間にわたって収容されるということはない。異なるルーツを持つ人が複数、教室の中にいる、オフィスの中にいるという状態がごく普通であるという社会にしていきたい。外国にルーツを持つ人たちをコミュニティの社会資源であると認識して、彼らもともに豊かなコミュニティづくりに参画する多文化共生社会を目指していくべきである。

● **神谷 樹**

多文化共生という複雑な課題を考えるにあたって、何より大切なことは多くの人とともに考え続けることだと思う。これまでのフィールドワークで出会ってきた人たちそうであったように、様々な立場の人達と意見を交わすことの重要性に気づいた。また、訪問先の人たちのみならず、フィールドワークの中で多文化共生についてともに学んだ参加者にも感謝したい。

● 中間会合

◇ 「開発教育･国際理解教育実践報告フォーラム 2022」で行う教師国内研修報告及び実践体験ワークショップの内容検討会を、次の日時に行った。

● 教師国内研修報告の検討会

第 1 回：2021 年 11 月 13（土）10：00～12：00
参加者：8 人

第 2 回：2022 年 1 月 22（土）10：00～12：00
参加者：8 人

● 実践体験ワークショップの検討会

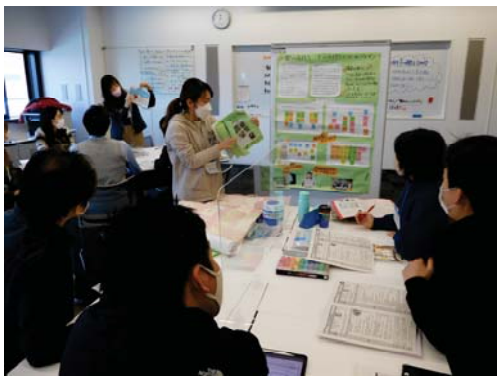
第 1 回：2021 年 11 月 13（土）13：00～15：30　参加者：3 人

第 2 回：2022 年 1 月 22（土）13：00～15：30　参加者：3 人

（開発教育指導者研修（実践編）同時受講者のうち 4 人は他のワークショップチームに参加）

● 事後研修②

◇ 以下のとおり、開発指導者研修（実践編）受講者と共に研修を行った。



● 事後研修②／開発教育指導者研修（実践編）第 4 回

日時：2022 年 2 月 26（土）10：00～17：00

ねらい：仲間の実践の成果と課題から学びあい、開発教育の意義と可能性を確認共有する。各自の実践内容等を一般に向けて発表し、学びの好循環を作る準備を行う。

参加人数：教師国内研修受講者 10 人

内容：「開発教育指導者研修（実践編）報告書」P.70-73 参照

● 実践報告フォーラムでの報告

＜教師国内研修報告／実践体験ワークショップ＞

◇ 以下のとおり、現地での写真・音楽・動画と共に、教師国内研修報告および実践体験ワークショップを行った。

● 教師国内研修報告

日時：2022 年 2 月 27（日）10：15～10：35

内容：次ページ参照

● 実践体験ワークショップ

日時：2022 年 2 月 27（日）15：20～17：00

内容：「Live Together」（多文化共生）→詳細は「開発教育指導者研修（実践編）報告書」P.80-81 参照

★ 教師国内研修報告で表示したスライド（抜粋）

柱１
日本の中の世界に肯定的に出会う

柱２
日本の中の世界との同一性やつながりに気づく

柱３
多文化共生の課題について共に考え、共に越える

COLORS（外国にルーツを持つ生徒への進学、若者への就職支援をしている機関）

浜松

外国人として見るのではなく、１市民として、１チームとして、日本社会をよりよくしていきたい。

母語であるポルトガル語を学ぶことは、自分の思考や人格を作る上でとても大切

親子のコミュニケーション

ブラジル文化を学ぶ

学校の勉強がわかる

日本人の学生が、ボランティアとして子供たちと関わっている

日本の中の世界との 同一性 と つながり

私達は共に１市民として社会で生き、
子供たちの成長を一緒に見守りたい

日本に暮らしている外国人はどんなことに困っている？

言葉の壁　日本語を読んだり、書いたりすることができない。大切な情報を得ることができない。

制度の壁　どんな制度があるのか、制度を使うことができるのか、わからない。制度を利用できない。

心の壁　地域の人との関わりがなく孤立している。外国人コミュニティからでるのがこわい。

課題解決のために行動する人々

外国にルーツをもつ人々の活動

I.I.E.C（静岡県浜松市）

フィリピン人コミュニティ
SBK（愛知県刈谷市）

課題解決のために行動する人々

住民同士が関わることができるように

外国人集住地区 昭和地区
（愛知県知立市）

ワールド・スマイル・ガーデン
（愛知県刈谷市）

多文化共生の課題解決のために

- 互いに関心を持つこと。
- 互いのことを理解すること。
- 相手の立場に立って考えること。

⇒**授業実践へ**

＜ポスターセッション（実践報告）＞

◇ 実践のねらいとプログラムをまとめた「実践報告ポスター」と実践の教材、成果、写真などをもとに、フォーラム午前中に、受講者全員が 14 分ずつ（報告 9 分＋質疑応答 5 分）報告を行った。

Ⅴ．実践報告書

実践報告書の内容一覧

No.	名前	対 象	時間数	タイトル
1	稲垣 裕子	中学校1年生 (30 名×4 クラス)	2時間	外国からやってきた転校生のWくん
2	大島 俊介	小学校5年生 (91 名)	8時間	わたしたちの『幸せ』を見つけよう ～多文化共生編～
3	沖 久美子	特別支援学級 1･3･4年生 (6名)	2時間	ミッション、言葉の壁をこえろ！
4	加藤 奏太	小学校2･3･4 年生 (17 名)	3時間	聞いてほしい私の国のこと ～日本語でゆっくり伝えます～
5	久米 達哉	中学校3年生 (76 名)	4時間	World smile Project
6	柴田 英子	小学校5年生 (78名)	6時間	Live Together
7	野々山 尚志	小学校6年生 (79名)	6時間	みんなで創るHappy Town ～持続可能な多文化共生のまち～
8	松田 翔伍	小学校5年生 (93名)	9時間	YES WE CAN～今日から私は～
9	山本 孝次	中学・高校教員 (8名)	2時間	お悩み解決します！ ～その時、相談員は動いた～
10	神谷 樹	ブラジル人学校 中高生クラス (5 名)	8時間	かんがえよう！「幸せな生活」に必要なこと

外国からやってきた転校生の W くん

学校名	三重県松阪市立鎌田中学校	**授業者氏名**	**稲垣 裕子**
対象学年（人数）	中学校1年生（30名×4クラス）	**実践年月（時数）**	2022 年 1 月 14 日～21 日（各 50 分×2 回）
担当教科等	道徳科		
単元名（活動名）	多文化共生社会について		
実践する教科・領域	道徳・外国人の人権、異文化理解		
学習領域	**A 多文化社会** … 文化理解（○）／ 文化交流（ ）／ 多文化共生（ ） **B グローバル社会** … 相互依存（○）／ 情報化（ ） **C 地球的課題** … 人権（○）／ 環境（ ）／ 平和（ ）／ 開発（ ） **D 未来への選択** … 歴史認識（ ）／ 市民意識（○）／ 社会参加（ ）		
単元目標	・外国につながりのある生徒が同じクラス、学校の中で安心して過ごせるように1人1人がどう考え、行動するかを導く。 ・日本の中の外国文化について知り、異文化への関心を持てるようにする。		
単元の評価規準	**知識および技能**	・三重県、松阪市内の外国出身者について概要を知る。外国から転校生の気持ちを自分のこととして感じ、安心できるサポートについて考えることができる。	
	思考力、判断力、表現力等	・外国出身の子が家庭、学校で出会う困難をロールプレイで演じ、その心情を理解したり、課題解決の方法について考えたり、表現したり発表することができる。	
	学びに向かう力、人間性等	・もっと多文化共生について深く学びたい、外国出身の人に話を聞きたい、という気持ちになり、言葉を超えて繋がり合う力に生徒自らが気付くことができる。	
単元設定の理由・意義（児童生徒観、指導観、教材観から）	・12/2（木）に人権フォーラムがあり、差別をなくす取り組み、障害のある生徒と共に生きること、相手と対話し理解し合うことの大切さ等、子ども達が人権をテーマに深く考え、発表し合う行事があった。 ・今年度11月、フィリピンから転校生を迎え、教員・本人・他の生徒達が言葉の壁を感じていた。コミュニケーションのきっかけ作りや、今後の意識や行動の変容を目指した。 ・外国人の人権について、1年2年共に未学習であったため、2年生には12月に英語科の授業において、1年生には1月には道徳科において「多文化共生」の導入を試みた。今後子ども達が生きていく上で必須の課題となるため、考えを深めてもらうため、授業実践した。		

［単元計画（全2時間）］

時	ねらい	学習活動	資料など
1 本時	・身近にいる外国人について知り、異文化に関心を持つ。 ・外国で暮らす不自由さを実感する。	・クイズ方式で、三重県や松阪市に住んでいる外国人について学習し、日本の中にある外国について写真を見て学ぶ。 ・自分が外国の学校に転校したことを想定し、困ること・サポートしてほしいことについて、グループになり、KJ 法で意見を出し合う。 ・ギャラリー方式で、他のグループの意見を共有し、評価し合う。 ・振り返りシートへの記入	・三重県・松阪市に住む外国人の数や割合（統計・グラフ） ・研修で訪問した機関や地域の写真 ・KJ 法のための付箋、模造紙 ・振り返りシート
2 本時	・外国ルーツのあるメリットについて知る。 ・異なる文化や言語の壁を超えて、関わり合おうとする気持ちを育て、実行できるようにする。	・社会で活躍している、外国ルーツを持つ人の話を聞く。 ・異文化の中で困難を抱える事例をもとに、ロールプレイを行う。KJ 法で自分の気持ちと向き合い、グループで解決策を考える。 ・実際に外国から来た転校生と、対話を行い、今を共有する大切さについて実感する。 ・多文化共生への思いをリーフカードに書き、1 人 1 人が貼って、クラスで1つの木を作る。 ・振り返りシートへの記入	・インタビュー動画 ・ロールプレイの事例シート ・KJ 法のための付箋、模造紙 ・リーフカードと木を書いた模造紙 ・振り返りシート

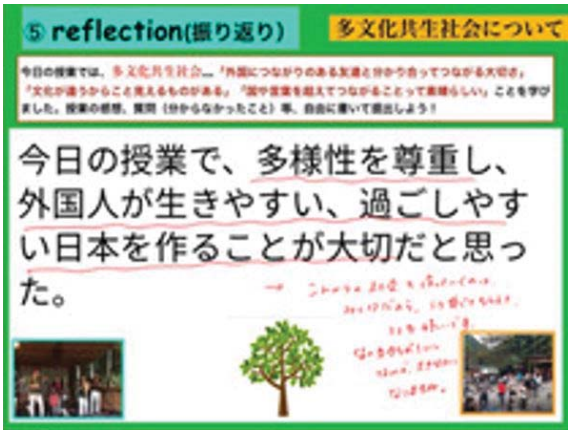
［本時の展開（1時間目）］

ねらい	・外国につながりのある生徒が同じクラス、学校の中で安心して過ごせるように1人1人がどう考え、行動するかを導く。 ・日本の中の外国について知り、異文化への関心を持てるようにする。		
過程・時	**教師の働きかけ・発問および学習活動**	**指導上の留意点（支援）**	**資料**
導入 (5 分)	ミラーゲーム 「多文化共生社会」とは？		・keynote、ロイロノートを使用して、画面共有を行う。
〈起〉 (5 分)	人権フォーラムを振り返って ・発問1「今、三重県や松阪市にどれくらいの外国人がすんでいるか」「どの国の人が多いか」又その国の国旗や挨拶の言葉について、クイズ形式で学ぶ。	・人権フォーラムや英語科のテキスト内での学習と本時とのつながりが意識できるようにする。 ・身近にいる外国人を意識できるようにする。 ・相手の国を尊重する気持ちを持ってもらう。	・三重県内の外国人の数やグラフの提示（令和２年国勢調査） ・世界の国旗
〈承〉 (5 分)	・「日本の中の外国を知ろう」 写真を見て、日本に外国人コミュニティや多文化共生のために活動している団体があることを知る。	・写真を見せて、生徒に尋ねながら、身近にいる外国人が日本人と共に生きていることを伝える。	・セメンチーニャ、ワールデン、DIFAR、ハッレ倭、知立団地の写真 ・やさしい日本語の紹介
〈転〉 (30 分)	・発問2「もしクラスに外国から転校生が来たらどうする？」 グループになり、KJ 法で意見を出し合い、書き出す。 →ギャラリー方式で共有し、評価し合う。	・自分が外国の学校に転校したことを想定し、問題や安心できるサポートについて考える。 ・他の人の意見を聞き合って、新たな視点に気付けるようにする。	・KJ 法のための模造紙、付箋、ペン
〈結〉 (5 分)	・振り返り　本時にて感じたこと、意見等シートに記入する。		振り返りシート

［本時の展開（2時間目）］

過程・時	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点（支援）	資料
導入 〈起〉 （5 分）	・外国の挨拶 ・外国にルーツのある人にとって良いこと		
〈承〉 （5 分）	・夢を持って活動している、外国にルーツのある人の話を聞く。	・外国から来た人たち自らが中心になって活動している現状を知り、理解できるようにする。	・インタビュー動画（セメンチーニャ、COLORS）
〈転〉 （30 分）	・発問3「外国から来た友達の声を聞いて、どう行動できるだろう」 事例1「学校にこないで」 事例2「私、いじめられているかもしれない」 グループになり、ロールプレイを行って、転校生の気持ちを実感する。その後 KJ 法で「どう感じたか」「友達としてかけてあげたい言葉」を考えて、グループで意見を出し合う。ロールプレイの続きを演じる。 ・実際に転校生のいるクラスでは、「W くんに紹介したい自分のこと」「W くんに聞いてみたいこと」を個人・グループで書き出し、実際に対話を行う。	・どちらか1つのケースを選んでロールプレイを行う。ロールプレイは日本語でも良いことを伝えて、転校生の気持ちが実感できるようにする。	・実話を元にしたロールプレイのシート ・グループで意見交換するための付箋、模造紙、ペン
〈結〉 （10 分）	・発問4「これからの外国ルーツのある人（転校生のWくん）とどう関わっていきたいか。」「多文化共生社会において自分のできることは何か」 多文化共生社会への各自の思いや願いを、リーフカードに書く。	・授業の中で感じたこと、個々の思いを、カードに書き込むことで表出できるようにする。	・個人ワークのための用紙、グループワークの模造紙 ・多文化共生ツリー作成のためのリーフカードと台紙（木を描いた模造紙）
	・振り返り 授業で感じたこと、考えたことを振り返りシートに書く。（国や文化、言葉を超えてつながることは、素晴らしい、等）	・振り返りで自分の考えの変容や、授業の中で発見したことについて把握できるようにする。	・振り返りシート（ロイロノート）
評価規準に基づく本時の評価	・三重県や松阪市内に多くの外国人が住んでいることを理解し、自分に何ができるかを考えたり、言葉が通じなくても関わろうとする積極性、異文化を知りたいと思う気持ちを育てるきっかけづくりができた。 ・実際に外国から来た転校生と対話をする場を持ち、つながり合う喜びを子どもたちがお互いに感じることができた。		

▲ 多文化共生ツリー

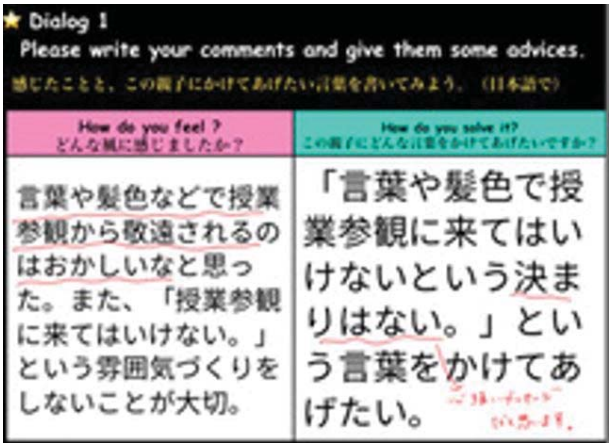


▲ 振り返りシート（ロイロノート）の例

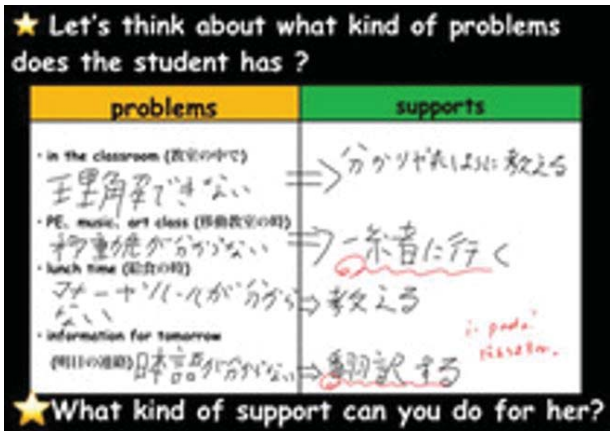
［総括・まとめ］

学習方法および外部との連携	・1人1台 i-pad に、本時で使うワークシートを送り、個人ワーク、ペア・グループワークが行いやすいように配慮した。 ・KJ 法、ギャラリー方式を用いて、生徒同士が意見を表出しやすく、評価し合える環境を作った。 ・人権学習担当者、学年を超えた教員の関わり、管理職（校長・教頭）からの助言を元に授業を作成し、授業後の評価も受けた。
学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み	・校外では、同じ松阪市内の小中学校にて、国際教室の生徒たちを主人公にした人権劇の発表、Skype にてフィリピンの学校とつながる取り組みを行っている学校があり、実践内容を共有している。
苦労した点	・「多文化共生社会」について」初めて聞く生徒たちにどう身近に感じてもらえるか、思案したこと。 ・「外国から来た転校生」への関わりや、困難事例のロールプレイで、生徒たちが思考・表現するのに時間がかかったこと。 ・日本語を話すことに慣れていない転校生と他の生徒とのコミュニケーションをどう進めるか、授業を日々の生活にどう活かせるか、思案したこと。
改善点	・教員からの説明は短く、子ども自身の活動できる時間を十分に取る。 ・発表はまずグループで行い、1人1人が発言しやすい雰囲気作りをする。→生徒同士で意見交換できる時間を作る。 ・最後にリーフカードや振り返りを記述する時間を十分に取る。
成果が出た点	・子どもたちが多文化共生社会について知ったこと。 ・差別をせずに自分から話しかけて、積極的に関わりを持ちにいきたい、と各生徒が思えるようになったこと。 ・異文化を知ることや、言葉を超えてつながる意識を持ち、これからの外国語や人権学習の動機づけになったこと。
学びの軌跡（児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど）	・いろんな国で違う文化があり、その文化を崩さないこと、それを嫌だと思わないことが大切だと思いました。ゆっくり日本語を話したり、一緒にいることで相手も日本に慣れていくと思ったから、関わることが大切だと思いました。 ・色々な人の個性を理解して生活する。日本とは違う文化でもその文化の良さを知ろうと思った。そして、自分の話せる範囲で精一杯コミュニケーションを取る。文化が違うだけで差別がないような世界を作りたい。 ・暮らしていた国について話したりしてみたいし、外国人への差別をなくしたい。皆同じ人間なのだから。
授業者による自由記述	・多文化共生社会について、ほとんど学んだことのない生徒たちに、導入としてこの授業を行う役割が自分にあると感じ、授業のプランを立てた。実施に当たっては、管理職にも授業案を検討していただき、外国に繋がりのある生徒への配慮など、授業時の言葉遣いへの注意も受けた。実践は授業デザインという形で全職員に指導案のシートを作り、多文化共生の授業に関心を持つ先生方に参観してもらい、助言も得た。 ・現在、国際教室のない本校で、生徒と教職員が深く多文化共生について考え、積極的に外国籍の生徒を支援し、地域の拠点として変化していくことを願っている。学校としては、今年度 11 月に来日したフィリピン国籍の生徒がいるため、現在支援のシステムづくりを行っている。この授業が、本人・他の生徒・教員の今後の意識や行動の変化につながることを願い、双方のコミュニケーションを今後も積極的に進めていきたい。
単元構想・実施における参考資料等	・三重県、松阪市に暮らす外国人についての実際の数や割合。 ・国内研修フィールドワークにおける訪問先の写真。（セメンチーニャ、ワールドスマイルガーデン、ハッレ倭、DIFAR、知立団地） ・インタビュー動画（セメンチーニャ、COLORS、日系ブラジル人とのオンラインミーティング、インド料理体験）

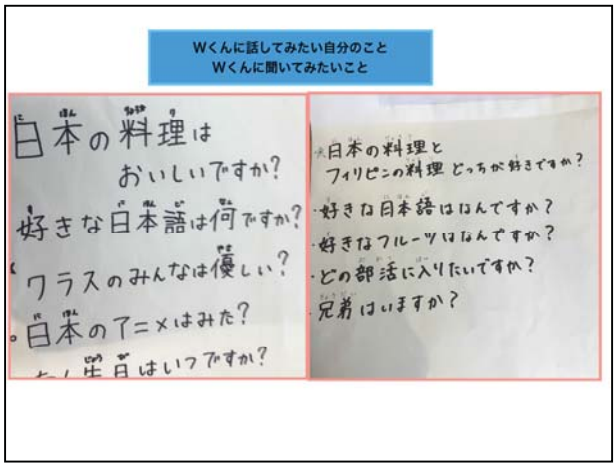
［学びの軌跡（児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど）］



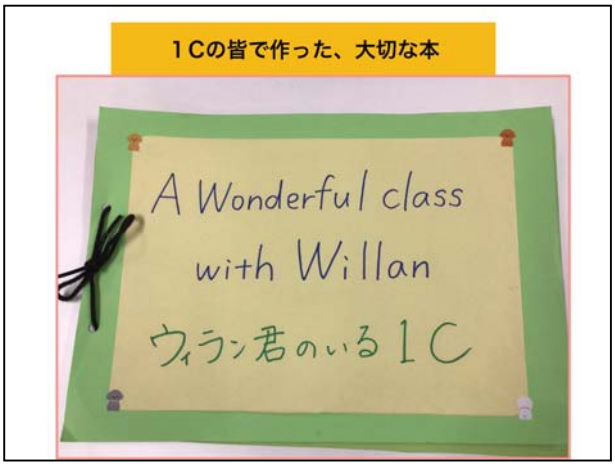
▲ ロールプレイで感じたこと、かけてあげたい言葉



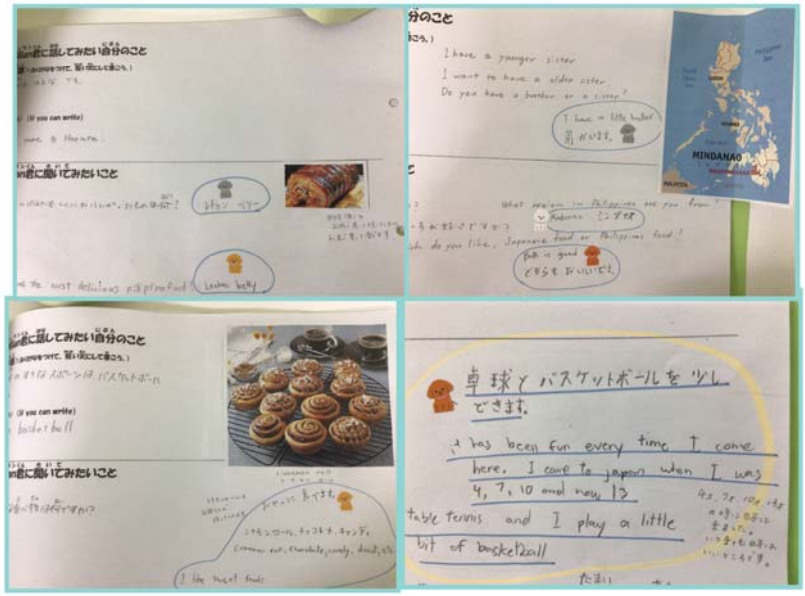
▲ 外国ルーツのある人（Ｗくん）が抱える問題と、それに対してサポートできること



▲ Ｗくんに聞いてみたいこと



▲ クラスのみんなで作った大切な本



つながり合うことって、素晴らしいね。

わたしたちの『幸せ』を見つけよう～多文化共生編～

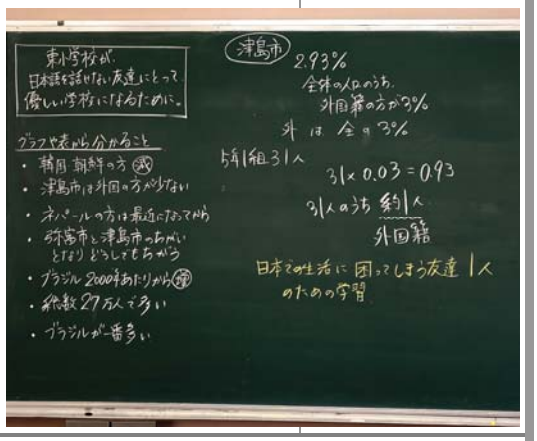
学校名	愛知県津島市立東小学校	**授業者氏名**	**大島　俊介**
対象学年（人数）	小学校5年生（91名）	**実践年月（時数）**	2021年 1月～2月（8時間）
担当教科等	全科		
単元名（活動名）	総合的な学習「わたしたちの『幸せ』を見つけよう」（人権）		
実践する教科・領域	総合的な学習		
学習領域	**A 多文化社会** … 文化理解（○）／ 文化交流（　）／ 多文化共生（○） **B グローバル社会** … 相互依存（　）／ 情報化（　） **C 地球的課題** … 人権（○）／ 環境（　）／ 平和（　）／ 開発（　） **D 未来への選択** … 歴史認識（　）／ 市民意識（　）／ 社会参加（　）		
単元目標	・日本で暮らす国籍の違う方の苦労を知り、自分たちができることを考える。 ・日本と他国の文化の違いに興味をもち、多文化共生社会の実現に向けてできることを考える。 ・日本語を話せない友達にも優しい学校になるように、案内表示をつくる。		
単元の評価規準	**知識および技能**	・日本と世界の文化の違いを知り、共通点や相違点に気づくことができる。	
	思考力、判断力、表現力等	・日本で暮らす他国籍の方が苦労している事象から、多文化共生を実現するための課題を考えることができる。	
	学びに向かう力、人間性等	・日本語を話せない友達とともに生活するうえで、自分たちにできることを考えることができる。	
単元設定の理由・意義（児童生徒観、指導観、教材観から）	・SDGsの視点を取り入れた学習を始めて2年目となる子どもたちを対象にしている。昨年度は環境を主テーマとして学習を進めてきた。1年目の世界の課題に対して悲観的にとらえる児童が多く、他人事になっている児童もいた。今年度は人権を主テーマとしている。身近にある課題を一つずつ解決していくことで、人権感覚を養い、自分事として学習に臨ませたいと思い、実践を行った。 ・人権をテーマに学習するために、「世界人権宣言」「他己紹介による他者理解」「女性の人権」「障害のある方への人権」「LGBTQ＋」など、年間を通してさまざまなタイトルで学習してきた。本実践は、この人権の学習の中の最後のパートとして「多文化共生」を設けた。「わたしたち『幸せ』を見つけよう」という総合学習のテーマのもと、誰も置き去りにしない人間関係を築いていくことを目標にして、指導にあたっていきたい。 ・本実践は、「JICA 中部国内研修（多文化共生）」の中で出会った外国籍の方の経験談や料理、外国人の集住地域の努力や工夫を教材としている。本研修に参加する中で、様々な活動をしている方々の笑顔と充実感が印象的であった。課題や苦労が多い活動の中でもやりがいを感じて活動をしている方の姿を、目の前の子どもたちに触れさせたいと感じた。そこで、課題を解決することを目標にするのではなく、さまざまな活動をしている方のおかげで、「未来は確実に良くなっている」ことを子どもたちと共有しながら学習していきたいと考えるようになった。本実践の中で使用する教材を「負」の教材としてとらえるのではなく、未来のために前進していることを実感できる教材となるように、使用していきたいと考えている。		

［単元計画（全8時間）］

時	ねらい	学習活動	資料など
1	世界の言語に肯定的に出会うとともに、日本での生活を困っている外国人がいることに気づく。	「あいさつゲーム」【アイスブレイク】 ・「こんにちは」を多言語で用意し、コミュニケーションをする。 ・1 回目　世界の言語の人口比率に合わせたカード ・2回目　愛知県の外国籍の方の人口比率に合わせたカード	・あいさつカード
2	実際に外国の方が苦労していることを想像するとともに、多文化の面白さに気づく。	「もしもわたしが一人で知らない国へ行くとしたら」 ・楽しみなこと・心配なこと【対比表】 ・ギャラリー方式で他グループと共有する。 ・日本のいいところを話してくださったインタビューの紹介	・B4用紙、ペン
3	多文化について興味をもつとともに、日本で多文化を感じる場面がたくさんあることを知る。	「これ何？これどこ？」【クイズ】 ・研修で出会った料理や案内看板、商品などの写真と、ALT の母国料理、地域にある多国籍料理店の写真を題材にする。 ・インドカレーの手作り体験の動画を紹介。 ・多国籍料理を献立に取り入れる理由を栄養教諭にインタビューする。	・料理や商品などの研修で撮影した写真 ・ALT の母国の郷土料理の写真 ・インドカレーの手作り体験の動画 ・栄養教諭へのインタビュー動画
4	学校での生活の中で配慮しなければならないところを探すことで、友達が安心して生活できるためにできることを考える。	「これは伝わらないとピンチ！学校探検」【マッピング】 ・グループごとに多言語のサポートが必要な場所を紹介する。 ・撮影してきた写真を見ながら、案内表示の方法を相談する。	・校内地図、丸シール、タブレット
5・6 本時	愛知県の外国籍別人口割合から愛知県内の傾向をつかみ、施設の整備の面で自分たちにできることを考える。	「日本語が話せない友達にやさしい学校づくり」 ・愛知県の外国籍人口別割合を紹介する。 ・グラフからわかることを考える。【ブレーンストーミング】 ・津島市では、30人学級で約1人が外国籍であることを紹介する。 ・案内表示をつくる。（ポルトガル語、中国語、韓国・朝鮮語、タガログ語、ベトナム語、スペイン語の6言語について作成する）	・資料「愛知県内の市町村における外国人住民数の状況」 ・模造紙、ペン、タブレット、八つ切り画用紙
7	外国にルーツのある方へのインタビューを行い、日本でともに生活するために必要なことを考える。	「日本語を話せない友達が安心して過ごせる学校にするために」 ・あいさつなどのコミュニケーションをとるためにどのような行動をするといいのかを考える【みんなのビンゴ】 ・韓国、中国、フィリピンの文化を児童にインタビューする。 ・外国籍の方のサポート活動をしている方にインタビュー動画を紹介。	・A4用紙、ペン ・外国籍の方のサポート活動をしている方へのインタビュー動画
8	自国と他国の文化や考え方の違いをお互いに認め受け入れる心情を育む。	異文化コミュニケーションゲーム「バーンガ」【ゲーム】 ・自国のルールと他国のルールは異なることを理解するためのゲーム。	・「バーンガ」

［本時の展開（5･6時間目）］

ねらい	・愛知県の外国籍別人口割合から愛知県内の傾向をつかみ、施設の設備の面で自分たちにできることを考える。

過程・時	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点（支援）	資料
導入 10分	① 「これ何？これどこ？」の写真について発表する。 ・3時で作成した成果物を用いて、それぞれの写真に込められた意味を紹介する。 ・外国籍の児童の文化に触れる機会を設け、インタビューを行いながら、多文化への関心をうながす。 ・ALT の母国の料理について紹介する。	・喫茶店のモーニングや、和食の文化にも、多文化のアイデアやメニューが生かされていることを紹介する。 ・外国籍児童と保護者に趣旨を説明し、依頼する。	3時の成果物
	②愛知県の外国籍別人口の割合について話し合う。【ブレーンストーミング】 児童の意見は下の板書参照 ・外国籍別の人口が増えていることだけでなく、ベトナムから来られる方が急激に多くなっていることをおさえる。 ・割合の多い国の言語がすべて異なることをおさえる。 ・津島市の外国籍別人口の割合から、30人学級に在籍する外国籍児童の人数を算出させる。 ・外国籍児童に国籍を発表してもらい、子どもたちの相互理解を図る。	・ハーフや外国にルーツのある方がいることも紹介することで、多様性への理解を深めさせる。 ・既習事項の項目を扱うことで、算数科の学習の意義を確認する。	・愛知県の外国籍別人口の割合の表やグラフ4種類
	③撮影してきた資料から案内表示をつくるために、「ここは優しくないベスト3」を決める。【ランキング】 ・安心安全に学校生活を送るために必要な改善点という観点で、ランキングを考えさせる。 ・ベスト3を発表し、各グループで作成する案内表示が重ならないように作成する場所を決めさせる。 案内表示の作成内容（一部） ・消火栓　・火災報知器　・保健室　・職員室　・トイレ ・ろうかははしらない　・ここにははいらない　・避難経路	・言語、意味を明示し、日本語が話せない児童が転入したときの支援ツールとして、日本語指導の職員と成果物の使用方法について打合せをしておく。	4時で作成したマッピング成果物
	④案内表示を作成する。 ・ポルトガル語、中国語、韓国・朝鮮語、タガログ語、ベトナム語、スペイン語の6言語について作成させる。 ・google の翻訳機能をメインとして調べ学習を行わせる。 ・支援サイト「かすたねっと」や東京都教育委員会作成の「たのしいがっこう」からヒントをもらい、成果物にイラストや日本語表記も入れておくメリットについて共有する。		

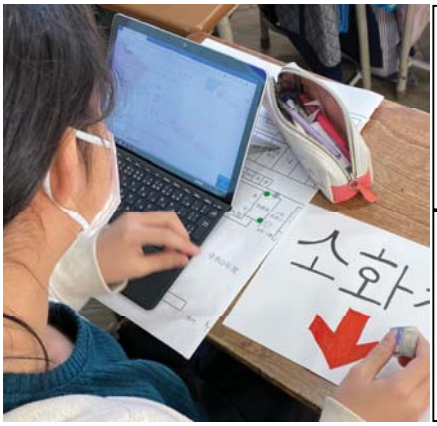
評価規準に基づく本時の評価	・日本語が話せない友達とともに生活するうえで自分たちにできることを考えることができ、日本語を話さない児童にとって優しい学校になるように、主体的に取り組むことができる。 A 日本語が話せない児童とコミュニケーションが取れるように、日本語の表記を含めて作成したり、フリガナをふってその言語が読めない人でも話せる工夫をしたりすることができる。 B 安心安全をテーマに、日本語が話せない友達にとって優しい案内表示をつくることができる。

［総括・まとめ］

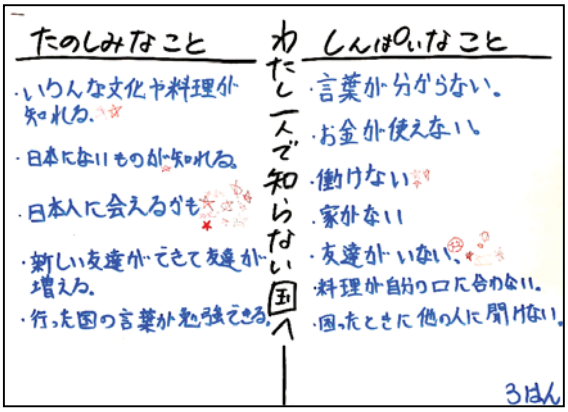
学習方法および外部との連携	・参加型手法を用いたり、教室を出て学習を行ったりすることで、自分たちが主体となって意欲的に考えることができるようにした。 ・研修先で撮影した写真や動画資料、学習会で紹介された外国籍別人口の割合についての資料など、多文化への関心を深めることができた。また、多文化共生の面白さ、多文化共生への課題を、発達段階に合わせて肯定的に出会わせることができた。
学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み	・SDGs推進部会として、参加型手法やSDGsアクション、学習プランなどを紹介してきたことで、全学年でSDGsをテーマに実践を行ってもらうことができた。 ・福祉実践教室や認知症サポーター養成講座など出前授業の講師と連携することで、学校と地域をつなぐ第一歩をとすることができた。
苦労した点	・5年生の総合の主題を人権としているので、多文化共生の学習をしていくためにどこまでの人権感覚を養っていくといいのかを模索し続けた1年間であった。 ・感染対策を講じながら、年間計画の微調整を行いながら実践を行ったので、子どもたちに十分に時間を取ってあげることができない場面が何度もあった。
改善点	・さまざまな人権を取り扱ったため、多文化共生に十分に時間をかけることができなかった。そのため、時間的にゆとりがなくなってしまい、「引き出す」ではなく「教える」になってしまう時間が長くなってしまったり、発散と収束のバランスが崩れてしまったりと、反省の多い実践になってしまった。年間計画とのバランスを考えるだけでなく、それぞれのパートで、十分に子どもたちに時間をとることができるようにすることの大切さを痛感した。
成果が出た点	・1年間、人権感覚を養うことに重点を置いて実践を行ってきたことで、多文化に対する理解はとても深まった。自分の幸せが見つけるという目標から、周りの人や世界中の人の幸せを求めるという価値観に昇華させることができたことが一番の成果であると考えている。 ・「日本語を話せない友達を迎え入れるとしたら」という問いかけが子どもたちにとっては考えやすかったようで、自分事として考えることのできる子どもばかりであった。過去に日本語を話せない友達がいたことにもつながる内容だったため、「もっとたくさんの思い出をつくれた気がする」と話した子どももいた。また、外国籍の子どもは、自分の家族の文化に誇りをもてるようになったようで、友達や担任との話題の中に、家庭料理やお正月の過ごし方を紹介したりするようにまでになった。
学びの軌跡（児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど）	・（あいさつゲームより）みんなと違うあいさつをしなければならなくなって悲しかった。でも、外国から来た友達はこういう気持ちになると思うから、たくさん声をかけてあげたい。 ・（バーンガより）隣の班とルールがちがっていて驚いた。日本と世界のルールは違うということを知って、日本のことをちゃんと伝えてあげたいと思った。 ・（バーンガより）話をしてはいけないというルールなので難しいと思っていたけど、言葉がなくてもとても楽しかった。ジェスチャーで伝えられることはあるから、日本語が話せない友達にもジェスチャーで伝えてあげたい。
授業者による自由記述	・本実践の計画段階では、日本語が話せないことで困っている人たちに対して悲観的にとらえさせたくないという自分の意識に縛られてしまっていた。しかし、子どもたちを信じて、あえて「負」の課題となる部分も子どもに対して提供することにして、その「負」の課題を前向きに解決していく実践に切り替えた。この実践から、想像を超えた成果を得ることができたと思う。本年度はあと1か月しかないものの、この1年間で向き合ってきた、「わたしたちの『幸せ』」を子どもたちがどのように表現するのかが、今から楽しみである。
単元構想・実施における参考資料等	・愛知県庁「愛知県内における外国人住民数の状況」（2020 年 12 月現在） ・株式会社ハートクエイク「異文化コミュニケーションゲーム『バーンガ』」 （本実践では、小学生向けに簡素化したゲームにした） ・文部科学省「かすたねっと」 ・東京都教育委員会「みんなのがっこう」

［学びの軌跡（児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど）］

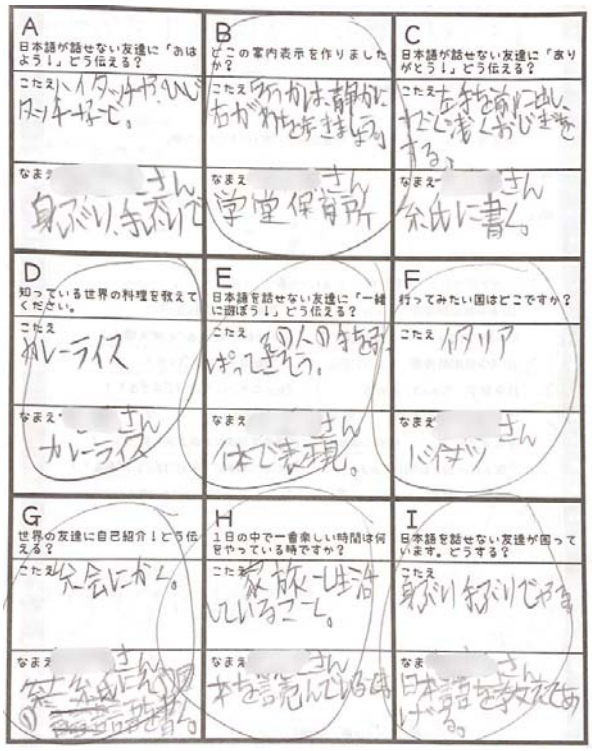
▲ 3時「これ何？これどこ？」 子どもたちの予想と答え合わせのワークシート



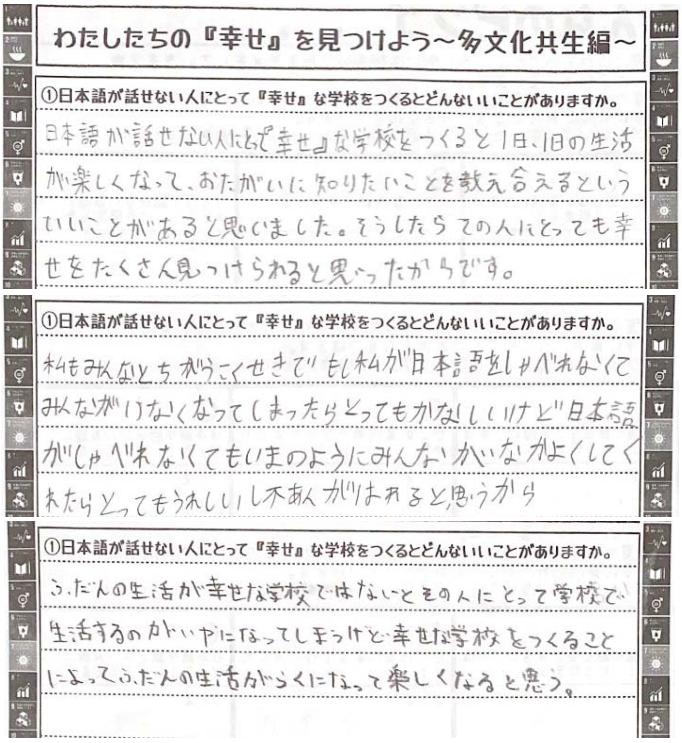
▲ 5・6時「日本語が話せない友達にやさしい学校づくり」案内表示づくり



▲ 2時「わたし一人で知らない国へ」
対比表の成果物



▲7時「安心して過ごせる学校にするために」
迎え入れるための心の整理のため



▲8時　終末の振り返りシートより

ミッション、言葉の壁をこえろ！

学校名	愛知県弥富市立弥生小学校	**授業者氏名**	**沖 久美子**
対象学年（人数）	特別支援学級1、3、4年生（6名）	**実践年月（時数）**	2021年12月（2時間）
担当教科等	全科		
単元名（活動名）	言葉の壁をこえよう		
実践する教科・領域	総合的な学習の時間		
学習領域	**A 多文化社会** … 文化理解（ ）／ 文化交流（ ）／ 多文化共生（○） **B グローバル社会** … 相互依存（ ）／ 情報化（ ） **C 地球的課題** … 人権（ ）／ 環境（ ）／ 平和（ ）／ 開発（ ） **D 未来への選択** … 歴史認識（ ）／ 市民意識（ ）／ 社会参加（ ）		
単元目標	・日本にいろいろな国の人が住んでいることを知る。 ・言葉の壁をこえるための方法を考える。		
単元の評価規準	**知識および技能**	・日本にいろいろな国の人が住んでいることに気付くことができる。	
	思考力、判断力、表現力等	・日本語ができない友だちに「逃げて」と伝える方法を考えることができる。	
	学びに向かう力、人間性等	・いろいろな国にルーツをもつ人々と楽しく暮らすために、どうすればいいか考えることができる。	
単元設定の理由・意義（児童生徒観、指導観、教材観から）	・本学級は特別支援学級であり、1年生1名、3年生2名、4年生3名の6名が在籍している。そのうち、2名が外国にルーツをもつ児童である。2名の保護者は簡単な日本語を話したり、聞いたりすることはできるが、読んだり、書いたりすることは難しい。 ・簡単なゲームやクイズ、アクティビティを通して、日本にいろいろな国の人が住んでいることに気付き、言葉の壁をこえるための方法を考える機会としたい。そして、この授業を通して、日本語ができない人々をどうすればサポートできるのか、いろいろな国にルーツをもつ人々と楽しく暮らすためにはどうすればいいのかを考えることができるようにしたい。		

［単元計画（全2時間）］

時	ねらい	学習活動	資料など
1	日本にいろいろな国の人が住んでいることを知る。	**◆国旗あてゲーム** ・持っている国旗カードについて質問をして、どこの国旗カードを持っているか当てる。 **◆クイズ「どこの国のもの、人でしょう？」** ・料理や食材、お店の写真を見て、どこの国のもの、人かを考える。 **◆ふりかえり** ・授業の感想を述べる。	国旗カード フィールドワークで撮影した写真を使用。
2 本時	言葉の壁をこえるための方法を考える。	**◆国旗あてゲーム** ・前時同様、国旗あてゲームをする。 ・世界地図を見て、どこにその国があるか確認する。 **◆身のまわりにある外国語表記はなぜあるの？** ・ゴミ捨て場の外国語表記の写真などを見て、なぜ外国語で書かれているか考える。 **◆ミッション、「津波が来る！逃げて！」を日本語ができない人に伝えよう！** ・日本語ができない友だちに「津波が来る！逃げて！」を伝えるためにどうすればいいか考える。 ・日本語ができない人にとっても災害の情報は大切だということを知る。 **◆ふりかえり** ・授業の感想を述べる。 ・いろいろな国にルーツをもつ人々と楽しく暮らすために、どうすればいいか考える。	国旗カード 世界地図 フィールドワークで撮影した写真を使用。 ゴミ袋、学校の外国語の配布物

▲ クイズ「どこの国のもの、人でしょう？」で使った写真例

［本時の展開（2時間目）］

ねらい	・言葉の壁をこえるための方法を考える。		
過程・時	**教師の働きかけ・発問および学習活動**	**指導上の留意点（支援）**	**資料**
導入 （10 分）	**◆国旗あてゲーム** ・それぞれの国旗がどこの国のものか確認する。 ・国旗カードを1人1枚持つ。 ・他の人が持っている国旗カードについて質問をして、どこの国旗カードを持っているか当てる。 「黄色はありますか」→「あります」 「星はありますか」→「ありません」 ・世界地図の中から国を見つける。	・カタカナの読み方を確認しながら、国名を確認する。 ・色や形に着目して、質問させる。 ・世界地図のどこにあるかを一緒に確認する。	・国旗カード ・世界地図
展開 （25 分）	**◆身のまわりにある外国語表記はなぜあるの？** ・ゴミ捨て場の外国語表記の写真、ゴミ袋の外国語表記、学校で配られる外国語の配布物などを見て、なぜ外国語で書かれているか考える。 ★「どうして外国語で書かれているのかな。」 ★「外国の人は日本語はできないのかな。」 ⇒日本語を読むことができない。言葉の面で困ることがあることを知る。 **◆ミッション、言葉の壁をこえろ！** **「津波が来る！逃げて！」を日本語ができない人に伝えよう！** ・「津波が来る！逃げて！」を伝えるためにどうすればいいか考える。 ★「あなたの隣に日本語ができない友だちがいます。そんな友だちに『津波が来る！逃げて！』と伝えるためにあなたならどうしますか。」 ・日本語ができない人にとっても災害の情報は大切だということを知る。	・書かれている内容を想像させる。 ・書かれている内容を確認する。また、どの言語で書かれているかも確認する。	フィールドワークで撮影した写真を使用。 ゴミ袋、学校の外国語の配布物
まとめ （10 分）	**◆ふりかえり** ・授業の感想を述べる。 ・いろいろな国にルーツをもつ人々と楽しく暮らすためには、どうすればいいか考える。	・身近な外国にルーツをもつ人を想定して、どうすればよいか考えさせる。	

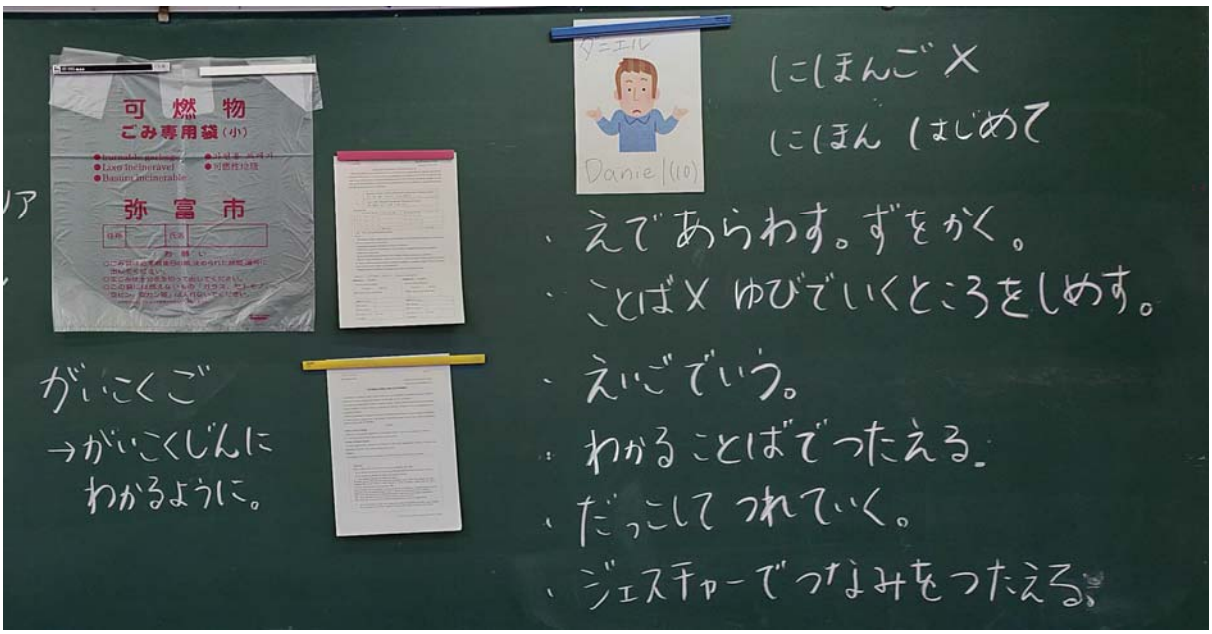
評価規準に基づく本時の評価	・日本語ができない友だちに「逃げて」と伝える方法を考えることができた。指で行き先を示す、ジェスチャーで津波をあらわす、絵や図で伝える、英語で伝える、友だちがわかる言葉で伝えるという意見が出た。 ・日本語ができない友だちに大切な情報を伝える活動を通して、いろいろな国にルーツをもつ人々と楽しく暮らすためにどうすればいいか考えることができた。

［総括・まとめ］

学習方法および外部との連携	・ゲームやクイズ、アクティビティを通して、楽しみながら日本にいろいろな国の人が住んでいることを知り、言葉の壁をこえる方法を考えることができるように工夫した。
学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み	特になし
苦労した点	・特別支援学級の児童を対象としているため、児童にとって理解しやすい内容になるように工夫した。 ・ひらがな、カタカナを読むことが難しい児童もいるため、国旗や地図、写真などを使い視覚的に理解できるようにした。
改善点	・どこの国のものか考えるクイズでは、食べ物の写真を見たときの反応がよかった。食べ物の写真を多く使うとよいと思った。 ・通常学級で実践する場合は、国旗あてゲームを同じ国旗を持っている人を探すゲームにかえたり、「津波が来る！逃げて！」を日本語ができない人に伝える方法をグループで考えたりするとよいと思う。
成果が出た点	・国旗あてゲームやどこの国のものか考えるクイズを通して、外国に興味をもつことができた。 ・写真やゴミ袋、外国語の配布物を通して、身のまわりに外国語で書かれたものがあることを知ることができた。 ・日本語ができない友だちに大切な情報を伝える方法を考え、発表することができた。
学びの軌跡（児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど）	・国旗あてゲームでは、楽しみながら質問をし、国名を読んだり、覚えたりすることができた。また、世界地図で確認することで、どこにその国があるのか知ることができた。 ・クイズ「どこの国のものでしょう？」では、ブラジルやフィリピンにルーツをもつ児童が「この食べ物知ってる！」と喜んでいた。外国にルーツをもつ2人の児童にとっては、自分たちが知っていることを他の児童に教えることができる機会となった。 ・「津波が来る！逃げて！」を日本語ができない人に伝える方法を考えるミッションでは、他の児童の意見を聞いて、新たなアイディアを発表することができた。外国語で伝えるだけでなく、ジェスチャーや絵、図なども活用するとよいと考えることができた。
授業者による自由記述	特別支援学級の児童を対象とした授業だったが、それぞれが知っていることや意見を発表することができた。国旗が好きな児童、ブラジルのことをよく知っている児童、フィリピンに住んでいた児童がそれぞれの知識や経験を生かして発表することができた。特にブラジルにルーツをもつ児童は、ブラジルに関する写真を見るたびにとてもうれしそうにしており、自分のルーツを大切に思っていることが感じ取れた。 今回は特別支援学級での実践となったが、グループワークなどを取り入れたり、書く作業を加えたりすることで、通常学級でも活用できると思う。
単元構想・実施における参考資料等	・世界の国旗（Flameillust） https://frame-illust.com/ ・世界地図（すたペンドリル） https://startoo.co/sutapen/

［学びの軌跡（児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど）］

▲ 1回目の授業では8か国の国旗でゲームを行った。
簡単に答えることができたので、2回目の授業では、4か国増やして行った。



▲日本語ができない友だちに、「津波が来る！逃げて！」を伝える方法を考えた。
他の児童の意見を聞き、アイディアを発表することができた。

「私」と「日本」とのつながり～日本語で表現してみよう～

学校名	学校法人江西国際学園	**授業者氏名**	**加藤　奏太**
対象学年（人数）	小学校2,3,4年生（17名）	**実践年月（時数）**	2021年 10月～1月（9時間）
担当教科等	日本語、国語		
単元名（活動名）	「私」と「日本」のつながりを日本語で表現してみよう		
実践する教科・領域	日本語		
学習領域	**A 多文化社会** … 文化理解（○）／ 文化交流（○）／ 多文化共生（○） **B グローバル社会** … 相互依存（○）／ 情報化（　） **C 地球的課題** … 人　権（○）／ 環　境（　）／ 平　和（　）／ 開　発（　） **D 未来への選択** … 歴史認識（　）／ 市民意識（　）／ 社会参加（　）		
単元目標	・自分のことや、自分の国のことを日本語で表現する。 ・自分のことや、自分の国のことを、日本語で表現したものを発表して交流をする。 ・日本のことを、自分が知っている文化とともに、比べながら学ぶ。		
単元の評価規準	**知識および技能**	・自分の伝えたい表現を、適切な日本語で表すことができたか。	
	思考力、判断力、表現力等	・自らの関わりたい気持ちを生かしつつ、進んで表現をすることができたか。	
	学びに向かう力、人間性等	・自己開示をする中で、その良さと他者理解を進んで行うことができたか。	
単元設定の理由・意義（児童生徒観、指導観、教材観から）	外国から来た児童に対しての日本語指導が教育の場である。本校はインターナショナルスクールという特性上、英語教育や英語での学びが重要視され、日本語教育が幾分ないがしろにされている節があった。また、世界各国の国籍をもつ児童が集まっていながら、彼らがもつ「多文化」という価値を生かせないまま学習カリキュラムが組まれていた。そこで、「各個人のアイデンティティ・ルーツを尊重すること」「表現したいものを母国語、英語、そして日本語での表現につなげること」「それぞれの文化・考えを大切にすること」などをキーコンテンツとして、授業カリキュラムを組み立てていった。 児童は、トルコ人、フランス人、韓国人、アメリカ人、インド人、中国人、ブラジル人、ロシア人、サモア人、スリランカ人、ネパール人とさまざまであり、在日歴や保護者の日本語理解もさまざまなものがある。しかし彼らに共通をしているのは、「自分の国や文化のことを誇りに（好きに）思っている」ということである。まずは、それを調べ整理し、発表できる場を確保することで、「自分の話を聞いてもらえる」場であること、「表現してもいい」という場であることを感じることができた。日本語の授業が主であるので、表現としての日本語を学びながら、もっと表現したい、もっと伝えたいという思いがもてるように指導を行っていった。		

［単元計画（全2時間）］

時	ねらい	学習活動	資料など
1,2,3	自分の国のことを紹介しよう	・自分の国のことでつたえたいことはどんなことかな。 ・「国の場所」「日本からの距離」「国旗」「言葉」「有名な食べ物」「特徴ある文化」「国の問題」について自分の表現したいことについて調べよう。 ・日本語で表現できるように、日本語の練習を行う。 ・日本人クラスメートに対し発表をし、その良さや文化を知ることができた感想交流会を行う。 （10月インターナショナルウィークに先駆けて）	
4	自分の国の言葉で表そう	・言葉に注目して、それぞれの国の言語についての交流会を行う。 「文字で名前を書く」「こんにちは」「ありがとう」「好きなことば」について、発表・文化交流を行う。 （11月インターナショナルウィークに実践）	
5,6,7	日本の国のことを調べよう	・興味ある日本文化について、自分の経験も交えながら調べ学習を行う。 ・自国の文化との対比も行いながら、文化を調べるとともに、日本語の表現を練習する。 ・日本文化発表会を行い、知っていることや新しく知ったことについて考えを深める。 （1月　日本文化デーに実践）	
8,9 本時	私は、こんな人になりたい！ （日本語で表現しよう）	・一年間日本語について学んできたことについて振り返り今後「どんな人になりたいか。」についての学びを行う。 ・「やさしい人」「頑張る人」「思いやりのある人」「人を助ける人」などから、自分の大切にしたい価値観を見つけ、それを表現できるようにする。 （2，3月　エンド　オブ　フェスティバルに実践）	

［本時の展開（2時間目）］

ねらい	私は、こんな人になりたいです！　≪日本語で表現してみよう≫ ○自分たちのように日本に住んでいる外国人の方々の様子を見て、自分はどのようなことを今後頑張っていきたいか考えを深め、それが表現できるような日本語を学習する。

過程・時	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点（支援）	資料
	●日本で頑張っている在住外国人の方たちの活躍を知ろう。 ≪クイズ≫ ・どこの国の人かな ・どこにすんでいる人かな ・その人たちはどんなことを大切にしているのかな	・いろいろな国の人が、この近く（東海圏）に住んでいて、その方たちが地域で活躍していることを知る。	・教師国内研修で知り合った方々のビデオ、彼らから得たアンケート
	●彼らが思っていることは何かな。 ➡もっと日本語を話したいと思っているんだな。 ➡日本の人たちが優しくて住みやすいから、みんな日本に長く住んでいるんだな。 ➡みんな、自分たちのような日本に住む外国人を助けたいと思っているんだな。	・クイズ形式にして、彼らが考えていることがだれでも推測できるようにする。	・事前に訪問者にとっておいたアンケート
	●私たちは、どのようなことを考えて生活をしていけばいいかな。 ➡私たちももっと日本語を勉強して、もっと	・「やさしいひと」「まじめなひと」「ひとをたすけるひと」「はたらきもの」などの選択肢（日本語と英語）を与え、その発音をし、意味を考える。	
	・自分の大切なものをピラミッドランキングにして表現しよう。		・言葉を書いたカード、ピラミッドを貼れる紙
	・自分が大切にしたいものはどんなことかな。表現してみよう。そしてそれは何か考えよう。	・自分の価値観から大切なものを決め、優先順位を決める。また上位３つについて、「どうしてそう思うのか」「それに向けてどんなことをしていきたいか」を考えられるようにする。	ディバイス

評価規準に基づく本時の評価	・積極的に、自分のなりたい人についての表現をしようとしている。（意欲・態度）

［総括・まとめ］

学習方法および外部との連携	・本来は外部施設、他の学校との連携を計画していたが、コロナ対応や個人情報等の観点から断念した。 ・教師国内研修にて、出会った様々な方の動画や考えを生かさせていただいた。
学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み	・インターナショナルスクールという特性を生かして、日本語・英語に捉われず、「母国語」も同じように尊重できるように掲示等を工夫している。少数派でも一人でもその国へのルーツがいる場合に、その国のことを考えられる時間をとって学ぶ時間を作っている。
苦労した点	・日本語能力に差がある点、簡単なことしか表現できない点も多々ある。 ・どうしても、日本語の学習につながらないところがある。 ・英語で調べることはできても、その内容を理解ができないことも多かった。
改善点	・できることなら、在住外国人の方に直接話をしてもらったり、つないだりすることで、同じ立場の彼らに思いを馳せて、自分について考えるきっかけになればいいと思った。 ・「どんな人になりたいか」という問いが難しく、なかなか自分の考えと結びつかない人が多かった。それゆえ選択肢を与えてピラミッドランキングをしてみるという活動にしたが、それでも、なかなか自分の表現に結び付かない児童が多かった。
成果が出た点	・自分の国やルーツについて、進んで話をするようになった。 ・どの文化も大切にしていいんだという価値観を子どもたちがもつことができたこと。 ・自らの興味・関心に応じて進んで学ぶことができたこと。
学びの軌跡（児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど）	・「次ページ写真等参照」
授業者による自由記述	・子どもたちは、さまざまなはじめての活動に対して、積極的に取り組んでくれた。話すことがなかった、話題になることがなかった自分のルーツについて考えられたことで、保護者の方からの感謝も頂くことができた。 ・インターナショナルスクール、日本語教育、多文化共生というかけ合わせの中で、アイデンティティを大切にする価値ある学びのプロセスを考えることができたのではないかと思う。
単元構想・実施における参考資料等	特になし

［学びの軌跡（児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど）］

▲ インターナショナルデーでの言語交流

▲ インターナショナルデー　世界の言葉を学ぼう！

▲ 聞いて！私の国のこと

▲ ぼくの国のこと、発表します！

▲　ピラミッドランキング　作っています。

▲　自分の考えを表現することは楽しいね。

World Smile Project

学校名	愛知県弥富市立弥富北中学校	**授業者氏名**	**久米　達哉**
対象学年（人数）	中学校3年生（80名）	**実践年月（時数）**	2021年 12月～1月（4時間）
担当教科等	英語		

単元名（活動名）	World Smile Project	
実践する教科・領域	英語科、総合的な学習の時間　（教科横断型）	
学習領域	**A 多文化社会** … 文化理解（　）／ 文化交流（　）／ 多文化共生（○） **B グローバル社会** … 相互依存（○）／ 情報化（　） **C 地球的課題** … 人　権（○）／ 環　境（　）／ 平　和（　）／ 開　発（　） **D 未来への選択** … 歴史認識（　）／ 市民意識（　）／ 社会参加（○）	
単元目標	・日本と世界の違いを知り、「日本」と「世界」のよさに気付く。 ・それぞれのよさを合わせた「理想のまち」をデザインし、自分にできることを見つけ行動へつなげる。 ・よりよい社会を創るために自分自身にできることを考え、行動しようとすることができる	
単元の評価規準	**知識および技能**	・日本と世界のつながりを知り、それぞれのよさに気付くことができる
	思考力、判断力、表現力等	・それぞれのよさを合わせた「理想のまち」をデザインし、自分にできることを見つけ行動へつなげることができる
	学びに向かう力、人間性等	・よりよい社会を創るために自分自身にできることを考え、行動しようとすることができる
単元設定の理由・意義（児童生徒観、指導観、教材観から）	・本校の3年生は、1年時より SDGs を中心とした国際理解学習を進めてきた。 1年時は「貧困」「教育」、2年時は「平和」「人権」、3年時は「環境」を中心に学習を進めてきた。そのため、生徒にとって身の回りにある諸問題や SDGs についての知識は身に付いている。 ・3年間学習してきた SDGs をもとに、先行事例や実際の活動している人の考えを知ることで、理想の姿をイメージし、創り上げられるようにしていきたい。 ・本単元は多文化共生を軸に学んだ後、3年間の集大成として「すべての人々が暮らしやすくできるために」をめあてに、理想の「まち」の提案を行った。	

［単元計画（全4時間）］

時	ねらい	学習活動	資料など
1 本時	・人それぞれ多様な意見があることを知る。 ・「日本」と「世界」のよさについて知る	○アイスブレイク「4つのコーナー」（10分） ○世界を知ろうクイズ（15分） ・ 写真をどの国に関連することなのかを考え【マッチング】 ・ 写真に関連するストーリーシートを読みとる【フォトランゲージ】 ・ 写真の説明を1人ずつ行う ○ 日本と世界のよさに気付こう（20分） ・ 外国籍の方に行ったインタビューをもとに、「日本のよさ」「母国のよさ」をまとめる。【ブレスト】 ・「これ気付かなかった！」と思う箇所に付箋を貼る ○まとめ（5分）	写真、国旗カード ストーリーシート インタビュー動画
2	・外国籍の方の困りごとに気付く ・課題を知り、解決策を考える	○ 世界の人々が日本で生活するうえで困っていることを知ろう（15分） ・ ロールプレイをもとに、外国籍の方の困りごとについて考える ・ 困りごとの中にある、課題に気付く ○ 課題を解決するために必要となるコト・モノを考える（30分） ・ 課題解決のために必要なモノ・コトを付箋に書き出す【ブレスト】 ・ 出てきたものを分類分けし、グループに名前を付ける【KJ法】 ・ 自分たちの考えたものの中で絶対に外せないポイントをまとめる ○まとめ（5分）	・相談事例
3	・理想のまちを描く	○理想の「まち」を創る（50分）【イメージ図】 ・ 理想のまちを描く ・ プレゼンテーションの準備を行う ・ プレゼンレーションの練習を行う	
4	・理想のまちをプレゼンする ・行動宣言を行う	○ プレゼンテーションを行う（20分） ○ グループで達成のために必要なコト・モノを考える（20分）【対比表】 ○ 個人で行動宣言を行う（10分）	

［本時の展開（1時間目）］

ねらい	・ 人それぞれ多様な意見があることを知ることができる。 ・「日本」と「世界」のよさについて知ることができる。

過程・時	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点（支援）	資料
10分	1 アイスブレイク（4つのコーナー）を行う 「今から行う質問に対し、自分に当てはまる場所に移動をしてください」 ① 動物を飼うなら（犬、猫、ハムスター、カブトムシ） ② 休日に出かけるなら （買物、遊園地、水族館、動物園） ③ ケーキを食べるなら （チョコレート、ショートケーキ、モンブラン、抹茶） ④ 料理を食べるなら （和食、中華、イタリアン、ファストフード） ⑤ 海外旅行に行くなら （ハワイ、ヨーロッパ、アジア、アフリカ）	・答えがそれぞれで異なることに気付かせ、多様性があることに気付かせる。 ・肯定的な雰囲気づくりを行う。	
15分	2 「世界を知ろうクイズ」 を行う （1） 写真カードがどの国に関連することなのかを考える。 【マッチング】 （2） 写真に関連するストーリーシートを読みとる。 【フォトランゲージ】 （3） 写真の説明を1人ずつ行う。	・ グループで行わせる。 ・ 複数の国が関連していることもあることを伝える。 ・ 自分が伝えたいと思う箇所に線を引かせる。 ・ 1人30秒で紹介させる。	・ 写真カード ・ 国旗カード ・ ストーリーカード
20分	3 日本と世界のよさに気付こう（20分） （1） 外国籍の方に行ったインタビューをもとに、「日本のよさ」「母国のよさ」をまとめる。 【ブレスト】 （2）「これ気付かなかった！」と思う箇所に付箋を貼る。	・ 質より量で書くことを伝える。 ・ シートを回し読みする。	・ インタビュー動画
5分	4 まとめを行う 1人ずつ30秒程度でコメントを行う。		

評価規準に基づく本時の評価	・ 人それぞれ多様な意見があることを知ることができたか。 ・「日本」と「世界」のよさについて知ることができたか。

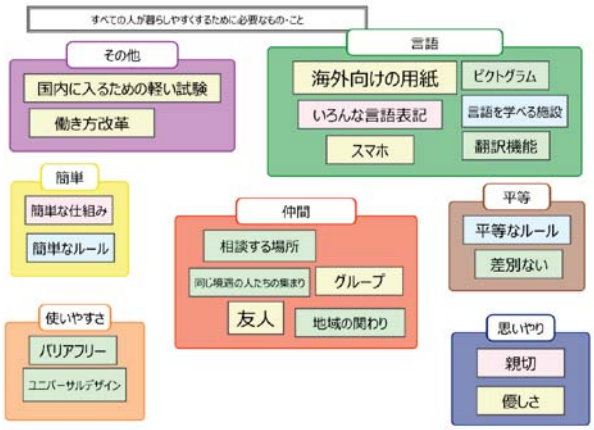
［総括・まとめ］

学習方法および外部との連携	・これまでの SDGs を中心とした学習のまとめとして行った。 ・主体的に学べるように、アクティブラーニングを中心に活動を行った。 ・外部との連携は行うことができなかった。
学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み	・行うことができなかった。
苦労した点	・本単元は英語科で取り扱う場面もあった。教科横断型学習で進めるために、教科の目標にも当てはまるように計画することが大変であった。 ・地域の感染レベルが実践途中に引き上げられたことにより、グループワークをタブレット端末による話し合い活動を行う必要性が出るなど、計画を大幅に変更せざるを得なかったこと。
改善点	・実施時間が限られていたため、十分に写真や動画の活用ができなかった。より現状を知るためには、もう少し活用すべきであった。 ・もう少し話し合い活動を取り入れ、多様な意見を取り入れながら進めるべきであった。
成果が出た点	・SDGs を軸とした活動を3年間通して行ってきて、これまでの学習内容を生かしながら、集大成として行うことができた。 ・短期、中期、長期の目標を立てることで、生徒は自分の将来をイメージしながら目標を設定することができた。
学びの軌跡（児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど）	・「自分も来年から高校生になる。今知らないことをもっと知る。いろいろなことに興味をもちたい」 ・「思いやりの気持ちをもって、心の壁をなくしていきたい」 ・「他人任せにするのではなく、自ら行動をしていきたい」
授業者による自由記述	・国内にも様々な形で海外とのつながりがある。しかし、研修の中で出会った方の中に、交流を妨げるものとして「言葉の壁・制度の壁・心の壁」があるということを聞いて、衝撃を受けた。我々の周りにも多くの外国籍の方がいる。これらの壁を取り払うことが、多文化共生のためには必要であると感じた。 ・よりよい社会をこれから築いていくために、我々は子どもたちにこれらのメッセージを伝え、よりよい未来にするために種をまいていくことが大切であると感じた。
単元構想・実施における参考資料等	・令和3年度教師国内研修で訪問した場所の写真やインタビュー動画

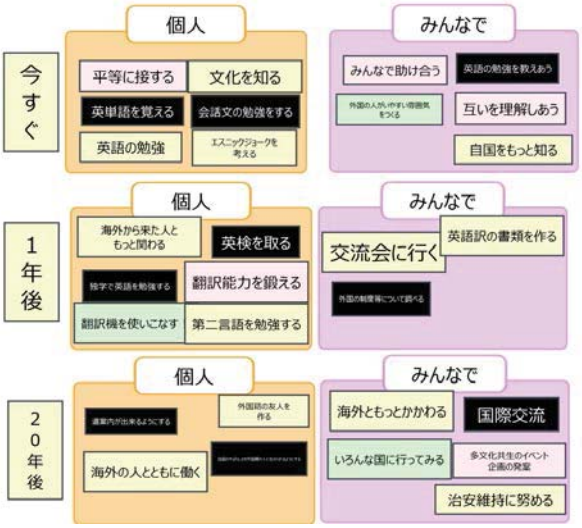
［学びの軌跡（児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど）］

▲ ピクチャーカードがどの国と関連しているか考える様子

▲ ストーリーカードの内容を説明する様子



▲ 生徒成果物（多文化共生を達成するために必要なモノ）



▲ 生徒成果物（多文化共生を達成するための行動宣言）

Live Together

学校名	一宮市立大和西小学校	授業者氏名	柴田 英子
対象学年（人数）	小学校5年生（78名）	実践年月（時数）	2021年 11月～1月（6時間）
担当教科等	英語		

単元名（活動名）	現代的な諸課題（共生）	
実践する教科・領域	総合的な学習の時間	
学習領域	A 多文化社会 … 文化理解（○）／ 文化交流（ ）／ 多文化共生（○） B グローバル社会 … 相互依存（ ）／ 情報化（ ） C 地球的課題 … 人権（ ）／ 環境（ ）／ 平和（ ）／ 開発（ ） D 未来への選択 … 歴史認識（ ）／ 市民意識（○）／ 社会参加（ ）	
単元目標	・日本の中にある世界との繋がりを知り、多様性、国際化に気づく。 ・共生していくのに今の課題と必要なことを考える。 ・みんなが過ごしやすいクラス（社会）を考え、クラス（社会）のためにできることを考え実行する。	
単元の評価規準	知識および技能	・「日本？世界？どっちだクイズ」を通して、日本と世界の繋がりを知り、日本で国際化が進んでいることに気づくことができたか。
	思考力、判断力、表現力等	・少数派になったときの気持ちを考えることで、誰一人取り残さない理想のクラスを思い描き、クラスのために自分ができることは何かを考えることができたか。
	学びに向かう力、人間性等	・多様性を受け入れ人々が日本で幸せに暮らすためには、何ができるかを意欲的に考え、実践しようとする姿が見られたか。
単元設定の理由・意義（児童生徒観、指導観、教材観から）	・「SDGs について知っている」、「SDGs を達成するために自分が何をすればよいか分かる」という調査では、7割を超える児童が「知っている」、「分かる」と答えており、予想以上の反応であった。4年生の総合的な学習の時間で、電気、水、紙資源の課題について学び、Goal15「陸の豊かさを守ろう」に関わるリサイクル活動をしてきた経験があるからだと考えられる。 　そして、SDGs の基本理念でもある「誰一人取り残さない」ことに関する質問もした。「誰もが過ごしやすいクラスにするために何をすればよいか分かりますか、実際に行っていることはありますか」という具体的な問いに対しては、「分かる」、「行っている」と答えた児童は6割弱であり、低かった。本校の5年生は、総合的な学習の時間で「福祉」について学ぶ。SDGs の Goal3「すべての人に健康と福祉を」にあたる分野である。高齢者や障がい者の方など様々な人々がどのような悩みや考えを持って生活しているのかを学んでいる。今年度は、多文化共生の視点も加えることで、「誰もが過ごしやすいクラスの実現」を目指したい。	

［単元計画（全6時間）］

時	ねらい	学習活動	資料など
1	・日本の中にある世界との繋がりを知り、多様性、国際化が進んでいることに気づく。	◇日本！？世界！？どっちだクイズ ・世界（パラグアイなど）の日系社会の写真と愛知、三重、静岡など研修で撮ったお店の写真を見て、日本か世界の写真かを考える。 【写真】 右の写真のみパラグアイ 	・日本の中にある多文化を感じられる写真と外国にある日本文化を感じられる写真
2 本時	・ロールプレイを通して、その課題の原因を考え、今の課題（人の心にある偏見）に気づく。	◇自分の中にある偏見発見！！【本時】 ・親の気持ち、この気持ちを考える。 【ロールプレイ】 子：お母さん、学校来ないで 母：何でそんなこと言うの？ 子：だって金髪だし、日本語じゃないし。目立つ・・・・・。 母：そう言われても日本語分からないし、見た目は変えられない・・・。 ・感じたことをワークシートに記入し共有 ◇女の子が「お母さん、来ないで」となってしまった原因はどこに？【ブレスト】	・ロールプレイの紙
3	・課題をそのままにしてしまうとどうなるか、その危険性について考える。	◇女の子の今の状態が続いたらどうなる？	・お母さんや子どもの背景の解説
4	・女の子の悩みの解決策を考えることで多様性を受け入れることの大切さに気づく。	◇解決策を考えよう！ ・女の子の現状を解決するために何ができるかをできるだけ多く書き出す。【ブレスト】	
5	・自分の疑問に思ったことをインタビューすることで、共生していくためのヒントを得る。	◇パラグアイに住む日本人の方にインタビューをする。【zoom】 実際にパラグアイに暮らす日本人の気持ちを知ることで、少数派の気持ちをより身近なものとして感じさせる。	
6	・みんなが過ごしやすいクラスを考え、そのために自分ができることを決め、実行する。	◇理想のクラスってなぁに？ ・何ができていると理想のクラスかを共有する。【ブレスト】 ・自分がクラスのためにできることをカードに書き、実行する。 ・一か月後の自分に向けて手紙を書く。	

［本時の展開（2時間目）］

ねらい	・ロールプレイを通して、その課題の原因を考えよう。

過程・時	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点（支援）	資料
5分	1．写真クイズの振り返り ◇日本か世界（パラグアイ）のどちらで撮られた写真か振り分けたものを掲示する	＊クイズを通して、外国人の現状も伝えていく。	・前時の活動で児童が写真クイズで取り組んだもの
15分	2．自分の中にある偏見発見！ **めあて：外国籍の子どもの悩みを知り、その原因を考えよう。** ◇母役と子ども役に分かれて、セリフを読む。 【ロールプレイ】 （1）母と子ども役に分かれる。 （2）セリフの裏面に書かれた情報を読み、感想を書いて共有する。 母役：子どもにどうしようもないことを言われて腹が立った。 子ども役：自分も人と違うことを気にしてしまうかも。	＊ロールプレイを通して、外国籍の児童の悩みを知ると同時に、生まれつき髪の毛の色が金髪の色の人もいることや、母の方が日本語に親しむ機会が無く言葉の壁があることを学ばせる。	・ロールプレイのセリフ ・ロールプレイに出てくる母と子どもの状況の追加説明（欄外資料参照）
15分	3．「来ないで」となってしまった原因はどこに？ ◇ジャムボードを使って意見をたくさん出す。【ブレンストーミング】 ◇意見を共有する。 ・「母が金髪」「母が日本語を喋れない」という意見が出てきている場合は、「母が金髪という原因があるから、髪の色を染めてもらうという解決策にする？」ということでいいか児童に問いかける。 ◇意見を分類し、主な原因2つに決める。	・付箋の色を5色から1色選ばせ（水色以外）付箋の最後に名前を1つ目の意見だけ書かせることで、だれがどの意見でどのくらい出せたか確認できるようにする。 ・髪の色を人に言われたら、母の気持ちはどうなるかを考えさせることで、人を見た目で決めつけないことの大切さや、相手を受け入れることはどういうことか気づかせたい。	
10分	4．それぞれ選んだのを発表し、意見を交流する。 最後にワークシートに記入する。		

評価規準に基づく本時の評価	・「人と違うと何か言われる」、「みんなに笑われる」など「周りの目」が要因だという話し合いの結果になった。また、「金髪がいけない」という意見も出たので、髪を染めればいいのかなと問いかけると、それは違うという話し合いになり、互いに考えを深めあう様子も見られた。

みんなと同じ小学生のある女の子の実際のお話です。この女の子は、外国から日本へ来ました。小学校で生活をしていく中で、日本語はかなり話せるようになりました。この小学校にももうすぐ授業参観があるようです。その授業参観について女の子がお母さんに話しています。

女の子　：お母さん、学校来ないで。
お母さん：何でそんなこと言うの？
女の子　：だって、金髪だし日本語じゃないし。目立つ・・・。
お母さん：そう言われても日本語分からないし、見た目は変えられない。
女の子　：（自分で考えて言ってみよう。）
お母さん：（自分で考えて言ってみよう。）

子どもが日本語を話すことができて、お母さんはなぜ、日本語がしゃべれないのでしょうか？そう思った人もいるかもしれませんね。お母さんは、働いていてもある特定の日本語しか使う機会がなかったり、もしくはほとんど日本語を使わなくてもよい環境で生活していたりします。

その一方で子どもは、小学校で生活しているので、様々な日本語にふれる機会がたくさんあります。また、日本語をたくさん日常生活で使うので、お母さんの国の言語を忘れてしまうこともあります。みんなもいきなり英語を覚えなさいと言われても、難しいですよね。

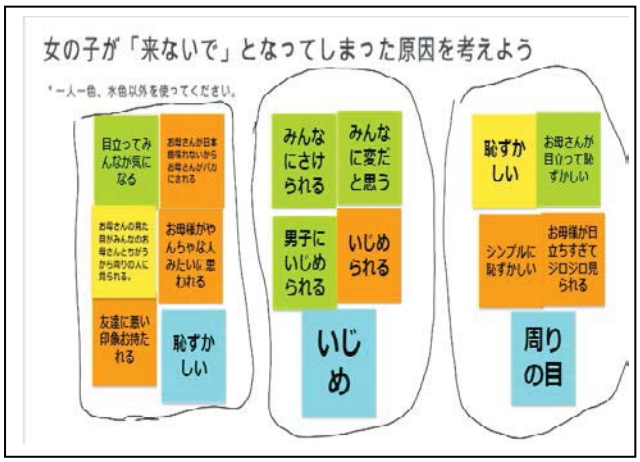
［総括・まとめ］

学習方法および外部との連携	・2019年度教師海外研修での訪問先、Palo Santo 製品工房の立川さんに zoom でインタビューを行い、パラグアイでどのような生活を送っているのか、働いていて困ったことはあるか、児童の質問に答えてもらった。立川さん自身このような活動を進めていきたいと好意的であるので、来年度も何かしらの形で実現させたい。
学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み	・総合の学習の時間に学年で同じ内容を実践した。 ・一宮市国際理解教育部に実践報告書を提出した。 ・実践した授業を研究授業として行うことにより、指導案を全職員に配布し、他学年の先生など他の先生方にも見てもらい、助言を頂いた。
苦労した点	・今回の実践のメインでもあるロールプレイを教師国内研修から聞いた話をもとにして自分で作った。初めての試みだったので、心配なことも多かった。実際に、あるクラスで行ってみたところ、情報が足りず、児童からの質問が出て、口頭で解説を行った。ロールプレイを行うに際は、相手の学習状況を踏まえたうえで行うことが大切だと学んだ。
改善点	・今回のプログラムを実践してみて、予想以上に意見交換をするときに時間がかかってしまった。本時で記載した実践も、時間が十分に足りず急いで進めてしまったところがあった。児童の考えを全体の場で問いかけたとき、意見が最初は出にくいことを理解して時間を確保する必要がある。 ・日本！？世界！？どっちだクイズを行った時に、解説を入れようとすると、時間が足りなかった。写真を10枚使ったが、児童が話し合いながら日本か世界かを考える時間を考慮すると6枚でも十分多かったと思う。今回の研修で撮った母語を子どもたちに継承する活動を行っている団体の説明は、様々な背景を持った子どもたちが日本に暮らしていることを伝える良い機会なので、しっかりと時間を確保しておきたかった。
成果が出た点	・ほとんどの実践が終わった2学期にまとめとして、未来の自分に向けた手紙を書かせた。これを3学期に渡し、掲示することで当時の自分の気持ちを思い出させモチベーションを上げるとともに、6年生になる時までの目標にさせることもできた。
学びの軌跡（児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど）	・未来の自分に向けた手紙では、「友達を笑顔にできていますか。人にやさしくできていますか。」など、相手を思いやることができているか確認する言葉が多く書かれていた。 ・「思いやりがやっぱり大切」、「様々な文化があるけど、いじめや差別無しで協力して生きること」が大切などといった感想があった。
授業者による自由記述	・コロナ禍で対面になる話し合い活動が制限される中でもできる児童主体の参加型の実践はできないかを意識して、今回の実践を行った。クロムブックのジャムボードを使うことで、互いの意見を交流させた。メリットとしては、誰がどんな意見を出したか把握がしやすい。また、前時の振り返りをするときに、すぐに児童に表示することができる。児童自身が振り返るときにも、自分の関心のある意見やクラス全体の班の意見をみながらまとめを書くことができる。デメリットとしては、タイピングが苦手な児童は、言葉を入力するのに時間がかかってしまうことだ。また、模造紙を用いて行う時よりも共同で行う意識が、低くなっているように感じた。
単元構想・実施における参考資料等	・JICA 中部教師海外研修報告書

［学びの軌跡（児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど）］

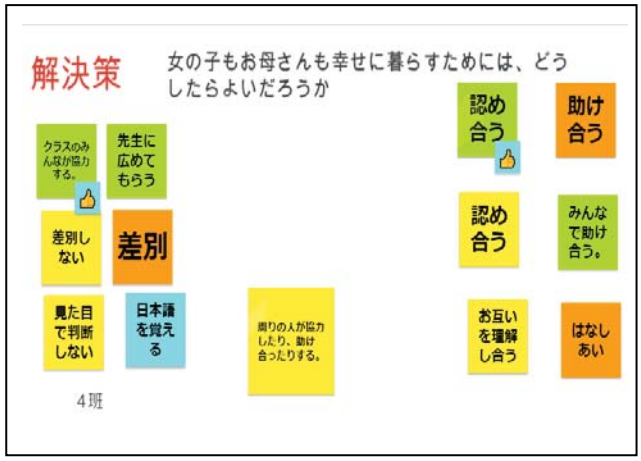
▲ 日本！？世界！？どっちだクイズの児童の予想

▲ 第3時　来ないでとなってしまった原因を考えよう

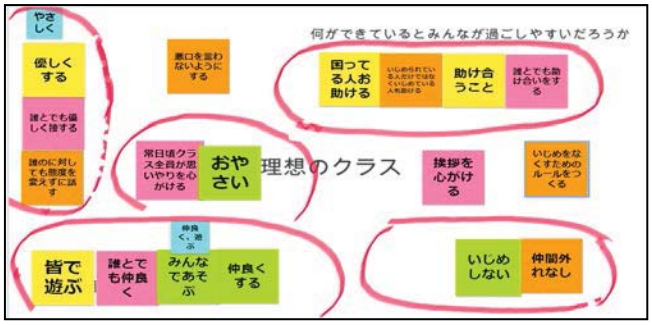


▲ 第3時　来ないでとなってしまった原因を考えよう
児童の意見

▲ パラグアイで働いている立川さんにインタビュー



▲ 第4時　解決策を考えよう！　児童の意見



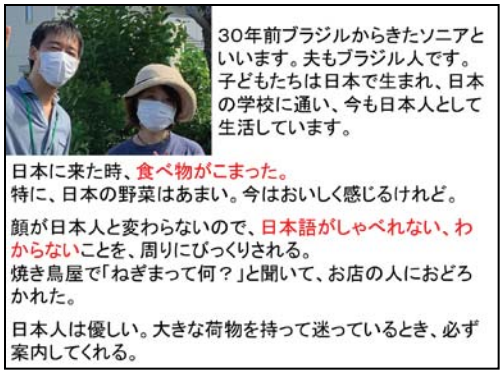
▲ 第6時　みんなが過ごしやすいクラス　児童の意見②

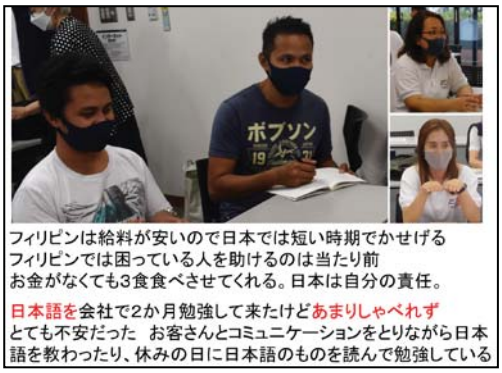
▲ 第6時　みんなが過ごしやすいクラス　児童の意見①

みんなで創る Happy Town～持続可能な多文化共生のまち～

学校名	愛知県東郷町立高嶺小学校	**授業者氏名**	**野々山　尚志**
対象学年（人数）	小学校6年生（79名）	**実践年月（時数）**	2022年1月～2月（6時間）
担当教科等	理科		
単元名（活動名）	地球に生きる（理科）・わたしたちがつくる未来の東郷町（総合的な学習の時間）		
実践する教科・領域	理科・総合的な学習の時間		
学習領域	**A 多文化社会** … 文化理解（　）／ 文化交流（　）／ 多文化共生（◯） **B グローバル社会** … 相互依存（　）／ 情報化（　） **C 地球的課題** … 人　権（　）／ 環　境（◯）／ 平　和（　）／ 開　発（　） **D 未来への選択** … 歴史認識（　）／ 市民意識（　）／ 社会参加（◯）		
単元目標	・日本と外国とのつながりを知り、課題に気付くことを通して、多文化共生の意識を育む。 ・SDGs 取組事例から課題解決のヒントを学び、持続可能な社会への参画意識を育む。 ・誰もが幸せに暮らせる私たちのまちを創るために、自分にできることを実行する力を育む。		
単元の評価規準	**知識および技能**	・多文化共生や人と環境との関わりについて資料などで調べ、得られた結果を適切に記録している。	
	思考力、判断力、表現力等	・多文化共生や人と環境との関わりについて課題を見出し、課題の解決方法を発想し、表現するなどして、問題解決している。	
	学びに向かう力、人間性等	・多文化共生や人と環境との関わりについて、他者と関わりながら課題を解決しようとし、学んだことを自分の生活に生かそうとしている。	
単元設定の理由・意義（児童生徒観、指導観、教材観から）	・本校は外国籍の児童が多く、対象学年にも外国籍の児童が在籍するなど、多文化に日常的に接する機会がある。しかし、これまで外国籍の児童にとっては日本の学校で生活する上で困難さを味わうことが多かった。自分たちの経験を振り返ると共に、日本で暮らす外国籍の人の経験談や、課題解決に取り組む方からヒントを得て、誰もが困難さを抱えることのない社会にしていくために自分たちにできることを考える機会を設定した。 ・SDGs について理科・社会科・総合的な学習の時間で学習してきたことを元に、持続可能な未来のまちを描く機会を設定し、自分にできることを考える機会を設定した。		

第2時　日本で暮らすブラジル人・フィリピン人のインタビュースライド例▶





［単元計画（全6時間）］

時	ねらい	学習活動	資料など
0	・SDGs について知り、普段の生活から環境や人権等に対して意識的な行動がとれるようになる。	「SDGs について知る」 ・年度当初にSDGs17の目標について調べる学習を行い、年間通して総合的な学習の時間・社会科・特別活動で SDGs に関わる学習や活動を行った。 ・特に、理科の学習の際には、SDGs との関連を意識できるよう学習した。	・SDGs スタートブック 2021 年度版 https://sdgs.edutown.jp/
1 （総合）	・人それぞれの見方の違いと同一性に気付くとともに、日本と外国の違いと同一性に気付く。 ・自身の固定観念に気付く。 ・日本と外国のつながりを知り、外国を身近にとらえる。	◯各自で日本（愛知県知立市・刈谷市、三重県津市）とパラグアイ（4枚）の写真に何が映っているかを見る。 ◯グループで、7枚の写真を見て気付いたことを話し合う。 ◯グループで相談し、7枚の写真を日本と外国のものに分ける。 ◯7名の児童がそれぞれの写真の解説書を読み、多くの日本人（日系人）が外国に住んでいること、外国人の多くが日本に住んでいることを知る。 ◯ゴマを通した日本とパラグアイのつながりについて知る。	・2021 教師国内研修、2017 教師海外研修で撮影した写真 ・写真解説書 ・スライド
2 （総合） 本時	・外国人が日本で暮らす上での課題に気付く。 ・課題解決のために大切なことを考え、より妥当な考えを導き出す。	◯外国人が日本で暮らす時にどんなことが困るかをグループで考え、箇条書きでたくさん書き出す。 ◯各グループが書いた成果物を見て回る。 ◯日本で暮らすブラジル人・フィリピン人のインタビューのスライドと、インドネシアに帰国した同級生のインタビュー動画を見る。 ◯外国人が日本で暮らす際、安心できる・助かるためにできることをグループで書き出す。	・日本で暮らすブラジル人・フィリピン人のインタビューのスライド ・インドネシアに帰国した同級生のインタビュー動画
3・4 （理科）	・課題解決の方法を知り、「持続可能なまちのアイデア」を学び合うことを通して、より妥当な考えをつくり出す。	◯多文化共生に関わる現場で活動する人たちの取組や、SDGs に取り組む企業の事例資料をグループで分担して読む。 ◯自分が読んだ資料から気になったこと、考えたことをグループで伝え合う。 ◯各自で「持続可能なまちのアイデア」を考えて、「アイデアシート」に言葉やイラストをかく。 ◯各自の「アイデアシート」をグループで読み合い、疑問点を質問したり、改善点をアドバイスし合う。 ◯ギャラリー方式で、「アイデアシート」を共有する。	・2021 教師国内研修「ハッレ倭」の資料 ・SDGs スタートブック 2021 年度版 ・SDGs Edu Town https://sdgs.edutown.jp/ 内 SDGs 取組事例の動画・資料
5・6 （理科）	・既習の内容を生かして、持続可能な開発目標を達成するために自分にできることを考え、実行しようとする。	◯外国人も高齢者も障がいのある人も、「みんなが幸せに暮らせる持続可能な東郷町」を描く上で、取り入れたいアイデアをグループで話し合う。 ◯グループで模造紙にまちを描く。 ◯各グループの模造紙に描いたものをプレゼンする。 ◯一人5枚のシールで重み付け投票をする。 ◯学習をふり返り、自分にできることを考え、行動宣言をする。	

［本時の展開（2時間目）］

ねらい	・外国人が日本で暮らす上での課題に気付くとともに、課題解決のために大切なことを考え、より妥当な考えを導き出す。

過程・時	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点（支援）	資料
導入 3分	1　前時の復習クイズ ◯前時で学習した日本とパラグアイの写真からクイズを出し、日本と外国に様々なつながりがあることを振り返る。【クイズ】	・外国を身近にとらえた上で本時の学習に取り組めるようにする。	
展開 15分	2　外国人が日本で暮らす時にどんなことに困るかを考える ◯「外国人の人が日本に来て暮らす時、どんなことが困るでしょうか」 ・グループで意見を出し合い、画用紙に箇条書きでたくさん書き出す。【ブレーンストーミング】 ◯各グループが書いた成果物を見て回る【ギャラリー方式】	・考えが浮かばない児童には、自分がもし外国に行った場合を想定して考えさせる。 ・できるだけ、様々な意見を書き出せるように簡潔に箇条書きで書くように示す。	
20分	3　実際に外国人が日本で暮らす時にどんなことに困り、どんなことに助けられたかを知り、課題に気付く ◯日本で暮らすブラジル人・フィリピン人のインタビューのスライドと、インドネシアに帰国した同級生のインタビュー動画を見る。 ・自分たちが想像していなかった課題に気付く。 ・自分たちが意識せずに外国人の友達に安心感を与えていたことに気付く。 ◯「外国人が日本で暮らす時に、安心できる・助かるために自分達にできること、あった方がよいしくみについて話し合って、出た意見を書きましょう」 ・グループで意見を出し合い、画用紙に箇条書きでたくさん書き出す。【ブレーンストーミング】 ◯自分たちができることに印をつける。	・大型テレビに映し出す。 ・できるだけ、様々な意見を書き出せるように簡潔に箇条書きで書くように示す。 ・色ペンで印をつける。	・2021 教師国内研修で取材した日本で暮らすブラジル人・フィリピン人のインタビュースライド ・インドネシアに帰国した同級生のインタビュー動画
まとめ 6分	4　多文化共生のまちをつくるヒントを得る ◯他のグループの成果物を回し読みする。 ◯振り返り学習シートに本時の学習で得たことを書く。	・できるだけ多くの考えに触れて自分の引き出しを増やすように伝える。	
1分	5　次時の学習の予告を聞く ◯多文化共生に関わる現場で活動する人の取組や、SDGsに取り組む企業の事例を知ること、総合的な学習の時間で学習したことを生かし、「みんなが幸せに暮らせる持続可能な私たちのまち」について考えていくことを知る。		・2021 教師国内研修「ハッレ倭」資料 ・SDGs スタートブック 2021 年度版 SDGs 取組事例

評価規準に基づく本時の評価	・本時の学習を経て、自分が考えもしなかった課題を見出すことができた。実際に教師自身が取材をしてきた方の声をスライドで紹介することに留まらず、半年前まで同じ教室で学んでいた帰国した友達からの言葉は現実味があり、日本に来たばかりの頃に自然にその子のためになっていた行動に気付いた児童もいた。自分にもできること、誰かと協力してできること等、新たな気付きを得た児童が多かった。 ・本時は個別に記述した成果物がないため、事後にアンケートを行った。他者と関わり参加型学習をしたことで、自分の考えが深まったり、知識が増えた児童は次のようだった。強くそう思う38.7%、そう思う45.3%、そう思わない9.3%、まったくそう思わない6.7%。8割以上の児童にとっては学びが深まった。そう思わないと回答した児童で、普段自分の考えを伝えることを苦手としている児童が、楽しく学習している様子が見られたことはよかった。

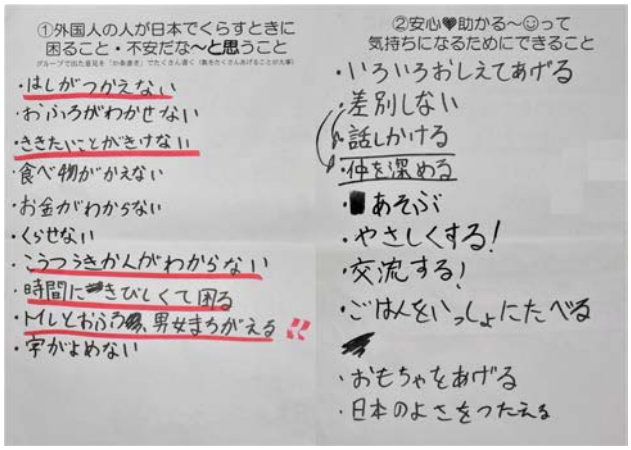
［総括・まとめ］

学習方法および外部との連携	・教師からの伝達や一人で調べる時間が参加型学習につながるような展開を工夫した。 ・参加型学習の手法を取り入れたことで、児童自身が限られた時間で多くの知識を得たり、考えを共有することに慣れ、学習の成果を実感していた。 ・教師国内研修で得た教材を用いてフォトランゲージやインタビュー動画の視聴を行った。より課題について身近なものと捉えて学習を進めることができた。
学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み	・学校内では、①理科の授業を公開したり、成果物を紹介したり、②教職員対象の現職教育を夏季休業の時期に行ったりして、教職員に広げてきた。 ・学校外では、地区の教育研究会理科部会で、授業実践を紹介するとともに、実際に参加した様々な小中学校の教員に模擬授業を体験してもらった。また、来年度の愛知県理科教育研究発表会でも報告する予定である。
苦労した点	・教師国内研修のテーマが多文化共生であったため、教材化したものが写真やインタビューの内容に留まってしまった。 ・学級担任が指導している総合的な学習の時間と関連させて実践したため、実践の期日が1月以降となってしまい、時間の制約のある中での実践となってしまった。
改善点	・5・6時間目の「みんなが幸せに暮らせる持続可能なまちを描く」の前に、どんなアイデアを採用したいか、どんなまちにしたいかと発問したため、前時までの学習をしっかりと組み入れられなかったグループも出てしまった。多文化共生や持続可能なまちにするために大切なことをキーワード化し、各グループで優先順位をつけてから描くと、もっと多文化共生や持続可能か社会を意識した学習となっていただろう。
成果が出た点	・事後のアンケートで参加型の学習は、楽しいと感じている児童が80.0%、自分が社会の一員として活躍しようという意識が高まった児童が70.7%いた。本実践で用いた教材や楽しく学ぶ参加型手法を取り入れたプログラムにより、多くの児童が社会参画意識を育むことができたと考えられる。また、実践前には53.3%の児童が SDGs を意識した行動をしていたが、事後には78.7%に増加した。授業で「行動宣言」をしただけに留まることなく、普段の生活の行動が変化したことは大きな成果であった。
学びの軌跡（児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど）	・未来の東郷町を作るのはとても楽しかったです。SDGs の項目を選んで東郷町を作れました。 ・みんなで協力して理科に取り組めました。コロナの感染者が増えてこれから実験が出来なくなっても、僕たちにできることをして、理科を学びたいと思います。 ・理科で SDGs について学んだことを生かし、児童会で「SDGs 週間」の企画を立てました。全校でエコや人権を意識した活動に取り組むことが出来ました。
授業者による自由記述	2017 年度に教師海外研修に参加し、6年生学年全体で総合的な学習の時間30時間で国際理解教育に取り組んだことは大きな成果があった。翌年2年生では、生活科や特別活動で単発で実践したことも意義あるものだった。今年度、学級担任がない立場で理科を中心に実践したいと考えた。本校は外国籍児童が多く、当初は多文化共生の意識を高めたいと思い教師国内研修に参加した。研修での学びをいざ教材化して授業を組み立てようとした時、研修を生かすこと自体が目的になってしまいそうだったため、考え方を見直した。 6年生の総合的な学習の時間で「わたしたちがつくる未来の東郷町」というテーマで、自分たちの町について調べたり、役場の人と会議を開いたり、町の特色であるボート体験をしたりして学習を進めていた。その学習の集大成として、「みんなが幸せに暮らせる持続可能なまちを描く」学習を設定し、それに向けて理科では再生可能エネルギーや生物循環等、持続可能なまちづくりにつながる学習を SDGs と関連付けて実践した。さらに、学級担任から時間をいただき総合的な学習の時間で多文化共生に関わる学習をし、教科横断的な実践となった。 国際理解教育は、日本人児童生徒向けの教育ではない。どんな国籍、文化、宗教、性の児童生徒にも共通する課題や、身に付けさせたい力を意識して授業を組み立てて実践したことで、学習成果が見られ、児童の実践力にもつながっていることを実感できた。
単元構想・実施における参考資料等	・SDGs スタートブック 2021 年度版(東京書籍) SDGs Edu Town https://sdgs.edutown.jp/ ・unicef 持続可能な開発目標(SDGs)関連動画 https://www.unicef.or.jp/sdgs/movie.html

［学びの軌跡（児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど）］

▲ 第1時フォトランゲージの写真（知立市／パラグアイ）

▲ 第2時　日本で暮らす時困ることを書き出す



▲ 第2時　日本で暮らす時困ること／安心・助かること

▲ 第3時　SDGs 取組事例から気になったことを伝える

▲ 第5時　みんなが幸せに暮らせる持続可能なまちを描く

第6時　各グループが書いたまちのイメージ図▶

YES WE CAN ～今日から私は～

学校名	愛知県名古屋市立御器所小学校	授業者氏名	松田　翔伍
対象学年（人数）	小学校5年生（93名）	実践年月（時数）	2022年 1月～2月（9時間）
担当教科等	総合的な学習の時間		

単元名（活動名）	YES WE CAN～今日から私は～	
実践する教科・領域	総合的な学習の時間	
学習領域	A 多文化社会 … 文化理解（ ）／ 文化交流（ ）／ 多文化共生（◯） B グローバル社会 … 相互依存（◯）／ 情報化（ ） C 地球的課題 … 人権（ ）／ 環境（◯）／ 平和（ ）／ 開発（ ） D 未来への選択 … 歴史認識（ ）／ 市民意識（ ）／ 社会参加（◯）	
単元目標	・ボリビアの文化のよさや課題、また、課題解決に関わる日本人の思いを考えることを通して、国際協力の意義を理解する。 ・日本と世界のつながりに気付き、自分にできる身近なことを見付け、行動につなげる。	
単元の評価規準	知識および技能	・ボリビアの文化のよさや課題について知り、国際協力の意義を理解している。
	思考力、判断力、表現力等	・ボリビアの課題について、自分にできることを考え、ポスターや動画などにまとめて、他者に伝えている。
	学びに向かう力、人間性等	・日本と世界のつながりに気付き、自分にできる身近なことを見付け、行動しようとしている。
単元設定の理由・意義（児童生徒観、指導観、教材観から）	・コロナ禍の影響により、対面式でのコミュニケーションの機会の減少や学校への情報機器の急速な配備など、世界規模で変化が著しい時代となった。児童は、多くの情報に触れる機会が増え、そこにアクセスする技能も身に付けている。一方で、世界で起こる問題や課題については、知識として知っていても自分事としては捉えられていないようであった。 ・世界で起こる問題や課題は、巡り巡って私たちや私たちの住む日本にまで影響が及んでいることがほとんどである。日本と世界のつながりを認識することで、世界の課題を自分事として捉えられるようになると考える。そこで、ボリビアの環境問題の解決に関わる NPO 法人「DIFAR」（ディファル）を教材化しようと試みた。今、DIFAR ではゴミのポイ捨てが日常的に行われているボリビアの町に対して、日本の学校の伝統的な掃除文化を広める活動を行なっている。ボリビアでは掃除は市役所で雇用された人が行う仕事の一つであり、日本の掃除文化を広めることには課題がある。本単元では、児童が多文化共生を目指すDIFARの活動に参加することで、体験的に国際協力の意義を理解させることができると考えた。 ・本単元では、次の点が重要だと考える。「ボリビアの課題にばかり着目させるのではなく、ボリビアの良い面にも着目させ、ボリビアと肯定的に出合うこと」「DIFAR の方の思いに触れることで、国際協力の楽しさを感じさせること」この2点である。	

［単元計画（全9時間）］

時	ねらい	学習活動	資料など
1	ボリビアクイズを通して、ボリビアの文化のよさについて知り、関心を高める。	**ボリビアについて知ろう** ・ボリビアクイズを行い、関心を高める。	『世界の国を知る世界の国から学ぶ　わたしたちの地球と未来ボリビア共和国』
2	ボリビアの課題について知る。	**ボリビアの課題を知ろう** ・3枚の写真を見て、カメラマンは何を伝えたかったのか考える。【フォトランゲージ】	
3	課題が及ぼす影響について考えることで、課題を自分事として捉える。	**課題が及ぼす影響について考えよう** ・もしも、課題がそのままだったらと、課題が及ぼす影響を考える。【派生図】 ・課題解決の方法を自分なりに想像する。	
4	世界の課題解決の具体的な方法やそこに携わる人々の思いについて知る。	**課題を解決しようとしている人々がいることを知ろう** ・課題解決に関する写真を見て、どんな人のどんな思いが読み取れるか考える。【ストーリーづくり】	NPO 法人 DIFAR の活動報告書
5	世界の課題や、その解決の具体的な方法について知る。	**NPO 法人 DIFAR の活動や関わる人々の思いを知ろう** ・ボリビアの環境問題の解決に関わるNPO 法人 DIFAR の Web ページをもとに、どのようにして課題解決に取り組んでいるか調べる。	
6	ゲストティーチャーに対する質問を練り上げることを通して、課題解決への思いを知る。	**課題解決に携わる人のお話を聞こう** ・代表の瀧本里子さんに質問したいことを考える。	
7	ゲストティーチャーの話を聞いたり、質問したりして、国際協力の意義について理解する。	**地球の裏側にいる瀧本さんに質問してみよう** ・Web 会議アプリ「Zoom」を使用し、ボリビアに住む瀧本さんたちと繋がって、これまでの活動内容とこれからの活動内容「掃除プロジェクト」についてのお話を聴く。代表者が質問をする。	Web 会議アプリ「Zoom」を使って、ボリビアとつなぐ。
8	世界の課題を解決するために、自分にできる身近なことを見付ける。	**掃除プロジェクトに自分たちも関わってみよう** ・前時を振り返って、瀧本さんたちから学んだことをまとめる。 ・日本の掃除の文化をボリビアに広めるために、「自分たちにできること」を考え、付せん紙に書く。	
9 **本時**	世界の課題を解決するために、行動する。	**課題解決のために行動しよう** ・「自分たちにできること」を整理しよう。【二次元軸】 ・できそうなことに取り組んでみよう。	

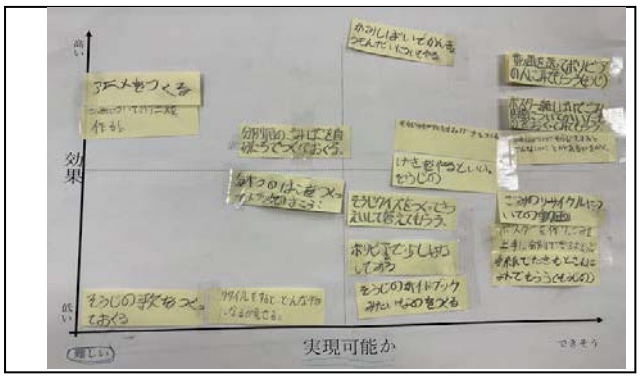
［本時の展開（9時間目）］

ねらい	世界の課題を解決するために、行動する。		
過程・時	**教師の働きかけ・発問および学習活動**	**指導上の留意点（支援）**	**資料**
導入 （5分）	**1　前時までの振り返りをしよう** ・ボリビアの環境問題「ポイ捨てが日常化していること」について、写真をもとに振り返る。 ・NPO 法人「DIFAR」が、課題解決の取り組みを行なっていることを振り返る。		「DIFAR」の活動報告書や Web ページに掲載されている写真を使う。
展開 （35分）	**2　ボリビアの環境問題を解決する取り組みに参加しよう** ・「自分たちにできること」という視点で、付せん紙にできることを書く。 ・グループで、「自分たちにできること」を整理する。 【二次元軸】 ・グループで整理した二次元軸を、共有する。 【ギャラリー方式】 ・実現可能性が高く、効果も高いことを全体で共有する。 （反応例） ○ 掃除をしている動画を撮ってボリビアに送ろう ○ 掃除の仕方を伝えるポスターを描いて送ろう ○ 「ポイ捨て禁止」や「ゴミの分別」を伝えるピクトグラムを作って送ろう ○ 掃除のよさを伝えよう ○ きれいな場所を自分たちでつくるよさを伝えよう	・付せん紙をたくさん用意する。 ・書くことに困っている児童に対しては、「みんなでできることはないかな？」と個別に声を掛けたり、無理だと思ってもとりあえず書くように伝えたりする。 ・二次元軸の縦軸は、実現可能性の高さ。横軸は、効果の高さに設定する。 ・各グループの実現可能性が高く、効果も高いことを一つだけ短冊に書かせて、発表させる。	
終末 （5分）	**3 「自分たちにできること」を選び、実行しよう** ・発表された意見の中から、実際に行うことを選んで、グループに分かれ、何をするか宣言する。 ・単元を振り返り、学んだことをワークシートに書く。	・グループで輪になり、夢を語るように宣言させる。 （例）私は、ボリビアに掃除をしている動画を撮って送りたい。そうすれば、きっと日本の掃除文化が伝わるはず！	
評価規準に基づく本時の評価	・学んだことを記入したワークシートを見ると、「小さなことかもしれないけれど、自分も何か世界の役に立てる気がしてきた」という行動変容につながるような記述が見られた。また、この後、実際に掃除をしている動画を撮影し、DIFAR に送りたい、掃除のよさを伝えるポスターを作りたいという思いがふくらみ、多くの児童が、実際に行動することができた。一方で、大勢の児童が一つのプロジェクトに参加するような形になったため、やることが見付からずに行動することができない児童もいた。		

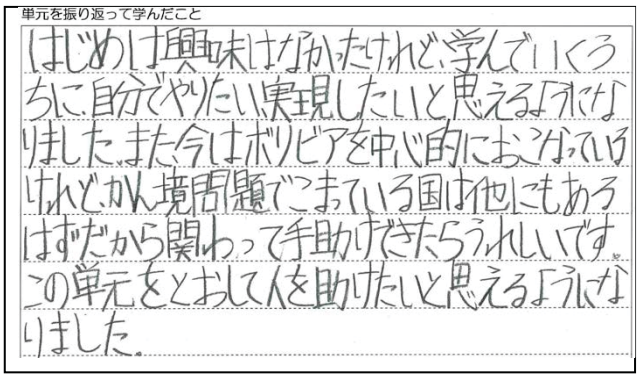
［総括・まとめ］

学習方法および外部との連携	・ボリビアの環境問題の解決に取り組んでいる NPO 法人「DIFAR」の瀧本里子さんと城井香里さんとの出会いが、本単元実施のきっかけとなった。当初は、国際協力の意義を幅広い視点から調べていく学習を計画していたが、DIFAR による日本の学校の掃除文化をボリビアに広めようとする「掃除プロジェクト」があることを知り、国際協力の現場で働く人と子どもたちを出会わせたいという私の思いと、学校の掃除をしている子どもたちの声を聞きたいというお二方の思いが合致したため、実現に至った。 ・ボリビアに住んでいる方と直接話せると聞いた子どもたちは大喜び。調べ学習にも熱が入った。ホンモノとの出会いにより、意欲が高まった。
学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み	・本実践は、学級通信などで保護者にも広めた。また、Zoom で外国とつなぐという初の試みでもあり、その様子を学校内で広めることができた。
苦労した点	・多くの児童は、実際に活躍されている方との出会いによって、ボリビアの環境問題に興味をもち、行動することができた。さらに、視点を広げて、世界の課題解決に参加したいという思いをもつ児童もいた。このような児童の行動を後押しすることができなかった。 ・世界の課題に目を向けさせる以前に、世界の国々やそこに住む人々と肯定的に出会うことが必要不可欠である。肯定的に出会わせるためには、授業者がその情報を十分にもっていなければならない。DIFAR の報告書だけではなく、NIED が作成した資料を使って授業を行なったが、それらの資料を集めることに苦労した。
改善点	・本単元は構想に時間が掛かってしまい、十分な学習期間をとることができなかった。年間を通して実施することで、より多様な人々と出会わせることができたと考える。 ・本物の課題を見付けることで多くの児童が主体的に学ぶことができるので、これからは、学校と外の世界がつながって、子どもたちに本物の課題と出会わせることが必要だと考える。しかし、持続可能性には課題がある。どの学校でも実施できるようにするには、学校と外部とをつなげるパイプとなる存在が必要である。
成果が出た点	・ボリビアを多面的に理解させることができた。 ・国際協力に参加することで、自分にとって身近なことだと捉えさせることができた。 ・課題解決のために行動する経験をさせることができた。
学びの軌跡（児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど）	・単元終了後の振り返りの記述から抜粋する。「始めは興味がなかったけれど、学んでいくうちに自分でやりたい、実現したいと思えるようになりました。また、今はボリビアを中心的に行なっているけれど、環境問題で困っている国は他にもあるはずだから関わって手助けできたらうれしいです。この単元を通して人を助けたいと思えるようになりました。 ・「始めは、わたしたちがボリビアのことを知ったって環境が良くなるわけじゃないと思っていた。けれど、この総合を通して国際協力をやろうとしていることに気付くとともに、自分なりの努力をしようと、前向きな気持ちになれた。物事を進めるためには、まず気持ちが大事だと思った。」
授業者による自由記述	・私は、国際理解教育や多文化共生などの分野について、まだまだ未熟な実践者だと思う。ぜひ、本実践を検討していただき、ご意見・ご感想を頂けたらと思う。
単元構想・実施における参考資料等	・NPO 法人「DIFAR」の Web ページ （ https://difar.jp 最終アクセス 2022 年 2 月 11 日） ・「世界の国を知る　世界の国から学ぶ　わたしたちの地球と未来　ボリビア共和国」（http://www2.aia.pref.aichi.jp/koryu/j/kyouzai/PDF/H20/bolivia.pdf 最終アクセス 2022 年 2 月 11 日）

［学びの軌跡（児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど）］



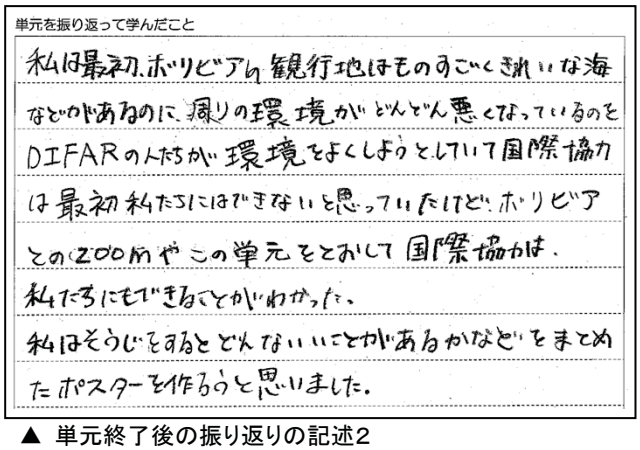
▲ 第9時に使用した二次元軸



単元を振り返って学んだこと

はじめは興味はなかったけれど、学んでいくうちに、自分でやりたい、実現したいと思えるようになりました。また今はボリビアを中心的におこなっているけれど、かん境問題でこまっている国は他にもあるはずだから関わって手助けできたらうれしいです。この単元をとおして人を助けたいと思えるようになりました。

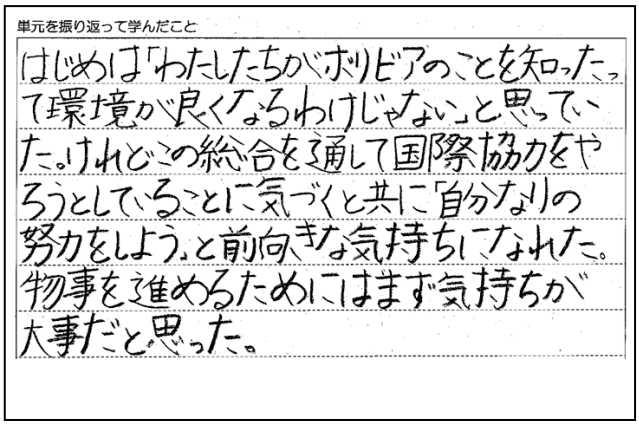
▲ 単元終了後の振り返りの記述1



単元を振り返って学んだこと

私は最初、ボリビアの観光地はものすごくきれいな海などがあるのに、周りの環境がどんどん悪くなっているのをDIFARの人たちが環境をよくしようとしていて国際協力は最初私たちにはできないと思っていたけど、ボリビアとの200円やこの単元をとおして国際協力は、私たちにもできることがわかった。
私はそうじをするとどんないいことがあるかなどをまとめたポスターを作ろうと思いました。

▲ 単元終了後の振り返りの記述2



単元を振り返って学んだこと

はじめは「わたしたちがボリビアのことを知ったって環境が良くなるわけじゃない」と思っていた。けれどこの総合を通して国際協力をやろうとしていることに気づくと共に「自分なりの努力をしよう」と前向きな気持ちになれた。物事を進めるためにはまず気持ちが大事だと思った。

▲ 単元終了後の振り返りの記述3

お悩み解決します！～その時、相談員は動いた～

<table>
<tr><td>学校名</td><td>愛知県立刈谷北高等学校
（中部 BQOE 研究会）</td><td>授業者氏名</td><td>山本 孝次</td></tr>
<tr><td>対象学年
（人数）</td><td>中・高教員（8名）</td><td rowspan="2">実践年月
（時数）</td><td rowspan="2">2022年 1月
（2時間）</td></tr>
<tr><td>担当教科等</td><td>総合的な探究の時間、国際理解　等</td></tr>
<tr><td>単元名
（活動名）</td><td colspan="3">多文化共生授業をやってみよう</td></tr>
<tr><td>実践する
教科・領域</td><td colspan="3">総合的な探究の時間、国際理解（学校設定科目）等</td></tr>
<tr><td>学習領域</td><td colspan="3">A 多 文 化 社 会 … 文化理解（□）／ 文化交流（　）／ 多文化共生（○）
B グローバル社会 … 相互依存（○）／ 情 報 化（　）
C 地 球 的 課 題 … 人　　権（○）／ 環　　境（　）／ 平　　和（　）／ 開　　発（　）
D 未 来 へ の 選 択 … 歴史認識（　）／ 市民意識（○）／ 社会参加（○）</td></tr>
<tr><td>単元目標</td><td colspan="3">・在住外国人がいることの楽しさと課題を知る。
・在住外国人が持つ課題の解決法を考えることで、外国人がコミュニティに参加しやすくする。
・多文化共生社会の実現へ向けて、自分たちができることを考え行動する。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">単元の
評価規準</td><td>知識および技能</td><td colspan="2">・県や市における在住外国人の現状と課題を説明することができる。</td></tr>
<tr><td>思考力、判断力、
表現力等</td><td colspan="2">・在住外国人がいることのメリットとデメリットを対比表を使って整理できる。</td></tr>
<tr><td>学びに向かう力、
人間性等</td><td colspan="2">・在住外国人のお悩み解決法をチームで協力して考え出すことができる。</td></tr>
<tr><td>単元設定の
理由・意義
（児童生徒観、
指導観、教材
観から）</td><td colspan="3">・少子高齢化が進み、労働者人口が減少する日本社会の中で、労働者として日本で働く外国人が年々増えてきている。
・増え続ける国内の外国人との付き合い方を考えなければ、多文化共生社会を築けない。
・国際理解は、外国との国際交流からばかりでなく国内にある異文化の理解からも進めるべき。
・高校生も今から多文化共生社会に対応できる、そして築いていける人になってもらいたい。</td></tr>
</table>

［単元計画（全2時間）］

時	ねらい	学習活動	資料など
1 本時	1．在住外国人がいることの楽しさと課題を知る。	0．アイスブレーク 「わたしの行きたい国はどこ？」 各自、自分が行きたい国をひとつ考えて、その国を表すための3つのヒントをつくる。その国名を忘れてしまったという設定で、他のグループメンバーに当ててもらう。 1．海外生活で楽しみな事・不安なこと ＊あなたは2週間後から少なくとも3年間（あなたの行ってみたかった）海外で暮らすことになりました。 ①楽しみなことは何ですか。②不安なことは何ですか。 2．在住外国人の現状と課題 ＊①数字、グラフなどのデータから在住外国人の現状と課題を読み取る。 ＊②読み取った課題のひとつについて、その原因を探るために因果関係図を描く。	・半模造紙(2) ・サインペン(1セット) ・在住外国人のデータ ＊愛知県外国人人口推移（国籍別）等（愛知県 HP より） ＊新聞記事
2 本時	2．在住外国人の課題の解決法を考えることで、外国人のコミュニティ参加を促すことを考える。 3．多文化共生社会の実現へ向けて、自分たちがこれからできることを考え行動する。	3．外国人のお悩み解決します！～その時、相談員は動いた～ ＊4人1グループの外国人相談所の相談員チームとなる。そこへ届けられる外国人の相談に対して、チームで解決方法を考え、相談者へ提示する。 4．多文化共生へ向けた行動宣言 ＊①日本国内で多文化共生社会の実現に向かって活動している人たちの想いを知る。（動画視聴） ＊②自分たち（日本人）がこれから多文化共生社会の実現に向けて取るべき行動を考え発表する。	・相談事カード ＊外国人ヘルプライン東海 HP 対応事例 ・動画 ＊COLORS　宮城ユキミさんのインタビュー ・半模造紙 ・サインペン ・A4用紙

［本時の展開（1・2時間目）］

ねらい	1．在住外国人がいることの楽しさと課題を知る。 2．在住外国人の課題の解決法を考えることで、外国人がコミュニティに参加しやすくする。 3．多文化共生社会の実現へ向けて、自分たちがこれからできることを考え行動する。

過程・時	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点（支援）	資料
10 分	**0. アイスブレーク** 「わたしの行きたい国はどこ？」 各自、自分が行きたい国をひとつ考えて、その国を表すための3つのヒントをつくる。その国名を忘れてしまったという設定で、他のグループメンバーに当ててもらう。	＊外国にいる自分に思いを馳せる。外国に対するプラスのイメージから入る。	
15 分	**1. 海外生活で楽しみなこと・不安なこと** ＊あなたは2週間後から少なくとも3年間（あなたの行ってみたかった）海外で暮らすことになりました。①楽しみなことは何ですか。②不安なことは何ですか。 →グループごとに発表する。	＊外国で暮らす際には、楽しみな面と不安な面の両面があることを認識させる。	
25 分	**2. 在住外国人の現状と課題** ①数字、グラフなどのデータから在住外国人が増加している現状を知る。コミュニティに在住外国人がいることによってもたらされるであろうメリットとデメリット（課題）を想像する。 →グループごとに発表する。 ②実際の例を新聞記事より紹介する。 ＊「外国から来た子どもたち、言葉や慣習の壁どう乗り越えた」（朝日新聞、2016 年 2 月 8 日）	＊外国人がコミュニティの中にいることが普通になっていることを認識させる。在住外国人は、日本社会の中でどのような思いを持っているのか想像させる。	・在住外国人のデータ ＊愛知県外国人人口推移（国籍別）等（愛知県 HP より） ＊新聞記事
25 分	**3. 外国人のお悩み解決します！～その時、相談員は動いた～** ①「外国人ヘルプライン東海」の活動を紹介する。 ＊3つの壁、困りごとの解決には社会資源とつなぐ ②4人1グループの外国人相談所の相談員チームとなる。そこへ届けられる外国人の相談に対して、チームで解決方法を考え、相談者へ提示する。 →各グループが発表する。	＊在住外国人の困りごとに対して、相談員自身で解決できることはほとんどない。誰に対するどんな支援が必要で、その支援を得るためにはどんな社会資源につなげばよいのかを考えさせる。	・外国人ヘルプライン東海 HP 対応事例
20 分	**4. 多文化共生へ向けた行動宣言** ①日本国内で多文化共生社会の実現に向かって活動している人たちの想いを知る。（インタビュー動画視聴） ②自分たちがこれから多文化共生社会の実現に向けて取るべき行動を考え発表する。（グループ/個人）	＊インタビューされている COLORS の宮城ユキミさんのことを説明してから見せる。 ＊実際の行動へとつながるように「行動」を考えさせる。	・動画：COLORS 宮城ユキミさんのインタビュー
5 分	**5. ふりかえり** ＊今回の多文化共生授業から、①このワークに参加して、よかったこと、新しく学んだこと、印象に残ったことなどを描いてください。また、②このワークをより良いものにするためのアドバイスがあればぜひ書いてください。（本日中に、Google Form に回答をしておいてください。）	＊さらなる学びや行動につながることを期待する。	・ふりかえりシート（Google Form）

評価規準に基づく本時の評価	・愛知県在住外国人の出身国別の数や抱える課題の具体例をいくつか知ることができた。 ・在住外国人がいることのメリットとデメリットを対比表にまとめることができた。 ・在住外国人のお悩み解決法をチームで協力して考えることができた。 ・参加者の全員に自分でも多文化共生の授業をやってみたいという気持ちをもってもらうことができた。

［総括・まとめ］

学習方法および外部との連携	・授業の大枠は外国人ヘルプライン東海の活動と後藤美樹さんによる講義を基にしている。困りごと解決のためには社会資源との連携が大切だと学んだ。 ・愛知県における在住外国人の現状については、後藤さんの他に、愛知県立大学多文化共生研究所アドバイザーの神田すみれさんから学んだ。 ・外国にルーツをもつ若者が学校生活や就活を乗り切っていくロールモデルとしては、COLORS の宮城ユキミさんをインタビュー動画も使って紹介した。
学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み	・校内では、コロナ禍の影響で授業実践を行う時間を確保することができなかった。 ・国際理解教育に関心を持つ中学校・高校教員を対象にオンラインで多文化共生ワークショップを行い、参加した先生方自身に多文化共生の授業に関心を持ってもらった。 ・多文化共生ワークショップ参加者から授業改善のアドバイスを得た。
苦労した点	・外国人が地域にいることはデメリットばかりでなくメリットを生み出していることを示すこと。 ・お悩み相談の相談事例をどの程度詳しく具体的に提示するかということ。 ・オンラインで実施したので、各アクティビティで出された意見や考えをシェアする際に、ファシリテーターがチャットに書き出したり復唱したりして時間がかかった。・
改善点	・「地域に外国人が増えると…」のコーナーでは、外国人自身が困ることと、地域に住む日本人が困ることが混ざっていた。分けると良かったと思う。 ・外国にルーツを持つ子供たちがどんなことで実際困っているのか、状況設定をもう少し絞ると具体的な案が出やすくて良かった。 ・実際に在日外国人の世話をしている NPO の紹介がたくさんあるとよい。
成果が出た点	・愛知県在住外国人の出身国別の数や抱える課題の具体例をいくつか知ることができた。 ・在住外国人がいることのメリットとデメリットを対比表にまとめることができた。 ・在住外国人のお悩み解決法をチームで協力して考えることができた。 ・参加者の全員が自分でも多文化共生の授業をやってみたいという気持ちを持った。
学びの軌跡（児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど）	・グループで話すことで、色々な側面から考えることができてよかったです。 ・愛知県の外国人在住のデータをはじめて見て、具体的にどれくらいの外国人がいるのかわかった。海外に行かなくても、国内に目を向けて多文化共生を学ぶことができる。 ・自分が外国へ赴任することを想像した時は、楽しいことの方がたくさんあったのに、日本に外国人が増えることを想像すると、困ることの方がたくさん思いついてしまった。 ・孤独を感じている人のことを自分事として考えた。 ・オンラインの可能性を感じた。（ワークのオンライン実施／支援にオンライン活用）
授業者による自由記述	・多文化共生社会とはどんな社会だと思いますか。私は、在住外国人がコミュニティの一員としてごく自然に暮らしている社会、というのが一つの答えなのではないかと考えています。刈谷市のワールド・スマイル・ガーデン一ツ木（ワールデン）では、外国人も日本人も特に関係なく草取りなどの畑仕事に取り組む様子を目にしました。畑づくりだけでなくコミュニティづくりでも同じように在住外国人が参加できるような多文化共生社会を思い描いています。 ・今回の授業では、在住外国人の社会参加を阻む課題の解決法を考えるワークを考えてみました。この授業を参考にして自分自身の切り口での授業実践を考えてくれたなら嬉しいです。
単元構想・実施における参考資料等	・愛知県内の市町村における外国人住民数の状況（愛知県 HP より） https://www.pref.aichi.jp/soshiki/tabunka/gaikokuzinjuminsu-2021-06.html ・外国人ヘルプライン東海 HP　対応事例 https://fhelplineinfo.wixsite.com/website-1/blank-2

［学びの軌跡（児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど）］

海外に赴任するとしたら楽しみなこと:
文化、自然、人、食、酒、音楽、言葉、世界遺産、日本とのつながり、旅行、伝統芸能、風習、日本からの解放、現地の人との交流、日本のイメージ、行く前と後のギャップ、テレビ番組:、etc.
海外に赴任するとしたら不安なこと:
治安、医療、薬、相談先、食事があわない、言葉、意思疎通、信頼関係、風習・しきたり、学校、手続き、物価、etc..

▲ 海外赴任するとしたら楽しみなこと・不安なこと

地域に外国人住民がいるとよいところ:
外国人への慣れ、外国にルーツを持つ人の活躍、異国籍レストランとか異国の食材が増えた、働き手が増えた、学校で多様な文化に触れる、etc.
地域に外国人住民がいると困ること::
［外国人］差別や偏見で家が借りられない、犯罪があると疑われる、情報が日本語だけ、保護者に情報が伝わらない、入試のカベ、［日本人］ご近所問題、ゴミ捨てのルール、パーティーで騒がしい、etc.

▲ 外国人住民がいることのメリット・デメリット

外国にルーツを持つ子どもに関する相談::
マリアはフィリピンで生まれの小学 4 年生です。母がフィリピン人で、父は日本人です。生まれてすぐ、祖父母に預けられた。その時、父は母と離婚していた。母はその後、日本に出稼ぎに出ていた。この 4 月に母が再婚して日本に呼ばれた。日本では母の再婚相手の男性と連れ子の弟がいて居場所がない。日本語もほとんどわからなくて、学校の授業にもついていけない。どうしたらいい？

▲ 外国人住民からのお悩み相談（例）

相談員が考えたお悩み解決のためにすること:
家庭の中で孤立しているので、父母を読んで面談する。日本語が勉強できるような環境を提供する。母親にも日本語を教える。その子の文化を肯定的に受け止められるように似た文化のコミュニティを紹介する。子どもの居場所づくりのために、学校と連絡をとり、日本語、勉強の支援法を考えてもらう。スクールカウンセラー配置。父親からの日本語での支援。日本の小学校の制度を教える、etc.

▲ 相談員（参加者）が考えたお悩み解決法

多文化共生社へ向けて必要なこと・もの::
・相手の立場に立って、自分のできることをする
・オンラインを生かして情報共有できる社会に！
・今、それぞれが居る場所で、心の通った交流を!!
・コミュニティの力を高める
・外国人と日本人を繋ぐ場所を作る
・柔らかい心と頭
・将来自分の家を地域の交流カフェにしたい
・People are people through people.

▲ 参加者の一言いただきました！

▲「多文化共生社会へ向けて必要なこと・もの」の発表

かんがえよう！「幸せな生活」に必要なこと

学校名	エスコーラ・ネクター（ブラジル学校）	**授業者氏名**	**神谷　樹**
対象学年（人数）	中高生クラス（5名）	**実践年月（時数）**	2021年 11月～12月（5時間）
担当教科等	日本語教育		
単元名（活動名）	なし		
実践する教科・領域	「生活」をテーマとした日本語授業内で実施		
学習領域	**A 多文化社会** … 文化理解（○）／ 文化交流（　）／ 多文化共生（○） **B グローバル社会** … 相互依存（　）／ 情報化（　） **C 地球的課題** … 人　権（　）／ 環　境（　）／ 平　和（　）／ 開　発（　） **D 未来への選択** … 歴史認識（　）／ 市民意識（○）／ 社会参加（○）		
単元目標	・自信が考える幸せな生活像を明確にイメージし、日本語で伝え合う。 ・日本で生活する上で何が「幸せな生活」を妨げる要因なのか、身近な人へのインタビューから考える ・「幸せな生活」を実現するためにどんな知識や能力が必要なのか、生徒自身が考え、授業内容を提案する。		
単元の評価規準	**知識および技能**	・自身や周囲の人の生活や体験について伝える表現が身についたか。	
	思考力、判断力、表現力等	・自身の「幸せな生活」をイメージし、その実現のために何が必要か考えることができたか。	
	学びに向かう力、人間性等	・自身に必要な学習を主体的に考え、授業内容について提案することができたか。	
単元設定の理由・意義（児童生徒観、指導観、教材観から）	・自分のことや周囲の人のことを伝えようとする中で、日本語の語彙や表現力を獲得する。 ・普段ブラジルコミュニティにいるため日本社会と接点がなく、社会参加をイメージできない生徒が多い。 ・普段の生活の中で日本語を使用することが少なく、日本語学習に対するモチベーションが全体的に低い。		

［単元計画（全5時間）］

時	ねらい	学習活動	資料など
1 本時	「幸せな生活」像を具体的にイメージする。	・様々な生活場面の写真を見て、生徒が「幸せな生活」だと考える順に並び替える。 ・その写真のどこが「幸せ」だと感じたのか、日本語で祖先に書いて、クラスメイトと共有する。	様々な生活場面の写真 付箋 振り返りシート
2	「幸せな生活」に関連する体験を思い出すことでより具体的にイメージする。 自身の体験を伝えるための日本語表現を獲得する。	・最近の生活場面の中から、前回付箋に書いた「幸せ」の要素を含んだ体験を思い出す。 ・その体験をワークシートに記入し、日本語で発表する。	ワークシート 振り返りシート
3	インタビューをとおして、生活上の困難と、その要因について考える。	・家族など周囲の人に、日本で生活する中で困難を感じた体験についてインタビューする。 ・インタビューの内容と共通する自身の体験を話し合う。 ・その困難の要因は何か、考える。	インタビューシート 振り返りシート
4	「幸せな生活」を妨げる要素を取り除くために何が必要なのかを考える。 そのために授業内でできることを考え、提案する。	・自身が考えた「幸せな生活」とそれを妨げる可能性がある困難を関連付ける。 その困難を取り除くにはどんな知識や能力が必要なのかを考える。 ・授業内で取り組めることを話し合い、教師に提案する。	ワークシート 振り返りシート
5	生徒自身が必要だと考え、提案した内容を授業に取り入れ、主体的な学習態度を引き出す。	・生徒の提案を取り入れた授業を実施する。	

［本時の展開（1時間目）］

ねらい	・自身が考える幸せな生活像を明確にイメージし、日本語で伝え合う。		
過程・時	**教師の働きかけ・発問および学習活動**	**指導上の留意点（支援）**	**資料**
導入 10	◇「きのう・きょう・あしたゲーム」【アイスブレイク】 次の人を指名しながら、「おととい」「きのう」「きょう」「あした」「あさって」の順に言葉を言っていく。	・日本語習得が遅れている生徒も参加できるように、語彙の意味を最初に確認し、練習する。	
展開 5	◇「幸せな生活」について話そう ①様々な生活場面の写真をみて、自分のイメージする「幸せな生活」に合致する順番に並び替える。【ランキング】		さまざまな生活場面の写真を印刷したプリント。
15	②上位の写真のどこが「幸せな生活」だと思ったのか、日本語のキーワード（「かぞく」「にぎやか」など）を付箋に書き、写真に張る。【フォトランゲージ】 ・わからない言葉は自分で調べる。 ・調べた内容は各自振り返りシートにメモする。 ・大きく印刷した写真を用意し、付箋をそちらに貼ることで生徒全員が見られるようにする。		大きく印刷した写真 振り返りシート
30	③上位に選んだ写真と、付箋に書いた内容を発表し、各自の順位やキーワードの違いについて、話し合う ・他の生徒の発表でわからなかった言葉はその生徒に質問し、メモする。 ・教師は発表の日本語を必要に応じて修正する。 「〇〇さんは、どの写真を1位に選びましたか。」 「〇〇さんが1位にした写真、□□さんは何位にしましたか。」 「〇〇さんの1位の写真は、△△さんの8位ですね。2人はどうしてその順位にしたんですか？」	・日本語のみで発表するのが難しい生徒は母語を混ぜてもよい。	
まとめ 20	◇振り返り その授業内でメモした言葉をできる限り使い、その日自分やクラスメイトが発表した内容についての文章を書く。		振り返りシート

評価規準に基づく本時の評価	・自身の考えを積極的に発言することができたか。 ・その日新たに覚えた日本語を正確に使用して作文を書くことができたか。

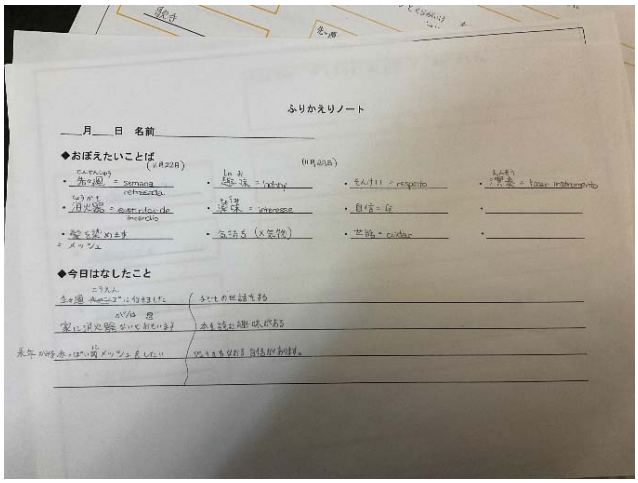
［総括・まとめ］

学習方法及び外部との連携	・参加型の手法を日本語の授業に取り入れることで、生徒たちの発話が多くなった。 ・文法の説明や、発話内の誤りを訂正することは最小限にし、生徒が気負わず話せるように心がけた。
学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み	・授業の教案や教材を学校に提供する。 ・ほぼ毎回ブラジル学校の先生にサポートとして授業に入ってもらった。
苦労した点	・今まで生徒が経験していない手法を取り入れたため、指示がうまく伝わらないことが多かった。 ・様々な日本語習熟度の生徒がいるため、全員が活動に参加できるよう気を配る必要があった。
改善点	・生活上の困難についてインタビュー内容と生徒自身の経験を照らし合わせる活動はあまり生徒からの発言が出なかった。もう少し時間を取ってブレインストーミング等を行った方がよかった。 ・今回は日本語の授業ということで、基本的に日本語のみを使用したが、生徒の母語を使用した話し合いやブレインストーミングなどを取り入れると、より生徒考えが整理され、発話が増えたのではないかと思う。
成果が出た点	・生活場面の写真を使用してランキングやフォトランゲージを行うことで、生徒の「幸せな生活」像が具体的になったのはよかったと思う。特に、ランキングの違いから、生徒がそれぞれの意見を積極的に発言しており、積極的な活動になった。 ・最終的に、教科書的な日本語ではなく高校生同士の自然な会話が知りたい。そのために映画を通して学習したいという提案が生徒から出たことは一番の成果であったと感じる。
学びの軌跡（児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど）	・生徒たちがフォトランゲージで挙げた「幸せな生活」のキーワードは「友だち」や「家族」と何かをする、というものが多かった。 ・生徒が共通して感じている生活上の課題としては、周囲にいる日本人とのコミュニケーションが挙げられた。具体的には「アルバイト先の人と話したいが、話題が見つからない」「日本人の友達はいるが、深い話ができないため、親友になれない」といったものがあった。 ・最終的に生徒同士が自発的に日本の学校に通っていたときの体験などを話し、そこから日本の高校を舞台にした映画を授業に取り入れることになった。（日本の小中学校に通ったことがある生徒は多くない。） ・映画に出てきた、「ウケる」「ネタ」「～んだよねー」といった、普段の学習ではあまり触れない言葉に関心を示していた。また、「好きな相手にお弁当を作ってくる」などの慣習に興味を持ち、教師の学生時代について質問する生徒もいた。
授業者による自由記述	・これまで「生活」をテーマにした日本語の授業を行ってきたが、外国人生活者向けの教材等は生徒が関心を向けにくく、あまり効果的だと感じなかった。 ・今回は直接生活上での使用につながる学習ではなく、自身の理想とする生活とそこに必要な学習を自ら考え、またその中で自身の体験や意見について話す日本語を学習することを目的に据えた。 ・結果、自身のことについて伝えたいという気持ちを引き出せたのか、日本語の定着もこれまでより良かったように思う。
単元構想・実施における参考資料等	・JICA 中部教師海外研修ガイドブック ・日本の高校を舞台にした映画 ・生活場面の写真（「みんなの教材サイト」「いろどり　生活の日本語」より） ・開発教育・国際理解教育の事例集

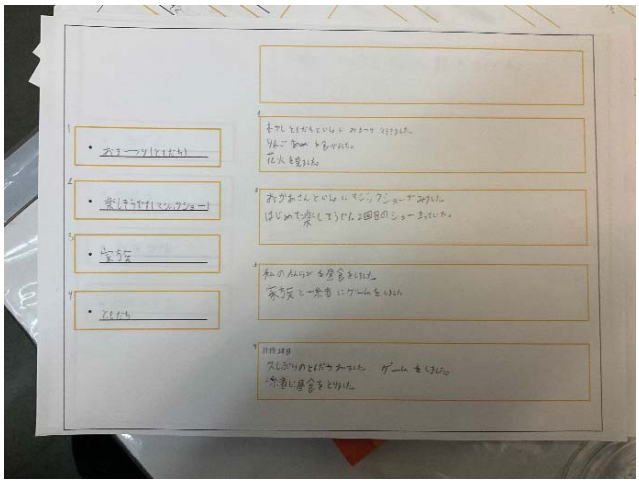
［学びの軌跡（児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど）］

▲「幸せな生活」のキーワードを付箋に書いて貼る生徒

▲ フォトランゲージとランキングで使用した写真



▲毎回使用した振り返りシート



▲「幸せな生活」に関連する体験を記入したワークシート

Ⅵ. 研修全体のふりかえり・評価

※受講者に対し、全ての研修終了後に実施したアンケート結果を取りまとめた。

■ 研修への期待と満足度について

教師国内研修に対する満足度は、「とても満足できた」(60%)、「満足できた」(30%) と回答しており、満足度の高い研修であったといえる【設問 1】。

設問１；本研修は、あなたの期待（あるいは目標達成の支援）を満足させるものでしたか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても満足できた	6	60%
2	満足できた	3	30%
3	ある程度満足できた	1	10%
4	あまり満足できなかった＋満足できなかった	0	0%
	全体	10	100%

設問２；満足した、あるいは満足できなかった理由や要因は何ですか。（主な内容）

（「とても満足できた」の回答者）

◇様々な人と出会い、つながりが生まれたため。

◇たくさんの出会いとたくさんの学びがあったから。

◇実際に多文化共生されている多くの団体を見ることができた。そうした活動をしている人の話を聞くことができて、活動を立ち上げた経緯まで詳しく聞くことができた。

◇難しい情勢下で様々な場所に直接足を運び、参加者同士対面で学びを深めることができたこと。

◇フィールドワーク、NIED や JICA の方々からのサポートが素晴らしかったから。

◇コロナ禍で計画通り行かないときには NIED の皆さんが臨機応変に対応してくださったため。

（「満足できた」「ある程度満足できた」の回答者）

◇満足できたところ：①研修を対面でできたこと。②フォーラムでのワークショップの提供までできたこと。少し満足できなかったところ：①フィールドワークが宿泊を伴うものがなくなり縮小されたこと。②フォーラムを対面でできなかったこと。

◇訪問地での収集物はインタビューが中心となり、教材化するのが難しかった。

■研修を受けた自分自身の意識の変化について

● 受講者の関心の高まり

受講者の 90%が、受講後「より関心が高まった」と回答しており、本研修が受講者の多文化共生に関する情報への関心の高まりに寄与しているといえる【設問 3】。

設問３；研修を通じて、多文化共生に関する情報に関心を持つようになりましか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	受講前から関心があったが、受講後より関心が高まった	9	90%
2	受講前はあまり関心がなかったが、受講後関心が高まった	0	0%
3	受講前から関心があり、受講後も変わりない	1	10%
4	受講前はあまり関心がなかったし、受講後も変わりない	0	0%
	全体	10	100%

研修を通して、受講者全員が、地域の在住外国人と自分たちのつながりを意識するようになったり、多文化共生を進めるために自分にできることを考えるようになったりしたと回答している。【設問 4,5】。

設問４；地域の在住外国人と自分たちとのつながりをより意識するようになりましたか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	よく意識するようになった	8	80%
2	意識するようになった	2	20%
3	ある程度意識するようになった	0	0%
4	あまり意識するようにならなかった＋意識するようにならなかった	0	0%
	全体	10	100%

設問５；多文化共生を進めるために、自分にできることを考えるようになりましたか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	よく考えるようになった	8	80%
2	考えるようになった	2	20%
3	ある程度は考えるようになった	0	0%
4	あまり考えるようにならなかった＋考えるようにならなかった	0	0%
	全体	10	100%

■ 多文化共生に係る教育の実践について

● 実践時間

受講者の当該教育の実践時間は、「1～4 時間」が 50％「5～9 時間」が 50％となっている。平均では 5.0 時間と比較的多くの時間取り組んでいるといえる【設問 6】。

本研修受講前との対比では、「前年度より増加した」が 70％であり、大半の受講者が受講前よりも多い時間の実践をしている【設問 7】。増加した主な理由としては、本研修の学びや契機が要因になっていることがわかる【設問 8】。

設問６；多文化共生に係る教育の実践時間

No.	選択肢	回答者数	割合
1	1～4時間	5	50%
2	5～9時間	5	50%
3	10～14時間	0	0%
4	15時間以上	0	0%
	合計実践時間数	50	時間
	1人当たり平均実践時間	5.0	時間／人

設問７；本研修受講前と比べた実践時間の変化

No.	選択肢	回答者数	割合
1	増えた	7	70%
2	変わらない	3	30%
3	減った	0	0%
	全体	10	100%

←各受講者の実践報告書に基づく。

設問８；実践時間が増加した理由は何ですか。（主な内容）

◇研修を通して、多文化共生について考えさせる教材を得ることができたから。自分の多文化共生についての理解も深まったため、実践ができた。
◇研修を受けて、様々な実践に触れることができたため。
◇研修で授業実践を行ったから。　◇初めて実践を行ったため。　◇社会の変化、認識の変化。
◇多文化共生社会の面白さと必要性に気付いたから。
◇これまで直接的に多文化共生をテーマにした実践はやってこなかったから。

● 実践内容

多文化共生に係る教育の実践の内容は深まったかどうかについては、「とても深まった」60%、「深まった」30%、合わせて 90%の受講者が、実践内容が深まったとしている【設問 9】。

具体的内容としては、フォールドワークの体験、多文化共生の課題や進め方への気づき、参加型手法の学びなどが深まった要因としてあげられている【設問 10】。

設問 9；多文化共生に係る教育の実践の内容は深まりましたか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても深まった	6	60%
2	深まった	3	30%
3	ある程度深まった	1	10%
4	あまり深まらなかった＋深まらなかった	0	0%
	全体	10	100%

設問 10；どのようなことが深まりましたか。

◇生の声を聞き、本当に大切なことは何かを考えることができた
◇直接地域に暮らす住民の話を聞き、どんなことに課題を感じているかなど知ることができた。
◇共生とは、外国人を一市民としてみて接していくことという考えを得ることができた。
◇子どもたちが外国籍の方をはじめさまざまな方達と共に生きる町の姿を描くようになったから。自分にできることを考え、実践していこうという気持ちをもてたから。
◇課題解決のために実際に行動されている人がたくさんいることを知れた。
◇多文化共生の課題解決へのアプローチの仕方は多様であることを知った。
◇動画や写真により、身近な問題であるという意識の共有ができた。
◇外国から転校してきた生徒と、在校生の繋がりを皆が考えるきっかけ作りができたこと。
◇様々な手法を学び、取り入れることができた。　◇意識することの大切さ。

● 参加型のスキル

参加型スキルの 1 つ目の指標①「気づきから行動へつながるプログラムの作成」については、「とても作れるようになった」30%「作れるようになった」40%、「ある程度作れるようになった」30%であり、多くの受講者がプログラムの作成スキルがある程度向上したと認識している【設問 11】。

2 つ目の指標「学習者主体の手法の活用」については、「とても使えるようになった」30%「使えるようになった」60%、「ある程度作れるようになった」10%であり、プログラムの作成スキルよりも多くの受講者が学習者主体の手法の活用力が向上したといえる【設問 12】。

設問 11；研修や実践を通じて、流れに沿って気づきから行動へとつながるプログラムを作れるようになりましたか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても作れるようになった	3	30%
2	作れるようになった	4	40%
3	ある程度作れるようになった	3	30%
4	あまり作れるようにはならなかった＋作れるようにならなかった	0	0%
	全体	10	100%

設問 12；研修や実践を通じて、学習者が、主体的に考え、学習者同士が学び合えるような問いかけや参加型の手法を使えるようになりましたか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても使えるようになった	3	30%
2	使えるようになった	6	60%
3	ある程度使えるようになった	1	10%
4	あまり使えるようにはならなかった＋使えるようにならなかった	0	0%
	全体	10	100%

プログラム作成や参加型手法の活用について、より作れるようになる、より使えるようになるために、研修でどのようなことを提供したらよいと思うか聞いた結果が以下のとおりである【設問 13】。

設問 13；より作れるようになる、より使えるようになるために、研修でどのようなことを提供したらよいと思いますか。

◇今回の研修のように、実際自分たちがワークショップをやってみること。
◇より多くのワークショップを体験する機会を提供するとよい。研修外の機会を紹介することも含めて。
◇参加型手法を実際に体験し、受講者同士のネットワークが広がったので、次回もあると良いと思う。
◇見学ではなく、実際に交流したり、体験したり、ボランティアとして参加したり、外国人の方々ともっと関わりを深めることで、新たな気付きを得られたり、価値観を変えられる貴重な体験ができると思う。強い思いを持って、授業実践につなげられる。
◇「教師海外研修ガイドブック」を読み込んだ上で、フィールドワークに参加し、何をどのように教材化できるか受講者同士で学び合う時間（海外研修では移動時間や夜の振り返りの時間がとても充実していた。）
◇過年度受講者がファシリテートする場を研修内や研修外でつくること。
◇参加者同士で実践を共有する場が増えたらと思う。　◇研修というより、あとは実践あるのみだと思う。

■ 学習者の変化や周りへの波及効果ついて

● 学習者の変化

多文化共生に係る教育の実践により学習者のより良い変化があったかについては、「とても変化があった」「変化があった」「ある程度変化があった」と合わせて受講者の 100％が学習者のより良い変化を実感することができている【設問 14】。

より良い変化の具体的内容については、以下のとおりであった。【設問 15】。

設問 14；多文化共生に係る教育の実践により学習者により良い変化がありましたか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても変化があった	4	40%
2	変化があった	3	30%
3	ある程度は変化があった	3	30%
4	あまり変化はなかった＋変化はなかった	0	0%
	全体	10	100%

設問 15；学習者にどのようなより良い変化がありましたか。（主な内容）

◇言葉の壁･制度の壁･心の壁という３つの壁というキーワードが深く印象に残り、それらを取り払うために大切なことを深く考えるようになった。
◇話しかけたい、友達になりたい、寂しい思いをさせてはいけない、日本語を教えてあげたい、という気持ちで、外国籍の子を見てくれるようになった。
◇人権週間や道徳の授業など、異なるタイミングで実践した内容が児童の意見として出てきた。
◇外国籍の人に対してだけでなく、「誰もが」暮らせるまちを自分たちで作っていく意識が高まった。
◇実践以前より多文化共生に興味関心を持つようになった。　◇世界の課題に関心をもつ人が増えた。
◇新しい情報に関心をもち、そこに関わる問題を考えるようになった。　◇意識の変化
◇積極的に授業参加しようとする姿勢がより見えるようになった。

● **開発教育・国際理解教育ネットワークづくりへの波及**

１年間の研修や実践を通した開発教育・国際理解教育ネットワークは、100％受講者ができたとしている。具体的内容は、「受講者同士」100％、「学校や団体内」30％、「フィールドワーク先など」50％となっている【設問 16】。

設問 16；１年間の研修・実践を通じて、ネットワークができましたか。（複数回答）

No.	選択肢	回答者数	割合
1	受講者同士でできた	10	100%
2	学校や団体内でできた	3	30%
3	フィールドワーク先などとできた	5	50%
4	できなかった	0	0%
	全体	10	100%

■ 全体を通して

● **最も大きな学びや変化**

「受講者の１年間の研修を通した最も大きな学びや変化」についての回答は、以下のとおりである【設問 17】。

設問 17；１年間の研修を通して、あなたの最も大きな学びや変化は何でしたか？

◇校内や地域だけでなく、全国的に外国からの移住者が増えており、多文化共生について大きなスケールで考えることができるようになった。校内にいる外国籍の生徒のことで、積極的に関わり、学校生活の環境作りをしたいと思えるようになった。
◇学校内での授業公開、研修の企画。学校外での研修、ワークショップの開催を行い、開発教育国際理解教育を拡げていく意識がさらに高まり、実際に行う場面が増えた。
◇最初の一歩を踏み出せたことが大きい。また、自分自身も学ぶ必要があると強く感じたので、これからも学び続けたいと思った。
◇一番大きな学びは、外国人の困りごとを解決するには適切な社会資源とつなげることが大切だということ。
◇ただ教えるだけではなく、学習者に「発見」と「実行」促すことの重要性。（教師の役割に対する認識）
◇「多文化共生」のためには、お互いを知り考え続けることが大切であると思った。
◇ワークショップの進め方が理解できた。
◇学びなおし。さまざまな可能性の掘り起こし。
◇地域と学校が協働するためのスキルと必要性。

● **教師国内研修の良かったところ＝引き続き提供を希望する内容**

◇さまざまな所に赴くことができた点はよかった。
◇よかったところは、もちろんフィールドワークです。国内で多様な文化に触れられること。
◇様々な資料をいただけるので、それを見ながら実践を考えることができるのでありがたい。特に四行詩にまとめる活動は、頭の中を整理しながら実践を考えられるのでありがたい。
◇ブラジル日系社会とのオンラインミーティングは、かけがえのない体験になった。現地に行ってみたいとの思いも強くなった。
◇地域で活躍する方やワールデンに参加している方と直接お話しできたことはよかった。
◇現地でのたくさんの出会いと学び。

● 教師国内研修のより良くするための提案や希望

◇さらに、外国籍の子どもで日本語サポートを受けている子どもや、過去に受けていた方とお話しできる機会があるとよいと思う。
◇もっと海外ともオンラインで繋がるとよかった。
◇少しコンパクトにまとめてもらえると負担が減ると思う。時間と期間が長くて負担に感じた。みなさんいろいろな事情があると思うので、時間通りに終わってほしい。
◇日程的に厳しいかもしれないが、長期休み以外の研修の日程を土日両方だと厳しい時があるので、1 日にまとめたり、次週に分けたり、夏休みに集中して行ったりするのはどうでしょうか？色々な縛りがあると思うので難しいとは思いますが。
◇授業実践に対するプレッシャーがかなり強く、校内での実践をするにあたって、管理職や他学年との調整、授業準備やその後の報告書など、心の負担も多かった。校内で、自分一人で闘っている気もして、辛い時期もあった。学校のシステムそのものがハードで、新しいことを実践するのに大きな壁を感じた。研修と学校とのつながりにおいて、サポートがあれば有難いと思う。

● 実践報告フォーラムの良かったところ＝引き続き提供を希望する内容

◇参加者に研修の報告ができた点。
◇よかったところは、まずは実施できたこと。ワークショップもオンラインとハイブリットで実施できたこと。オンラインの参加者もただ見ているだけではなく、できるだけ参加できるように配慮できたこと。
◇オンラインでも参加できている人がいたので、よかった。午後は、受講者の有志がワークショップを実施するスタイルはとてもいいなと思う。
◇多くの方の実践発表を聞けたこと。素晴らしい実践をされていることに驚いたこと。教師国内研修の報告や、ワークショップにおいて自分が役割を果たせたこと。タイムマネージメントもしていただき有り難かった。
◇ワークショップのファシリテーターが別のワークショップに参加できたこと。

● 実践報告フォーラムのより良くするための提案や希望

◇ポスターセッションでの学びが一番多く他の受講者とのつながりも強まるので、より多くの実践を学び合える時間が増えるとよい。ワークショップは１つでよいので、ポスターセッションの時間が増えるとよい。
◇ポスターセッションによる参加者同士の実践報告で、グループが違うと見に行けなかったのが残念だった。タブレットで撮っておいたものを限定公開で参加者が後から見られるようにするとよいかもしれません。
◇時間が長くて疲れた。

（実践報告フォーラムの準備に関する研修等について）

◇最後の研修（事後研修②＝開発教育指導者研修（実践編）第 4 回）は、開発教育指導者研修（実践編）の方を受講していないので、グループ内で話がずれないように合わせたり、理解してもらえるよう説明したりと、自分の想いをストレートに言いにくいと感じた。
◇グループでワークショップを考えるときに、何人もの人が様々なアドバイスをしてくださったので参考になったが、逆にどうしていいのかわからなくなった。

2021 年度 教師国内研修（多文化共生）報告書

発　　行　　2022 年 3 月

発 行 者　　独立行政法人国際協力機構 中部センター（ JICA 中部 ）

〒453-0872　名古屋市中村区平池町 4 丁目 60-7

Tel：052-533-0220（代表）　Fax：052-564-3751

http://www.jica.go.jp/chubu/

ジャイカ
JICA